

図105 B2区橋梁造構実測図 (S=1/30)

橋梁造構 橋脚・部材 計測表

単位はcm

	長さ	幅	厚さ	くりこみの高さ	くりこみの幅
橋脚A	97.1	11.5	6.9		
橋脚B	91.5	13.0	6.2		
杭 C	45.2	9.2	8.5		
杭 D	46.5	11.8	7.3		
部材 a	79.0	7.1~3.1	3.3	12.5	3.5
部材 b	73.5	9.2~1.4	3.5	14.4	4.0

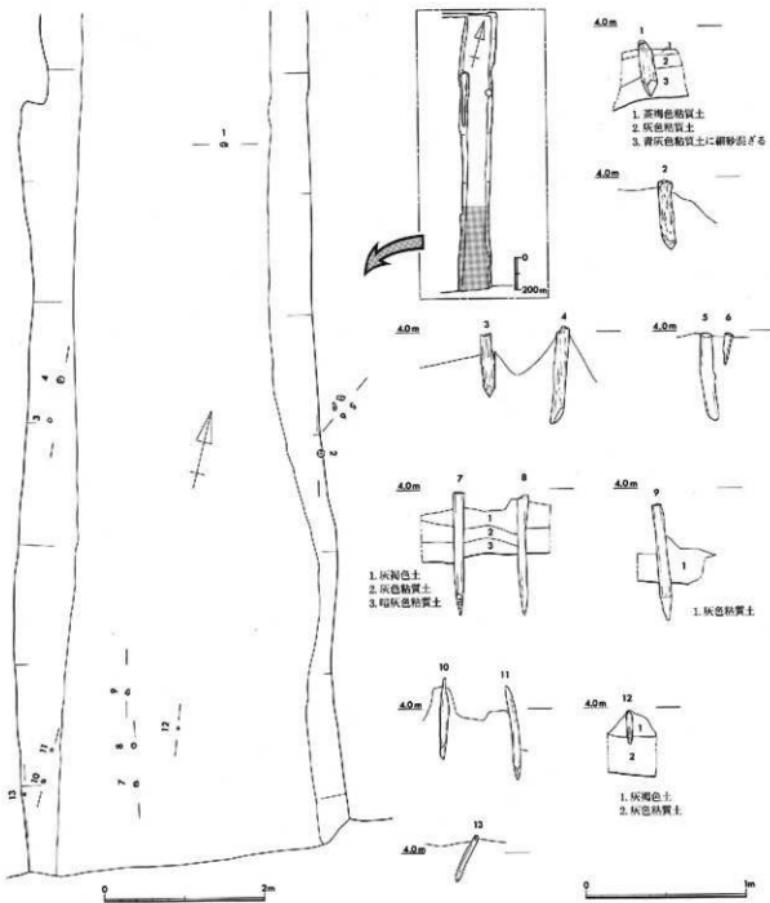


図106 B2区西大溝内の杭列遺構実測図（平面はS=1/60、立面はS=1/30）

そのほかの遺構（図106） 大溝の南側1/3の範囲で大溝の肩部や埋土に打ち込まれた杭を検出した。大溝内から検出した杭のうち1、2、12は先端が底面にまで到達していないことから埋没後に打ち込まれたものと考えられる。7、8、9は大溝と平行に南北方向に並んでいることや、杭の先端が大溝底面を突き抜け、標高3.2mにまで達することから大溝に伴う遺構と考えたい。その他の大溝肩口の杭については時期・性格とも明確でない。

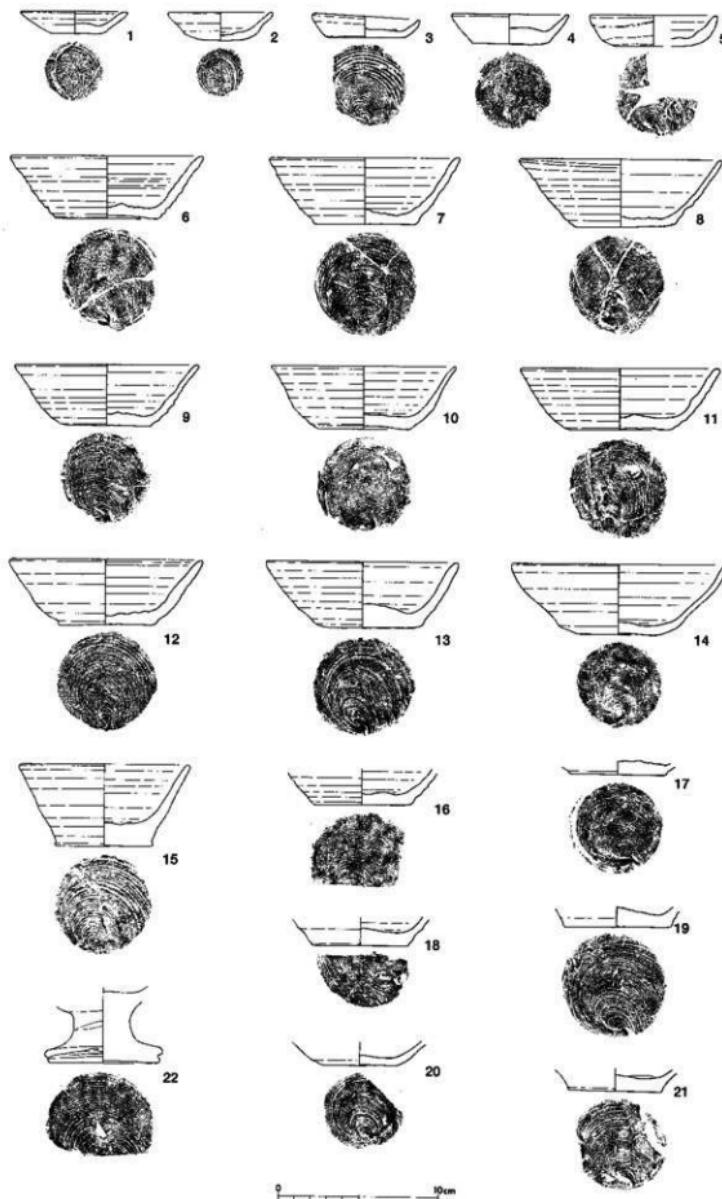


図107 B2区西大溝出土遺物実測図(1) —土師器— (S=1/3)

土器器（図107） 1から5は皿。形態、法量ともバラつきが見られる。1は逆ハ字に直線的に開く体部をもつ。2は底部と体部の境が円くおさめられ、体部中ほどが湾曲する。3も丁寧な作りで、口径に対して底径が大きい。4は底部の器壁が厚く口縁端部に向けて薄く仕上げている。体部は逆ハ字に外方に開く。5も丁寧な作りで、体部は円みがある。6から21は壺。6から8は、やや赤みがかかった肌色を呈するもので、底部から口縁部に向けて逆ハ字に開く。9、10は体部が底部から外方に立ち上った後わずかに内湾して口縁端部に至る。11は体部が円みのある立ち上りである。12、13は底部が厚くやや粗い作りである。14はロクロ成形時の痕跡を残さない丁寧な作りのもの。白色に近い色調を呈する。体部下半が凹みをもち口縁端部に至る。15は器壁の厚い体部にしっかりとした底部が付く。体部は逆ハ字に開く。白色の粗い砂粒が多く混ざる。16から21は底部から体部にかけての破片。22は台付き皿。底径6.9cm。

国産・貿易陶磁（図108） 1、2は瓦質土器。1は鉢。復元口径20.8cm。口縁端部は肥厚し玉縁状を呈する。内面は粗いハケ調整。2は底部。内外面ともナデ調整。3、4は常滑系陶器。壺の胴部。内面に輪積みの痕跡が見られる。4は壺の口縁部。端部は上下に拡張させ、拡張部分が若干内側に傾く。5は越前焼の片口の鉢の底部。内面は輪積みの跡が見られる。外面下半は横方向のケズリ。底部外縁には断面三角形の高台が付く。6から10は中国製磁器。6は白磁の皿。内面見込みに段が付く。太宰府分類のIX類に相当する。7は青白磁の小壺。釉調は淡い緑がかかった乳白色で、外面下半部はかからない。8は青磁無文の碗。9は青磁碗。口縁部が外反することから上田D類に相当するものと思われる14世紀後半から15世紀。10は龍泉窯系青磁碗。太宰府分類I—1類。

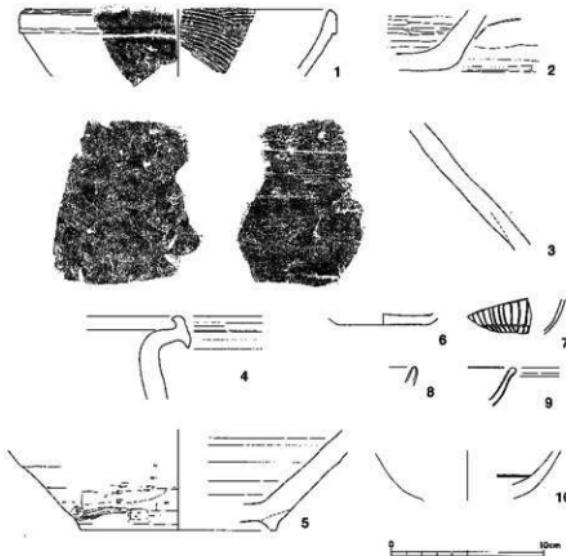


図108 B2区西大溝出土遺物実測図（2）—国産・輸入陶磁器—（S=1/3）

木製品・漆器（図109） 4を除き縁で内外面とも黒色漆塗り。4は内外面とも赤色漆である。器形は4～6以外は高台を有する椀。1は外面、2は見込み、3は内外面に赤色漆で絵が描かれている。1と3のモチーフは草花のようである。4の赤色漆塗りは漆膜が厚く、内面にはハケ塗りの跡が残っている。

木製品・その他（図110～111） 図110の1は杓子。偏平な皿部をもつ。現存長20.0cm、皿部の幅6.2cm、柄の幅は3.2cm、厚さ1.0cm前後。2から4は円形曲物の底板。2は径6.4cmの小形品。中心から7時の方向に径1cmの木釘が打ち込まれている。3は径11.9cm。中心から9時の方向に二個一対の木釘が打ち込まれている。おそらく反対側も同様の構造であったのであろう。3は径13.8cm。厚さ7.0cmと厚手である。側板との接合のための木釘、円孔は見られない。5は折敷。隅をわずかにカットすることから平折敷と考えられる。棧の有無は不明である。6、7は円形曲物の側板。6はケビキの入らないもの、7は入るものである。7は小孔が横方向に連続して空けられている。

図111の1から3は用途不明品。1は工具の柄か。現在縱方向半分に割れ上端を失っている。木

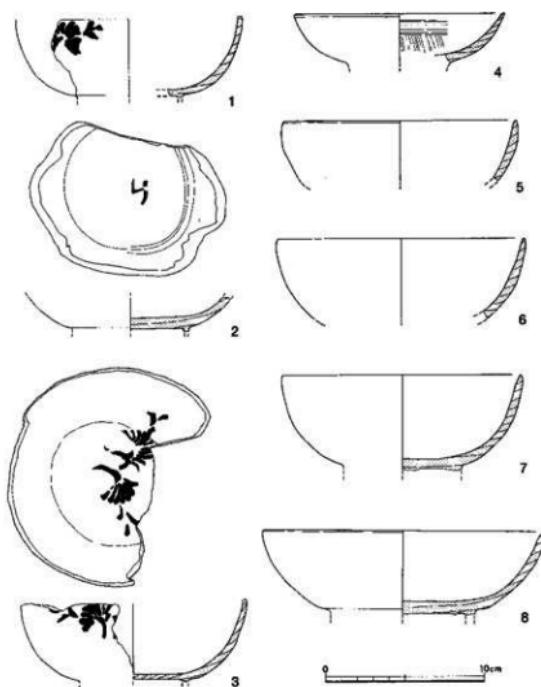


図109 B2区西大溝出土遺物実測図（3）—木製品—（S=1/3）

理と平行に丁寧な加工がなされている。2は付け札状の木製品。長さ17.7cm、幅1.6cm、厚さ0.3から0.4cmの板材の一端を山形にし、もう一方の上位の側縁のV字の切欠きをいれている。切欠きは紐かけ用と考えられる。3は不定形の直方体をなす芯持ち材である。両小口を切り落とし両側縁は削取っている。図面で右側の側面には 1.5×2.0 cm、奥行き1.8cmの孔が空く。余材、廃材の類かもしない。4は下駄。連齒下駄。図は手前に指先、奥にかかとがくるように履いた状態にしている。長さ16.8cm、幅7.8cm、全高4.6cm。台部は長楕円形。前歯は欠く。台の表の前顎と前緒穴の間に圧痕が見られる。二つの後緒穴には鼻緒一杯の大きな楔が打ち込まれている。後緒穴から後木口が長い。後歯は逆台形になっている。5は竹笛か。⁽⁴⁾現在半分に折れ変形した状態になっており、全体に劣化が著しい。特に半分に折れた上側の部分は傷みがひどいため図面の作成を一面しか行つ

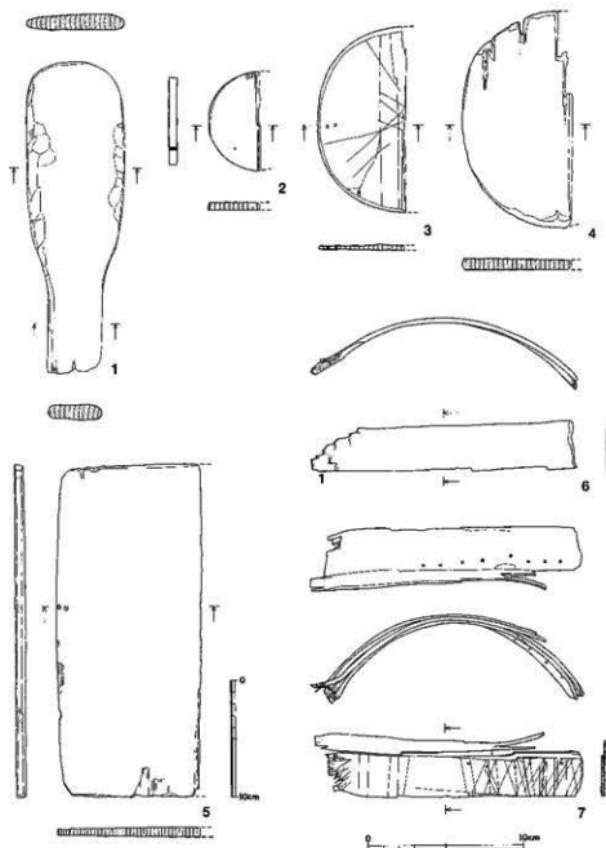


図110 B2区西大溝出土遺物実測図 (4) —木製品— (S=1/30、5はS=1/4)

ていない。全長は17.6cm以上。断面は楕円形で長径1.6cm、短径1.4cm。表面には捲き後、黒色漆を塗布している。A面には長径0.6cm、短径0.4cmの孔が空けてある。B面には桜皮をはさんで三段に0.7~0.6cm×0.4cmの楕円形の孔が空けている。6、7は横柾。6は大形のもので高さ8.7cm、棟の厚さ1.6cm。7は高さ4.0cm、棟の厚さ0.9cm。8は容器状の木製品の縁の一部。黒色漆

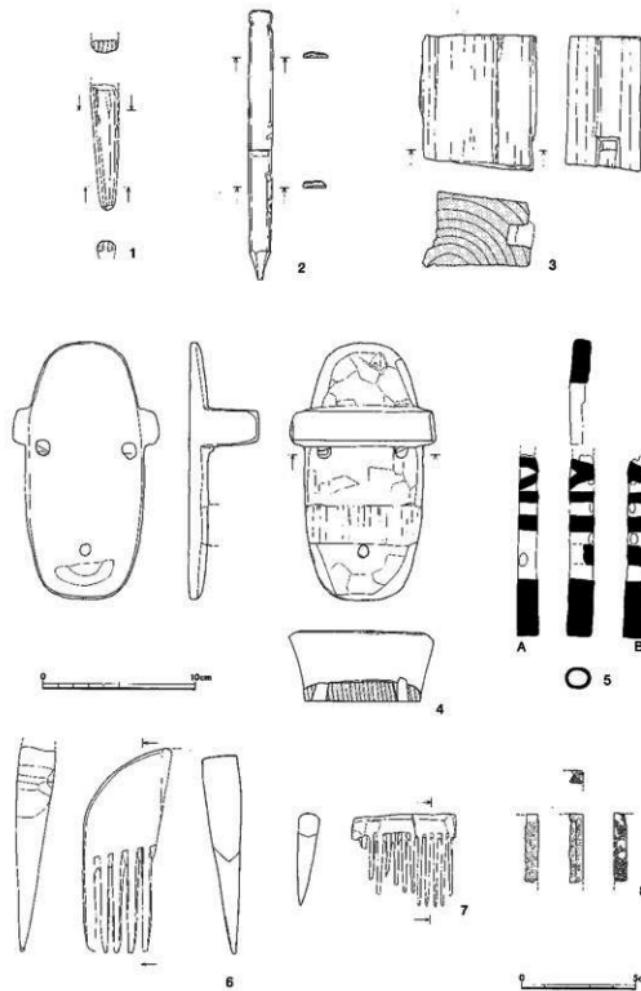


図111 B2区西大溝出土遺物実測図 (5) —木製品— (1~5はS=1/3、6~8はS=1/2)

の上に金色漆（図のトーン部分）を塗布している。

金属製品（図112） 1は刀子。刃部の先端を欠いており現存長17.5cm。刃部の長さ11.9cm、最大幅1.9cm。茎部は長さ5.6cm、最大幅1.2cm。2は小柄。半ばで「く」の字に折れ曲がっている。表面には瓜の文様が彫り表現されている。長さ10.3cm、幅1.7cm、高さ0.5cm。

錢貨は8枚出土している。6は模鋳銭でその他のは渡来銭である。7は磨滅しており錢種不明。8は二つに割れており一部欠けている。内訳は表の通りである。

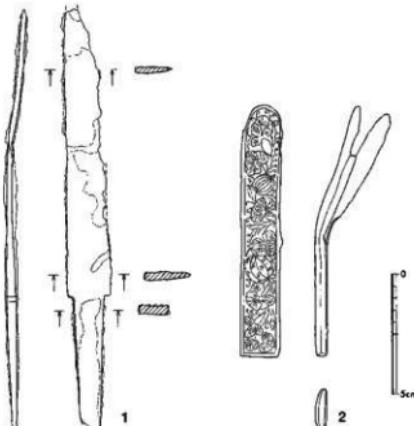


図112 B2区西大溝出土遺物実測図 (6)
—金属製品— (S=1/2)

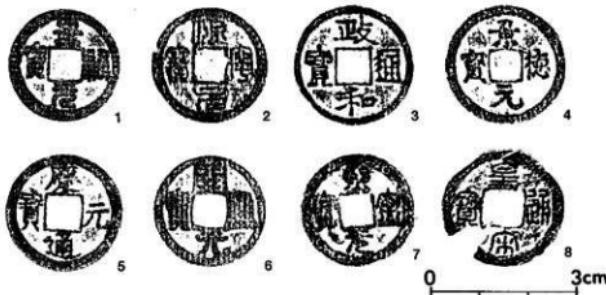


図113 B2区西大溝出土錢貨拓影 (実大)

西大溝出土錢貨観察・計測表

名 称	初鋳年	錢徑(A)/錢徑(B)	内径(C)/内径(D)	錢 厚	量 目
1 景祐元寶	1034	23.01cm 22.94	19.80cm 18.70	0.61~0.55	2.78 g
2 治平元寶	1064	23.71 23.88	20.31 18.92	1.21~0.92	3.99
3 政和通寶	1111	24.68 24.78	21.03 21.29	1.22~1.07	3.80
4 景德元寶	1004	24.62 24.52	20.85 20.70	0.89~0.70	2.57
5 廉元通寶	1195	23.94 23.97	19.81 19.81	0.94~0.71	3.47
6 開元通寶	621	22.95 22.98	20.04 19.61	0.85~0.72	3.02
7 □□元寶		23.35 23.68	19.99 20.08	1.40~0.99	3.34
8 皇宋通寶	1039	24.70 24.59	21.10 20.60	0.89~0.75	(2.05)

参考文献 永井久美男編『中世の出土銭－出土銭の調査と分類－』兵庫埋蔵銭調査会1994

表は同書の「8. 古銭の計測」(9~10ページ)をもとに作成している。

5. 建物

柱穴総数650あまりの検出された。特に調査区の北東部分で検出密度が高い。幾度となく建て替えたが行われたのである。この中から8棟の建物を復原した。建物4は縁ないし底を有するが、それ以外は身舎だけの構造である。また8棟のうち5棟が棟方向を東西にとるもの、残り3棟は南北方向である。軸方位は北方基準で3~6°西に振るものが3棟、8から9.5°西に振るものが3棟、12から13°西に振るものが2棟となる。高い規則性をもって建物が配置されたものといえよう。低地に立地するため柱穴内には礎板、根石を備えるものが多く見られた。また柱模が遺存している場合も多く見られた。なお建物の柱間寸法等の計測値については図中に記した。規模と軸方向は表にまとめてある。

建物1（図114上） 調査区北東部に位置する。3間×1間の規模を有する建物である。棟方向をN-9.5°-Wにとる。桁行き間7.88m、梁行き間約3.79m、床面積29.75m²。柱穴の形状は楕円形から円形のものまである。規模は南桁行きが径34~60cm、深さ18~31cm。北桁行きは平面積楕円形で長径58~90cm、短径48~58cm、深さ21~38cmとまとまりを欠いている。北桁行きに大形のものが並ぶようである。この建物の柱穴には礎板、根石を備えたものが多く見られたのが特徴的である。その内訳は①礎板のみ②根石のみ③根石+礎板といったパターンが見られた。①については1枚のみのものからP319のように3枚重ねられた状態のものまである。柱根は直立するものと、横倒して出土したものの両者がある。次に形状と法量を見てみる。礎板の平面は長方形で15×20cm、厚さ5cm前後であった。特異な例では、P110の礎板は12~13cm角の板材の隙を落し多角形にしている。柱根の太さは14×11cm前後である。柱材の断面は多角形だがP74の柱根は四面を整えた12~13cm角の柱材であった。根石は22~34cm角、厚さ7~10cmの自然石が用いられている。

P58、312、52、110、111の柱穴掘り方の埋土からは土師器細片が微量出土している。1はP74から出土した土師器皿。口径6.8cm、底径3.8cm、器高1.7cm。体部中ほどで稜線をもつ。2はP83から出土した土師器壺。底部は器壁が厚い。底径6.2cm。

建物2（図114下） 調査区北東部に位置する。建物1とは切り合い関係にある。3間×1間の規模を有する建物である。棟方向をN-12°-Wにとる。桁行き間8.2~7.5m、梁行き間4.14m、床面積32.34m²。柱穴はP94が楕円形(63×42cm)である他は径20~39cm、深さ18~46cmである。柱穴には根石、礎板等は見られなかった。

P61、68、87の柱穴内の埋土からは土師器細片が2、3点ずつ出土している。またP94からは青磁片が1点出土している。口縁部の小破片。口縁部は外反しており上田分類のD類に相当するものと思われる。時期は14世紀後半から15世紀前半。

建物3（図115） 建物1、2の南に位置する。3間×1間の規模を有する。棟方向はN-13°-Wにとる。桁行き間9.40m、梁行き間4.38m、床面積39.33m²。P44、281、263、243、276の柱穴内には太さが16~20cm前後の非常に長大な柱根が残されていた。最も良く残っているP44の柱根の長さは91cm。柱根の側面が面取りされ、いびつな多角形を呈している。また、P431の柱根は加工痕が明瞭に残っていた。P44、142、261、260の柱穴掘り方の埋土からは土師器の細片が微量出土している。建物の東辺と平行に柱穴が並ぶが、この建物に付随するものか否かは不明である。この柱穴列のP414の埋土から中国鏡の大觀通寶が1枚出土している（図116）。計測値は表の通りである。

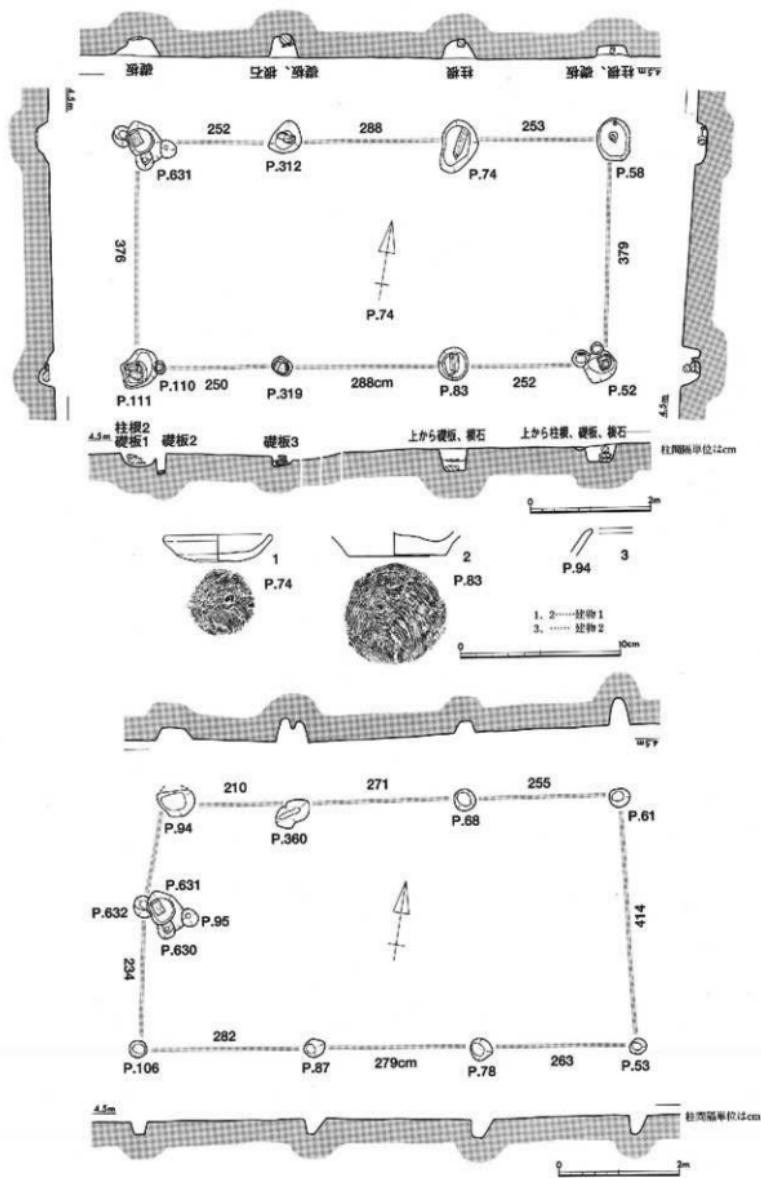


図114 B2区建物1・2実測図 (遺構はS=1/80、遺物はS=1/3)

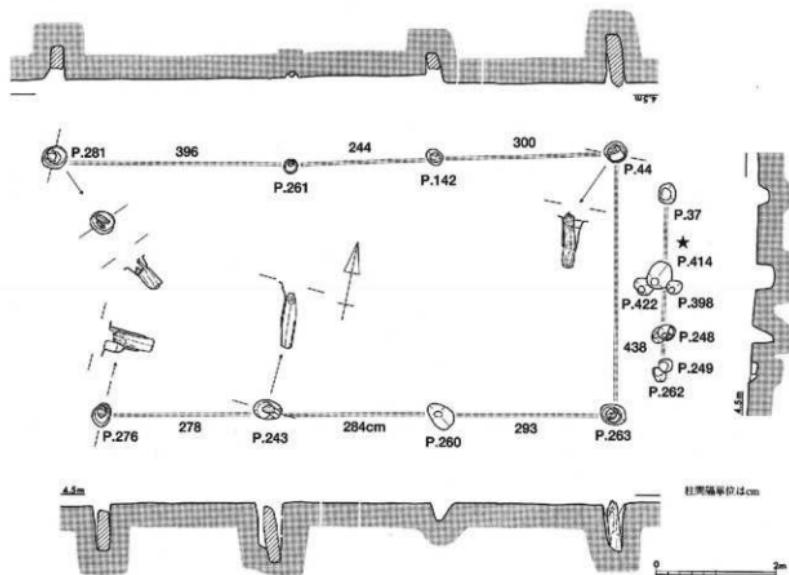


図115 B2区建物3実測図 (S=1/80)

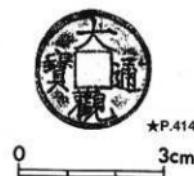


図116 B2区建物3東の柱穴出土銭貨 (実大)

P 414出土銭貨観察・計測表

名 称	初 鋸 年	銭 径(A)/銭 径(B)	内 径(C)/内 径(D)	銭 厚	量 目
大觀通寶	1107	24.85mm / 24.53	21.83mm / 22.54	1.05~0.92mm	3.06 g

建物 1 ~ 3 計測表

遺構名	桁行×梁行	規 模 (m)	面 積 (m ²)	主 軸 方 位
建物 1	4 × 1	7.88×3.79	29.75	N-9.5° -W
建物 2	4 × 1	8.20×4.14	32.34	N-12° -W
建物 3	3 × 1	9.40×4.38	39.33	N-13° -W

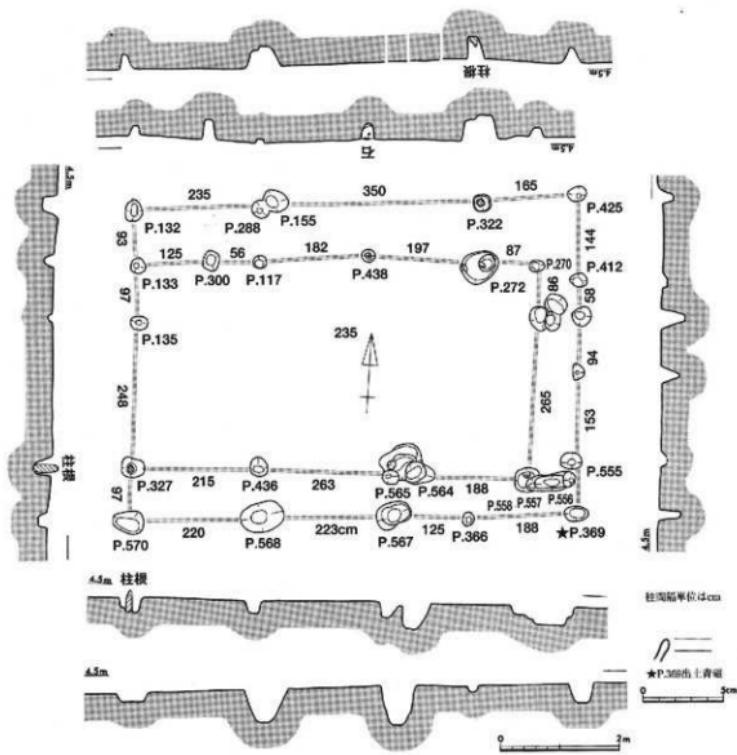


図117 B2区建物4実測図（造構はS=1/80、遺物はS=1/3）

建物4計測表

造構名	桁行×梁行	規模(m)	面積(m ²)	主軸方位
建物4	4×4	7.46×5.25	39.01	N-3°-W

建物4（図117） 建物3の南に位置する。この調査区内で最も柱穴の検出密度が高い部分である。3間×2間の建物の東、南、北側に底か縁側と思われるものが付く。棟方向はN-3°-Wにとる。梁行き間5.25m、桁行き7.46m、床面積39.01m²。柱穴は形状、規模とも不揃いであり、柱間寸法も一定でない。柱穴の内部に礎板、根石を備えたものは見られなかった。柱根はP.322と327で遺存していた。P.322、413、555、567、568、327、564、565、558、556、557、270、272、438、117、133の柱穴の埋土からは土師器の細片が微量出土している。柱穴の中に弥生土器が混入しているものも見られた。

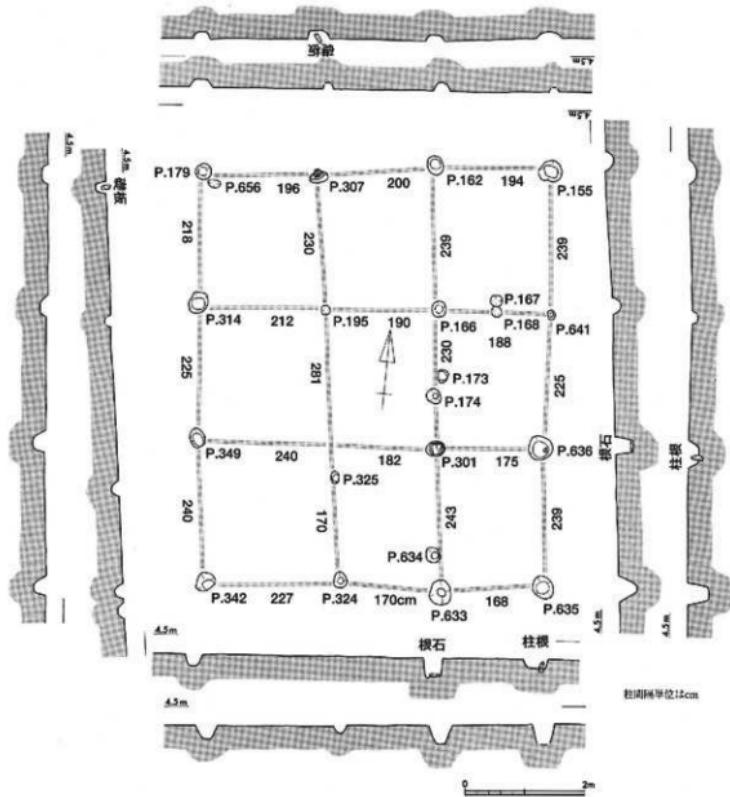


図118 B2区建物5実測図 (S=1/80)

建物5計測表

遺構名	桁行×梁行	規模 (m)	面積 (m ²)	主軸方位
建物5	3×3	6.85×5.86	39.88	N-5°-W

建物5(図118) 建物3、4の西側3.0mに位置する。3間×3間の規模を有する。棟方向はN-5°-Wにとる。桁行き6.85m、梁行き5.86m、床面積は39.88m²。P349と301の間の柱穴は認められない。柱穴は径12~40cm、深さ11~33cmと不揃いであり、柱間寸法も一定ではない。柱穴に礎板、根石、柱根が残されていたものはわずかである。そのうちP307の柱根は抜穴を残しているものであった。

P314、634の柱穴掘り形の埋土からは土師器の細片が1点ずつ出土している。

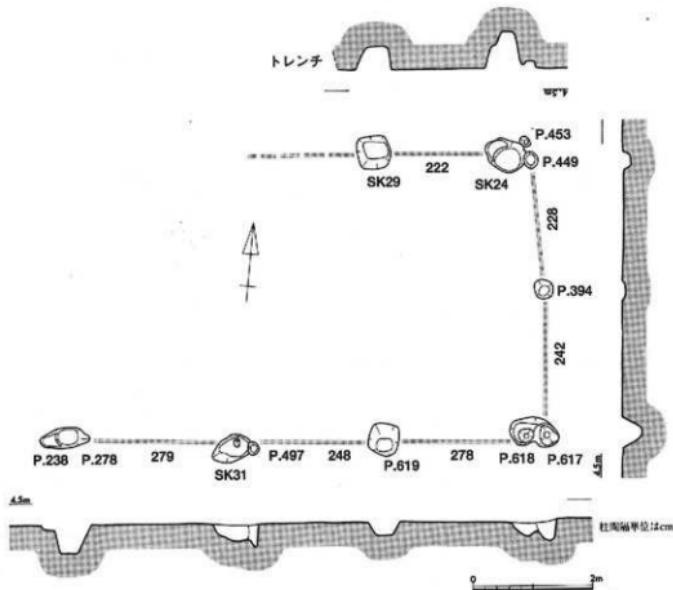


図119 B2区建物6実測図 (S=1/80)

建物6計測表

造構名	桁行×梁行	規模(m)	面積(m ²)	主軸方位
建物6	3×2	8.00×4.90	39.20	N-6°-W

建物6(図119) 調査区の中央から少し南東側に位置する。トレンチにより北側桁行きの約1/2を壊している。復元すると3間×2間の規模を有する。棟方向はN-6°-Wにとる。桁行き8.00m、梁行き4.90m、床面積39.20m²。柱穴は径33~58cm、深さ25~62cm。

P453、459、394、618の柱穴掘り方の埋土からは土師器細片が微量出土している。

建物7(図120左) 建物6の3.8m東に位置する。2間×1間の規模を有する。棟方向はN-8°-Wにとる。桁行き間4.88m、梁行き間3.01m、床面積14.34m²。柱穴はやや歪つな円、楕円形を呈しており径28~42cm、深さ17~48cm。

P388、453、463の柱穴掘り方の埋土からは土師器細片が微量出土している。

建物8(図120右) 調査区南東隅に位置する。1間×1間の調査区内で最も小規模な建物である。桁行き間2.80m、梁行き間2.17m、床面積6.06m²。P520は土坑12によって切られている。礎板、根石を備えた柱穴は見られなかった。P507に遺存していた柱根は太さ7.5cm、長さ15.5cmであった。

P514の柱穴掘り方埋土からは土師器3点と弥生土器1点が出土している。

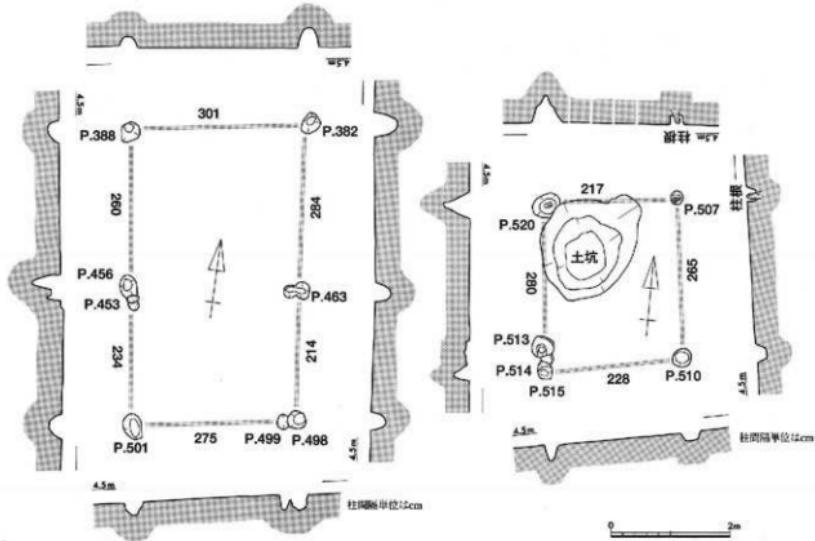


図120 B2区建物7・8実測図 (S=1/80)

建物7、8計測表

遺構名	桁行×梁行	規模 (m)	面積 (m ²)	主軸方位
建物7	2×1	4.88×3.01	14.34	N-8°-W
建物8	1×1	2.80×2.17	6.06	N-8°-W

柱穴列（図121） 調査区北西側の西大溝と溝1の中間あたりに位置している。南北方向に2間、4.68mの規模を有する。P351には根石が置かれていた。またP351の柱穴掘り方埋土からは土師器小破片2点が出土している。

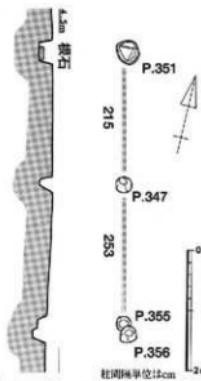


図121 B2区柱穴列1実測図
(S=1/80)

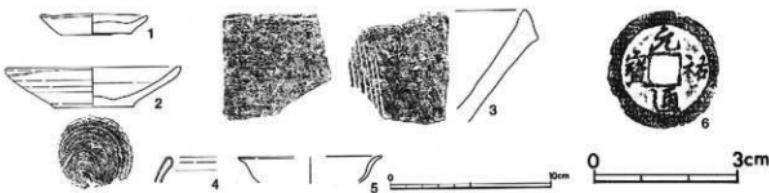


図122 B2区柱穴出土遺物実測図 (1~5はS=1/3・6は実大)

柱穴内出土錢貨観察・計測表

名 称	初 鋸 年	錢 径(A) / 錢 径(B)	内 径(C) / 内 径(D)	錢 厚	量 目
元祐通寶	1068	24.82mm 24.55	19.39mm 18.88	1.22~0.93mm	2.50 g

柱穴出土遺物（図122） 柱穴は総数650余り検出された。このうち大形の柱穴や柱根、礎板、根石の有無等を手がかりにして上記の建物を復元した。建物以外の柱穴掘り形の埋土中からも遺物は出土している。遺物は土師器小片が中心だが中国製磁器、国産陶器もわずかに見られた。このうち実測可能な遺物について図122に掲げた。

1は土師器の皿、2は壺。1は底部が厚く体部は逆八字に開く。口径6.7cm、器高1.3cm、底径4.4cm。2は内外面にススが付着し赤変している。体部は逆八字に開く。3は備前焼の擂り鉢。内面に7条以上の放射クシ書き条線をもつ。備前IV期、15世紀前半か。4は青磁碗。口縁部が外反するもので上田分類のD類に相当するものと思われる。14世紀後半から15世紀前半。5は白磁。端反りの口縁をもつ。15世紀末を中心とする時期か。¹³⁾ 6は中国銭の元祐通寶。計測値は表の通りである。

中国製磁器と国産陶器から15世紀代まで機能したことが考えられる。

4. 土坑 土坑は全部で24基を検出した。このなかには井戸等の内部施設を持たない井戸も含めている。また屋内土坑に相当するものは確認できなかった。土坑の分布を見ると西大溝の東に位置するものと、西に位置するものに大別される。大溝の東側の分布状況からは、特に集中する区画が見られるような傾向は何えない。個々の土坑の機能については明確にし得ない。しかし、当初の機能を喪失した後には館内のゴミを投棄する廃棄土坑になったようである。そのほか、土坑の中には掘り方の壁が上場のラインよりもオーヴァーハングするものが見られた。これは掘削当初からの形状ではなく、その後の崩落に伴うものであろう。また、土坑は涌水層に達するまで掘り下げられているものが大半であった。調査も涌水の影響を受け、土坑底面の形状等の記録が不十分なものとなっている。

以下、西大溝から東側の土坑について西から順に見ていきたい。

土坑1（図123・124・125） 調査区内で土坑9と並び遺物およびゴミの多く出土した遺構である。平面は円形。南北1.87m、東西1.74m、深さ81cmの規模をもつ。底面の標高は3.35m。壁はほぼ垂直

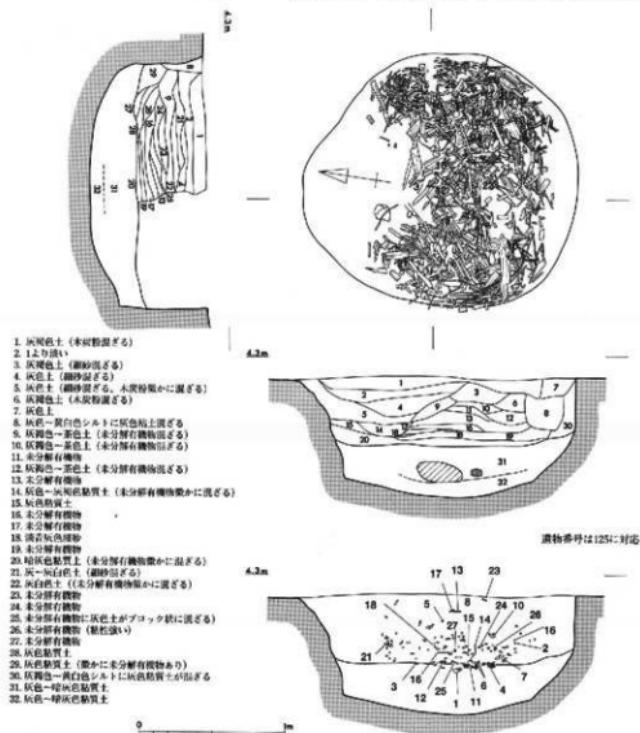


図123 土坑1実測図(1)～遺物出土状況～(S=1/30)

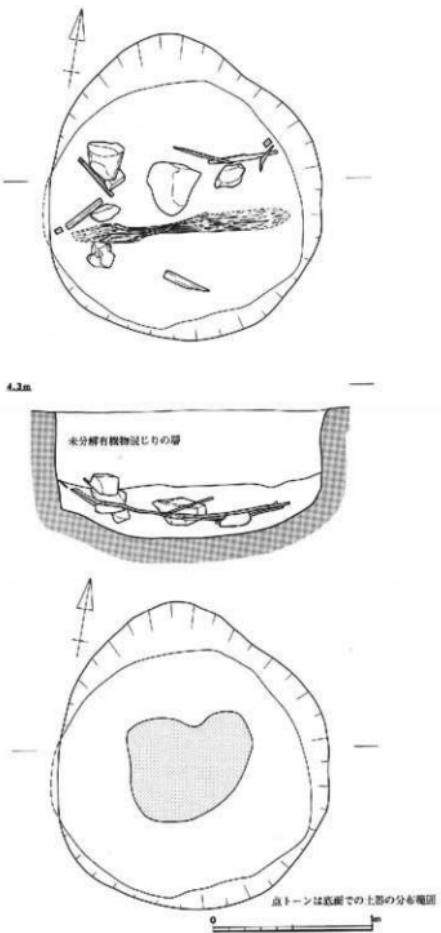


図124 土坑1実測図(2) (S=1/30)
～未分解有機物層除去後及び底面～

直に掘り込まれ底面は皿状を呈する。埋土は細分しているが上層から地山の細砂混じり灰色粘質土、未分解有機物層、比較的均質な粘質土層の三つに大別できる。このうち未分解有機物層は間層を挟みつつ厚さ30cmにも及んでいる。土坑の性格は不明だが、本来の機能を失い、均質な粘質土層である程度埋まった段階から、ごみの投棄が開始されたようである。土層断面でごみの上面を追いかけると土坑中央よりやや南側辺りが高く、厚さも厚いことがわかる。この部分がごみの山の頂部にあたるようである。ごみの間には薄い細砂がサンドイッチ状に挟まれていることから、ごみは数次にわたって投棄されたものと思われる。また最下層の灰色～暗灰色粘質土中には35～20cm角の自

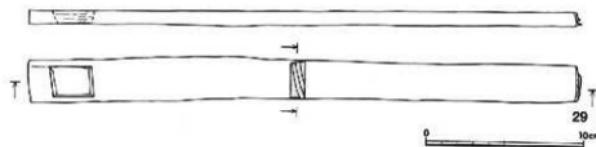
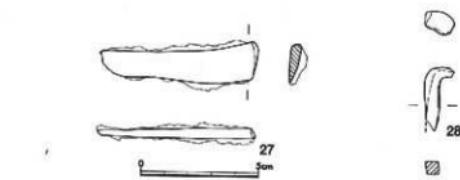
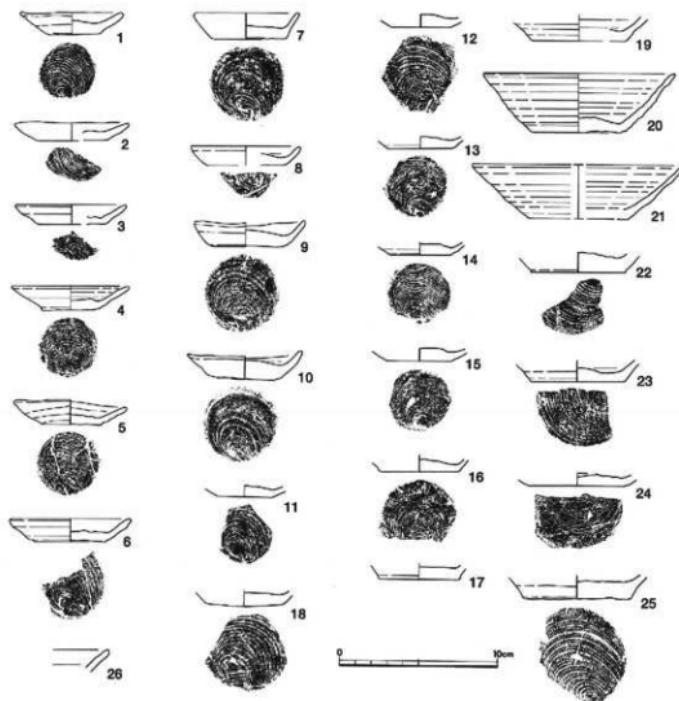


図125 B2区土坑1遺物実測図 (S=1/3、27・28はS=1/2)

然石が6個出土し、その周囲から木製品（図125の28）のほか、長さ約1.2mのわら状の植物を束ねて中央でねじった状態のものが検出された（図124の上段）。これらは同一レヴェルであることから同時期に投棄されたものと考えられるが、底面から浮いた状態であり、遺構本来の機能とは関係ないものと思われる。また土坑の中央底面には、非常に脆弱な状態の土師器が南北65cm、東西80cmの範囲で散らばって出土した（図125の下段）。

出土遺物の大半は土師器である。1から18は皿、19から25は壺である。1から6は色調は赤茶色を呈し器壁は薄い作りである。体部は逆ハ字状に開くものでロクロ成形痕を残している。口径6.4～7.6cm、器高1.2～1.6cm、底径3.5～4.5cm。口径に対する底径の比率は1:0.5～0.7である。7から10は肌色を呈し、底部が厚手の作りである。体部は前者よりも立上りが強くなる。口径6.7～7.5cm、器高1.2～1.9cm、底径4.7～5.1cm。11から18は底部。11から15は赤茶色、16から18は肌色を呈する。19から21は赤茶色を呈し器壁は薄い作りである。体部は逆ハ字状に立ち上りロクロ成形痕を残している。20は口径12.2cm、器高3.7cm、底径5.3cm。22から25は全形は何える資料はない。色調は肌色から灰色を呈し底部は厚手の作りである。26は同安窯系青磁皿。

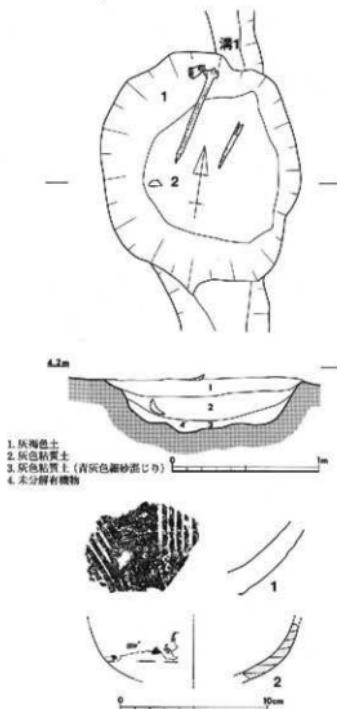


図126 B2区土坑2遺物実測図
(遺構はS=1/30、遺物はS=1/3)

27、28は金属製品。27は刀子、28は角釘。釘は角釘で頭部がL字状に屈曲する。

木製品は29のみ図化している。長さ35.0cm、幅2.3～2.8cm、厚さ0.9cmの板材に1.9×2.7cm長方形の孔を穿っている。

土坑2溝1と同じ覆土であることから同時期に機能していたものと考えられる。平面はややいびつな円形で、南北1.55m、東西1.35m、深さ34cm。底面の標高は3.75m。最下層は流れ込みや崩落による細砂混じりの粘質土であり、その直上には木屑や葉っぱなどの未分解有機物が堆積していた。その上から漆器碗が、最上層から土師質の擂り鉢が出土している。1の擂り鉢は在地産と考えられる。2は外面に赤色漆による絵が描かれている。

図127の土坑3から5は土坑1の北西に位置するものである。

土坑3 平面形は円形。径85cm、深さ80cmの小土坑である。底面の標高は3.4m。埋土は4層に分けられるが、最下層には未分解有機物が多量に混ざった灰色～黒色粘質土が堆積していた。

土坑4 平面形は梢円形。規模は東西1.0m、南北0.75m、深さ1.15mである。土坑底面は

中央より西側のみ一段深くなる。標高は3.05m。埋土は5層に分けられ、3層より下層が粘質土層となる。

遺物は第1層より白磁小破片が出土している。土坑5 ほぼ円形。東西1.53m、南北1.42m、深さ86cm。底面の標高3.25m。断面は逆台形をなす。埋土は5層に分けられるが、このうち第5層は未分解有機物が多量に混ざっていた。

土坑6（図128） 南北2.45m、東西2.65m、深さ85cmの大形の土坑である。二段掘りで深さ25cmの辺りまで垂直に掘り込まれた後、皿状となり底面に至る。土坑底面は水平でなく中央部分の南北80cm、東西70cmが一段深く凹地状となる。底面の標高は3.43m。土坑底面には基盤層の崩落などによる細砂混じりの粘質土が堆積した後に未分解有機物層が堆積していた。このことは土坑1と同様に造構本来の機能を失った後にゴミが投棄されたことを示すものといえる。この上面では土師器小皿（2）と壺（4）が出土した。出土状態を見ると投げ捨てたのではなく置いたかのようである。このほか遺物は第1層から1の皿と5、6の鉄釘が出土している。

1、2は皿。1は口径7.3cm、器高1.4cm、底径4.6cm。体部は逆ハ字に開く。底部の器壁は厚い。2は口径8.0cm、底径5.3cm、器高1.9cm。底部外縁から体部の立上りに強いナデで稜を作る。体部は円みがある。口縁端部を中心にススが付着しており灯明皿として使用されたようである。3、4は壺。3の口縁端部はすうっと引き延ばし、体部は逆ハ字に開く。4は器壁が薄く非常に堅敏な作り。復元口径は15.0cm。内外面にススが付着する。5と6は鉄釘。5は頂部をし字に折り曲げたもの。長さ4.0cm、幅0.8cm、厚さ0.4cm。6は頂部を欠いている。

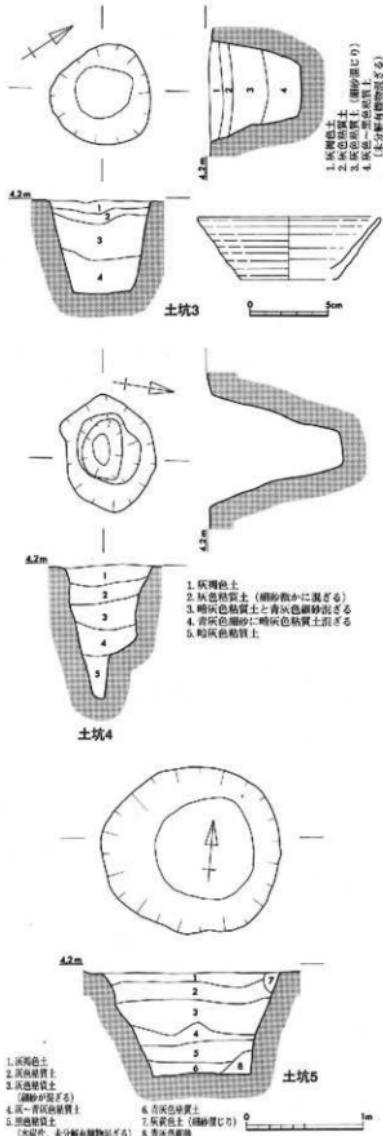


図127 B2区土坑3~5実測図 (S=1/40)

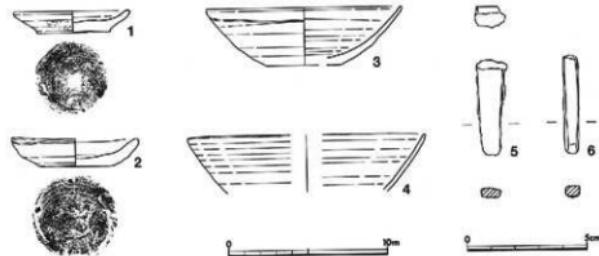
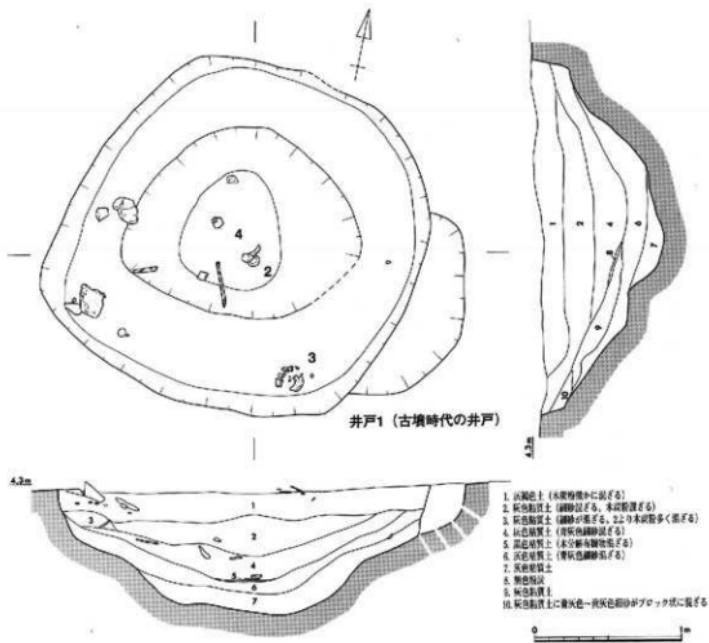


図128 B2区土坑6・遺物実測図（遺構はS=1/30、遺物1~4はS=1/3、5・6は1/2）

土坑7（図129） 土坑6の北東に並んで位置している。墓4と切り合い関係にあり、本遺構のほうが古い。平面はいびつな橿円形。南北3.12m、東西2.69m、深さ90cmの非常に大型の土坑である。底面の標高は3.4m。掘り形は二段掘りで検出面から深さ40cmの辺りまで垂直に掘り込まれた後、幅35cmの段をもち底面に至る。この段に対応して第4層が堆積する。底面に基盤層の崩落に伴う堆積土（第6層）が15cmほどあり、その上面に未分解の有機物が皿状に堆積していた。その面から厚さ30~40cmほど未分解有機物混じりの粘質土層が見られる。この層の大半は竹や葦などで構成されていたが、板材なども散見された。これらは木製品を作る際に出る廃材の類と思われる。遺構本来の機能は不明だが土坑1、6等と同様に最終的にゴミ穴として利用されたものと考えられる。出土品のうち図示したのは図130の通りである。

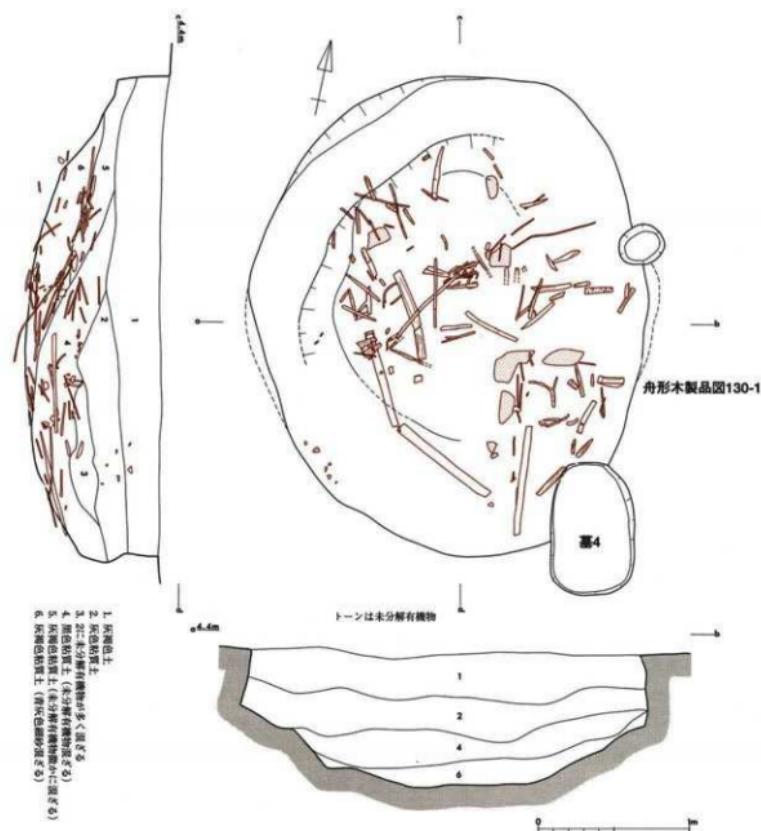


図129 B2区土坑7実測図 (S=1/30)

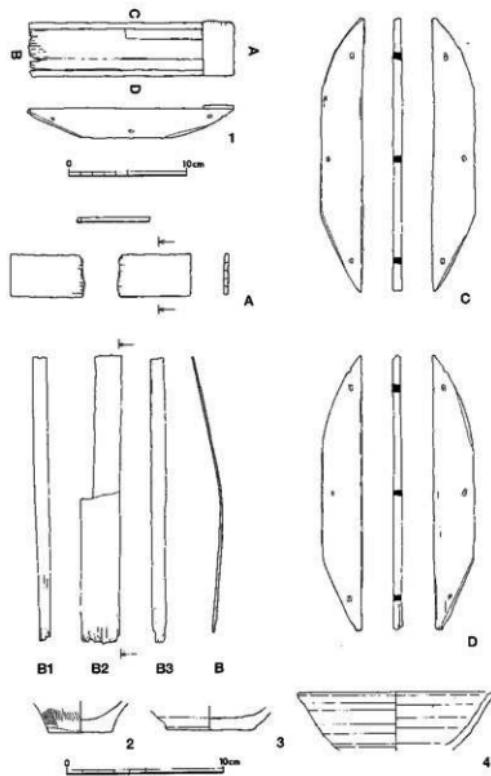


図130 B2区土坑7出土遺物実測図
(1はS=1/4、A~D、2~4はS=1/3)

1は舟形木製品。取上げ時にバラバラとなつたため復元図と各部の図面を掲げている。組み合せ式の構造で四つの部分からできている。Aは船首側の板、Bは底板、C、Dは側板である。組み合わせたとき長さ17.4cm、幅4.5cm、高さ2.6cmになる。Bの底板は厚さ0.1~0.2cmの薄い板である。これを3枚を重ねて「く」字に折り曲げていた。C、Dの側板にはそれぞれ3か所の小孔（断面黒塗り部分）が空けられている。各部の接合のためと考えられるが木釘の類は見られなかった。2は弥生土器の底部で3、4は土師器底である。3は底径5.7cm。底部と体部の境がしっかりと段をなす。4は復元口径12.6cm。端部は肥厚し外に短く折れる。

土坑8（図131） 南北1.87m、東西1.80mの円形の土坑の中央に井側の痕跡が残る。土坑の掘り形は二段掘りとなっていたが、調査中の崩落により平面的には確認できなかった。井側は梢円形を呈し長径1.0m、短径0.75mに復元できる。深さは80cm以上で、底面の標高は3.45mである。埋土は中～下層が未分解有機物混じりの粘質土となっている。遺物は主に上層から出土している。

1～3は皿。1は濃橙色を呈する。口縁端部は肥厚する。2は肌色を呈する。体部は円みのある立上りである。3はほぼ完全な形。口径7.5cm、器高1.6cm、底径5.8cm。口径に対する底径の比率が1:0.77となる。体部は矧く外方へ立ち上がる。4から7は底部から体部の破片。4は皿、その他は壊か。8は壊。復元口径13.8cm、器高3.5cm、底径6.7cm。口縁端部は薄く引き延ばしている。

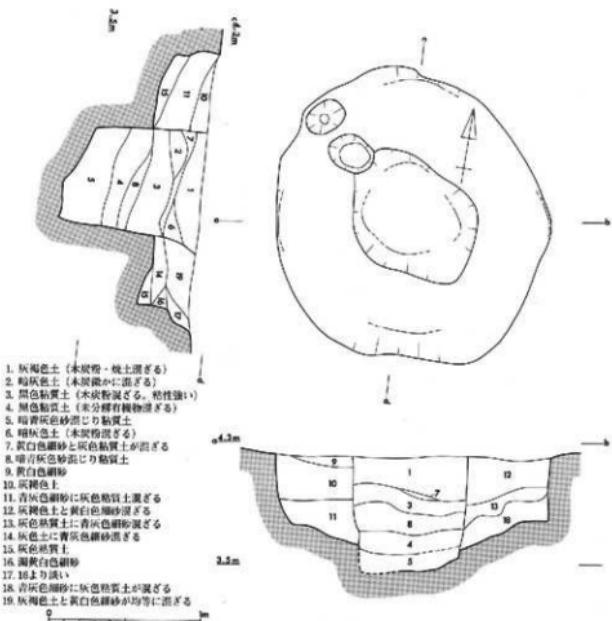


図131 B2区土坑8実測図 (S=1/30)

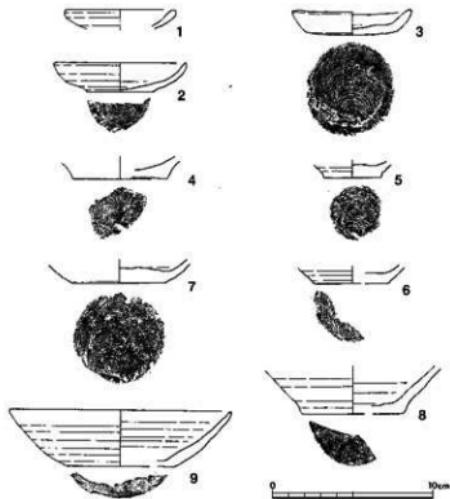


図132 B2区土坑8出土遺物実測図 (S=1/3)

土坑9（図133～135） 土坑1とともに遺物が多く出土した遺構である。当初は井戸として機能し、その後にゴミ坑に利用されている。平面は円形。南北2.58m、東西2.40m、深さ1.10mの大形の土坑である。底面の標高3.15m。土坑の壁は北側では2段掘りとなり、深さ65cmのあたりまでは垂直に掘り込まれ、幅40cmほどの段を持ち底面に至る。井戸設置の際の足場としての築かれたものかも知れない。埋土は細分しているが上層からA：地山ブロック粒・木炭粉混じりの層、B：未分解有機物混じりの層、C：比較的均質な粘質土層の三層に大別できる。Bの未分解有機物層は厚さ0.5～1.0mで、間に細砂をサンドイッチ状に挟んで堆積している。この層は竹や葦、木の葉のほか木屑の類を中心であり館跡内のゴミが投棄されたものと思われる。この下層のCは基盤層の崩落や流れ込みにともなう自然堆積層と考えられる。

土坑底面には井戸の水溜め用の曲物が一段置かれていた。掘り形は涌水層である細砂層に掘り込んでいるため明確に検出できていない（図133のトーン点線部分）。曲物は平面が楕円形を呈し径48×42cm、高さ25cm。曲物内には細砂をベースにわずかに粘質土の混ざったa～c層が堆積していた。序々に側方からの流れ込みで埋まったものと推測される。

1から26までが土師器。1～11までが皿。1、2は濃肌色を呈し、その他は肌色である。1、2は体部が逆八字に開く。2の方が大型である。口径7.2～8.1cm、器高1.5～1.7cm、底径4.5～5.2cm。3、4は体部の作りは粗く歪みがある。口径6.8～7.2cm、器高1.3～1.5cm、底径4.4cm。5、6は口径7.5～7.8cmの大形のもの。器高1.6～1.9cm、底径5.0～5.1cm。7～9は底部の器壁が厚い作りのものである。8、9は底部と体部の境が屈曲気味を呈する。口径7.1～7.2cm、器高1.5～1.7cm、底径4.1～5.2cm。10、11は色調が白色を呈するもので口縁端部を薄く引き出したものである。口径

7.4~8.0cm、器高1.4~1.6cm。底径4.9~5.2cm。13は台付き皿。13は皿部の内面にススが付着している。台部は短くどっしりした形態である。17から26は壺。色調は14から19は肌色、20から25は濃茶色、26は濃橙から肌色を呈する。17は体部中ほどで屈曲して立ち上がる体部を、18は逆ハ字に直線的に大きく立ち上がる体部をもつ。19は最も丁寧な作りのもの。体部は円みのある立上りをし、口縁端部内面を薄く引き出している。口径11.6~12.4cm、器高3.9~4.6cm、底径4.1~6.6cm。20から24は灰色がかたくなすんだ肌色をしている。全形の分かれる20、21、25の体部は逆ハ字に大きく開く。口径11.2~12.7cm、器高3.8~4.2cm、底径5.8~6.7cm。26は濃肌色を呈する。底面には回転糸切り後に付いた板状の圧痕が残る。27は古瀬戸の鉢皿。口縁部は角張り端部には浅い溝がめぐる。体部は中ほどで稜線をもつ。底部内面にはヘラ状工具による深い刻み目が格子状に施される。外面には底部周辺をのぞき灰釉がハケ塗される。古瀬戸前IV期、13世紀後半か。⁽⁶⁾ 28は龍泉窯系青磁碗。外面に錦菫弁を削りだすもので太宰府分類のIX類に相当する。29は白磁の壺。内面の見込みに段を

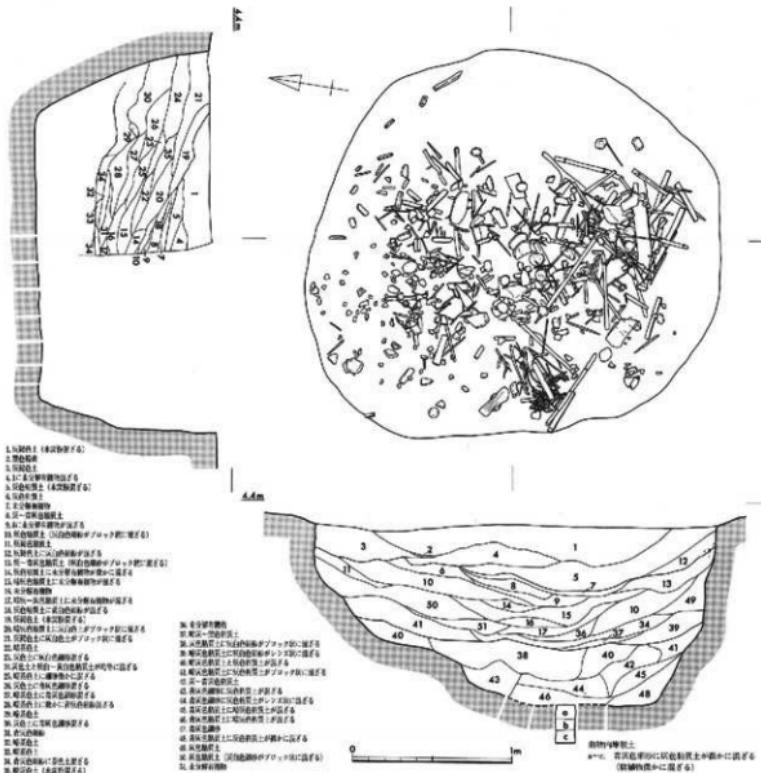


図133 B2区土坑9実測図(1) (S=1/30)

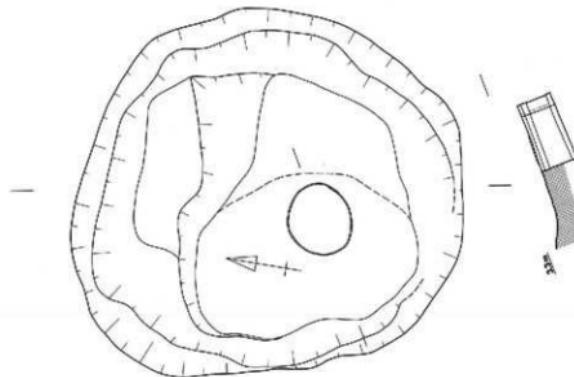
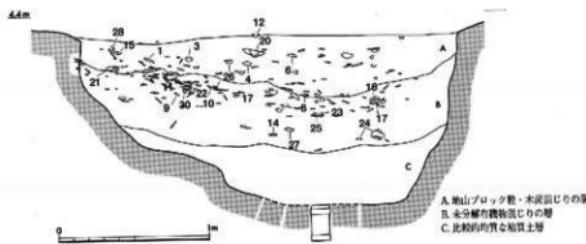
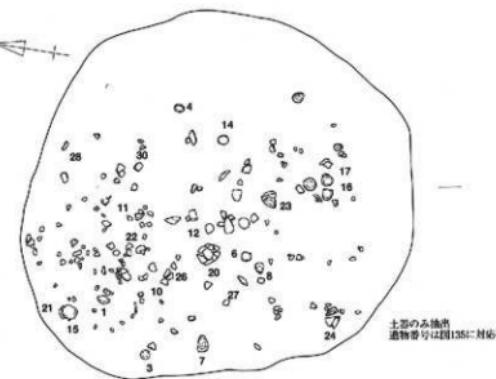


図134 B2区土坑9実測図 (2) (S=1/30)

もつもので太宰府分類のIX類に相当する。13世紀。30は青白磁の合子。12世紀。

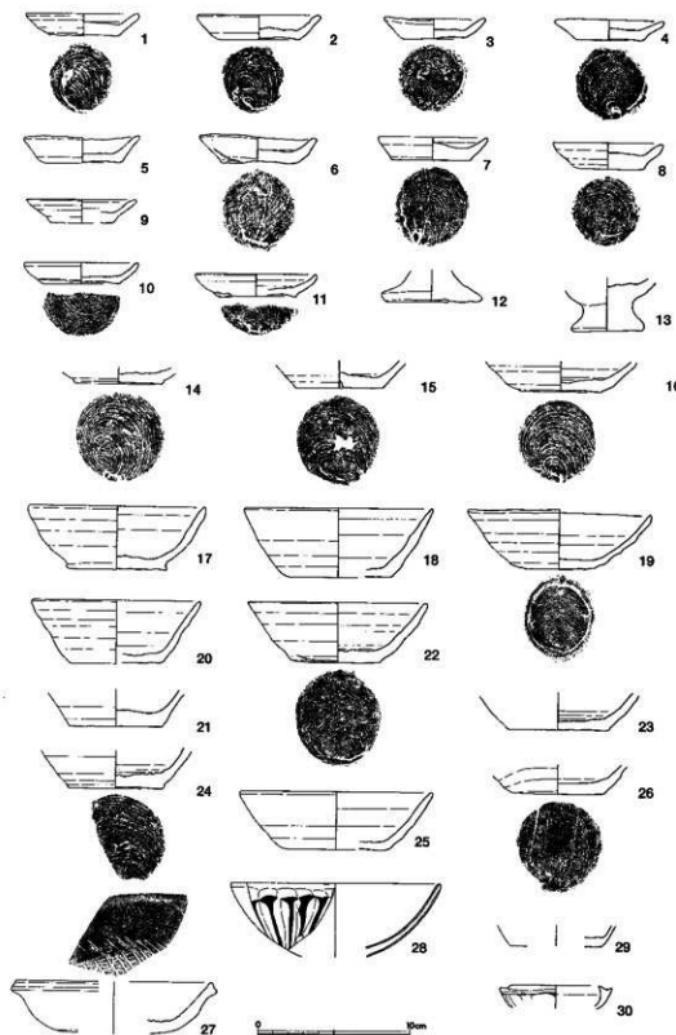


図135 B2区土坑9遺物実測図 (S=1/3)

土坑10（図136） 土坑の掘り形は建物3の柱穴で壊されている。この土坑は本来の形状をとどめていないことが土層観察で確認できる。それは5、17~19、26層は基盤層と同質の細砂層に灰土が帯状に嵌入している点からである。これは基盤層のひび割れ等が原因と考えられるもので、分層してはいるが、本来の掘り方はこれらの内側のラインということになる。その場合、掘り方はオーヴァーハンプするわけだが、これも壁面が決れるように崩れたためであろう。当初はこの土坑は1.5×1.2m程度の規模であったものと思われる。平面はほぼ円形で南北1.84m、東西2.02m、深さ90cm。二段掘りで深さ45cmの辺りまで垂直に掘り込み、幅20cmほどの段をもって底面に至る。底面の標高は3.5m。出土遺物は少なく下層から土師器と漆器碗の小破片が出土した程度である。

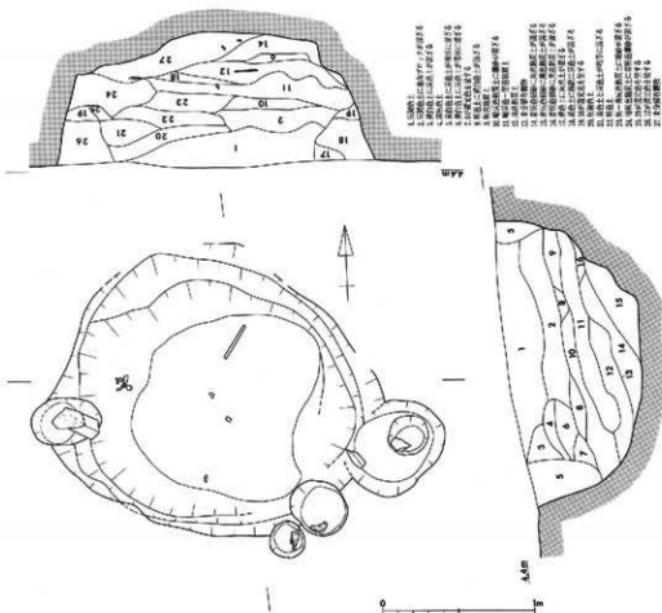


図136 B2区土坑10実測図 (S=1/30)

土坑11（図137） 平面は橢円形。現状で南北1.94m、東西1.65m、深さ1.04m。土坑10と同様に2、3層としている部分は本来土坑の壁であった部分と考えられる。その下方の壁も後に崩れオーヴァーハングしたのであろう。当初の規模は 1.5×1.3 m程度ではなかったかと思われる。土坑の壁は垂直に掘り込まれ底面は皿状を呈する。底面の標高は3.15m。土坑底面には厚さ25cm前後の黒色粘質土が堆積する。その上層は粘質土をベースにわずかに細砂の混ざった自然堆積層である。この中に未分解有機物や土器も若干見られることから、ゴミの投棄と側方からの流れ込みが繰り返されながら埋没していったものと考えられる。

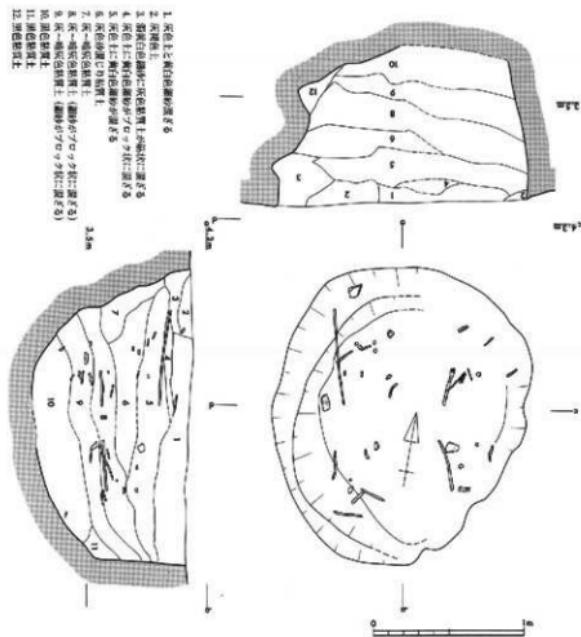


図137 B2区土坑11実測図 (S=1/30)

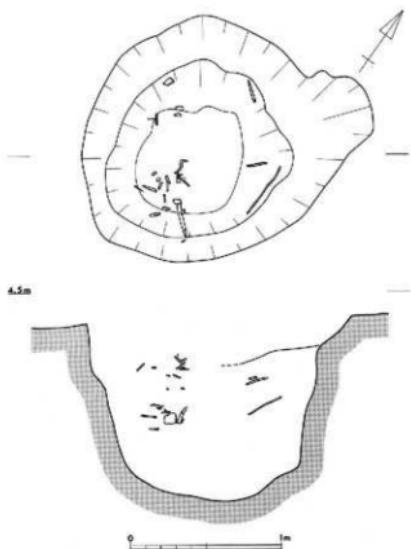


図138 B2区土坑12実測図 (S=1/30)

土坑12(図138) 調査中にセクションベルトが崩れたため土層についての記録がない。規模は1.75×1.60m、深さ1.20m。底面の標高は3.14m。掘り形の北側が突き出たように拡がっているが崩れたためであろう。土坑内からは土師器小破片、杭状木製品のほか未分解の植物遺体が微量ながら出土している。

土坑13(図139) 平面はほぼ円形。南北1.78m、東西1.93m、深さ95cm。壁は2段掘りで深さ80cmのあたりまで皿状に掘り込まれた後、広いところで幅20cmの段をもち底面に至る。土坑底面の標高は3.27m。土坑内には基盤層の崩落とともになう細砂ベースの粘質土の上に未分解の有機物層が拡がっていた。この上層も未分解有機物混じりの粘質土層がつづき、その厚さは40cmにも及ぶ。遺物は土師器小破片が微量出土している。

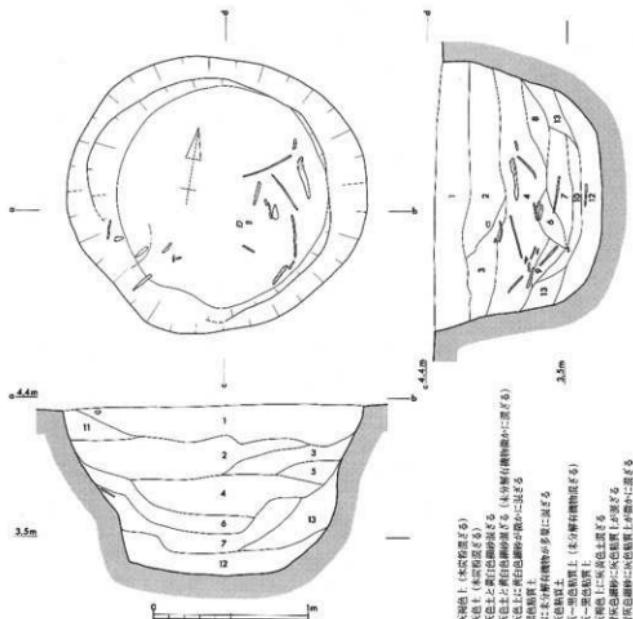


図139 B2区土坑13実測図 (S=1/30)



B 2 区土坑13土層堆積状況

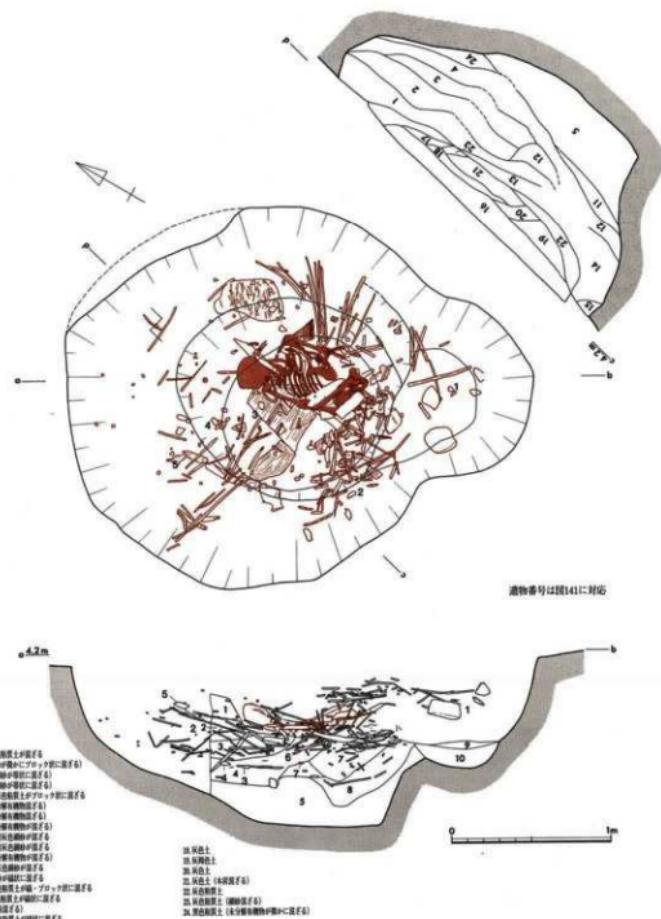


図140 B2区土坑14実測図 (S=1/30)

土坑14(図140) 土坑埋没後に墓5が築かれている。また南西隅には別の土坑が掘り込まれていたようである。土坑内の底面には基盤層の崩落とともに粘質土混じりの細砂層が10~30cm程度堆積しており、その上層が未分解有機物の層となる。他の土坑と同様に土坑本来の機能喪失の後ゴミが棄てられたようである。南北の幅2.17m、検出面からの深さは1.0mで底面の標高は3.1m。掘り形の壁は北側が急な傾き、南側はゆるやかな傾きで底面に至る。また壁の一部(c-cラインのd側)はオーヴァーハンギングしている。

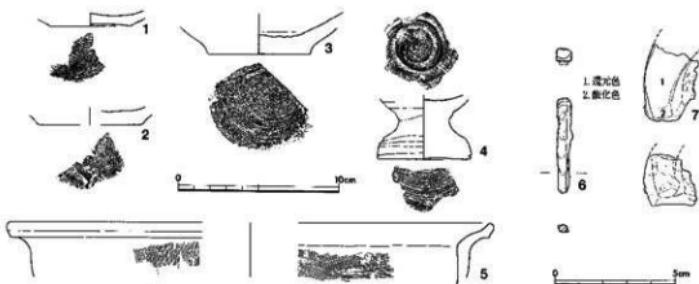


図141 B2区土坑14出土遺物実測図 (1~5はS=1/3、6、7はS=1/2)

土坑14の出土遺物のうち図示し得たのは図141の通りである。1から4は土器類。1から3は壺の底部、4は台付き皿。肌色を呈する丁寧な作りである。脚端部は肥厚し、しっかりとした面をもつ。5は瓦質土器の鉢。口縁部は「く」字に折れ、端部は肥厚する。内外面ともハケ調整が見られる。6、7は金属製品。6は鉄釘、7は羽口。羽口は小破片のため孔径、外径とも不明である。内径側は融解している。破断面では土色の変化が見られ、先端側が還元色を基部側が酸化色を呈している。この他鉄薄も1点出土している。

図142の土坑15、16は調査区の南西で出土したもので、規模、形態とも非常に良く似ている。
土坑15（図142） 平面は円形。壁は垂直に掘り込まれているが、北側の面は崩落によってオーヴァーハンプする。南北75cm、東西65cm、深さ1.04m。土坑底面からは25cm角の自然石がしっかりと置かれた状態で出土した。その上層には厚さ40cmにも及ぶ泥層が堆積していた。

土坑16（図142） 平面は円形。径87cm、深さ97cm。この土坑からも大きな自然石が出土している。自然石は基礎層の崩落にともなう細砂層（第5層）が堆積した後に薄い未分解有機物層を挟んで、投棄されたものと思われる状態で出土している。石は全部で3個あるが、小形の石2個の上に30~35cm角、厚さ20cmの大形の石が出土している。底面から浮いた状態であるだけでなく、石のまわりからも未分解有機物などが出土していることから見て、投棄されたものであろう。土坑内の遺物のうち図示し得たものは1の土器器壺と、2の円形曲物の底板のみである。1の土器器壺は底径6.6cm。2は全体の約1/3が残る。側板との接合のための小孔や木釘は見られない。

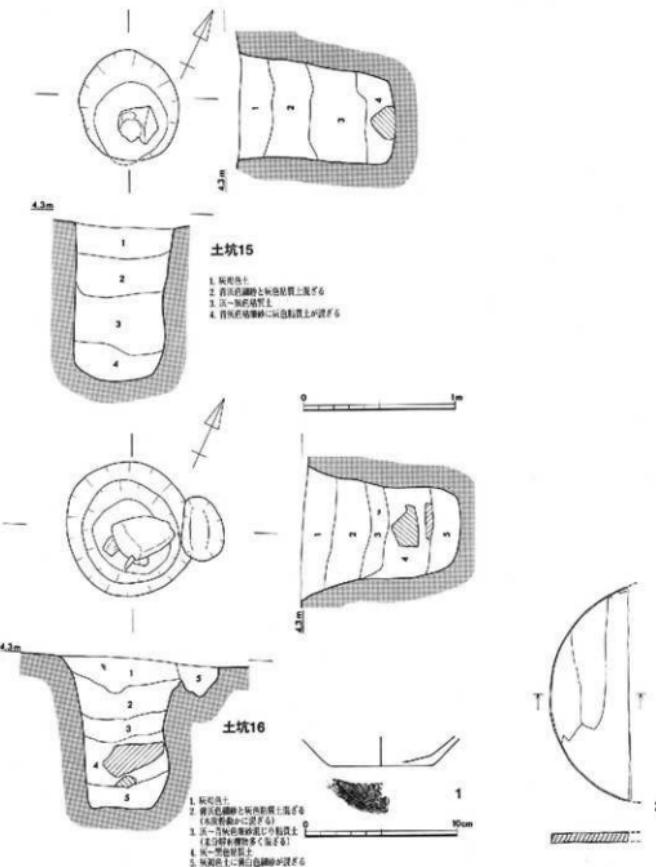


図142 B2区土坑15・16実測図（遺構はS=1/30、遺物はS=1/3）

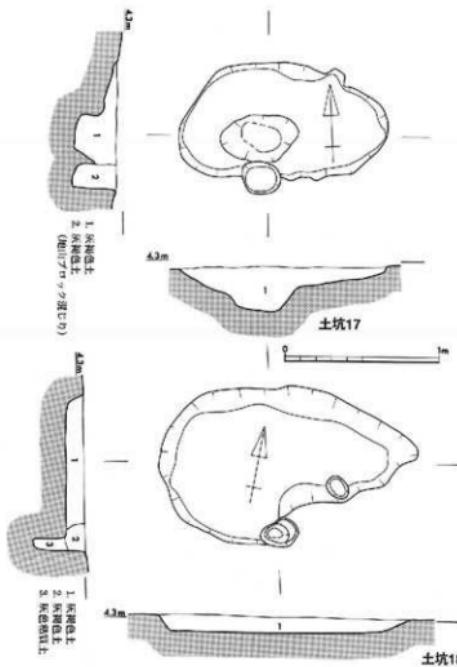


図143 B2区土坑17・18実測図 (S=1/30)

図143の土坑17、18はどちらも東西方向に主軸をおき平面橢円形を呈する浅い皿状の土坑である。埋土は單一層で、遺物は出土していない。以下、計測値のみ記す。

土坑17（図143） 東西1.34m、南北0.73m、深さ10~28cm。

土坑18（図143） 東西1.66m、南北0.96m、深さ10cm。

図144は平面形が円形の深い土坑である。

土坑19（図144） 掘り形の東側を墓2によって壊されている。南北94cm、東西79cm、深さ92cm。下層には黒色粘質土が厚く堆積していた。6層上面にはアワビかと思われる大形の貝化石と5cm角の自然石が出土した。

土坑20（図144） 平面は円形。東西1.0m、南北95cm、深さ87cm。底面の標高は3.35m。断面は逆台形を呈する。遺物は1と2がある。

土坑21（図144） 平面は橢円形。東西1.07m、南北66cm、深さ52cm。底面の標高は3.76m。

土坑22（図144） 平面は円形。南北94cm、東西83cm、深さ36cm。底面の標高は3.84m。埋土は2層で、それと対応するように壁面に稜線がある。南側の浅い凹みを壊して掘り込まれている。

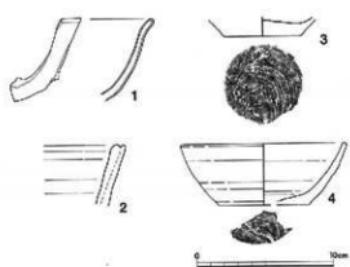
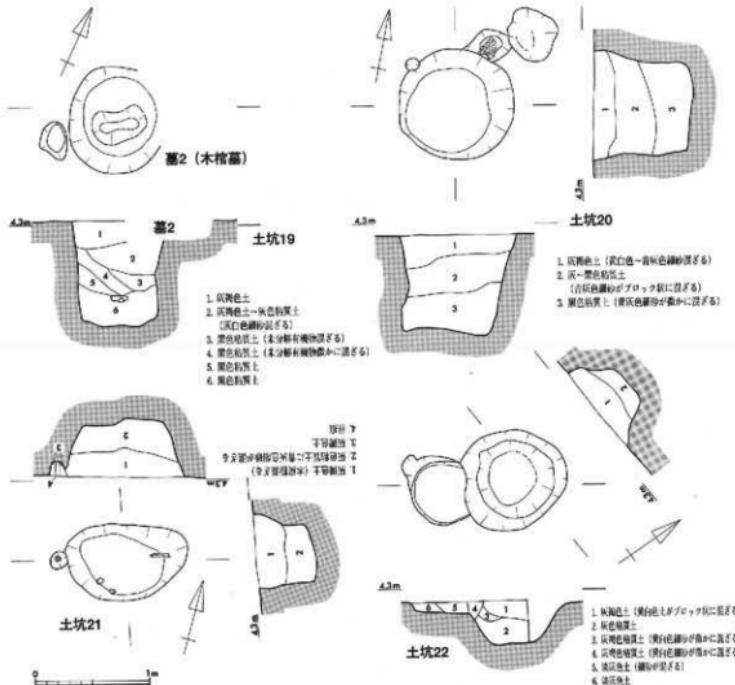


図145の1、2は土坑20から3、4は土坑21から出土したものである。1は青磁碗。口縁端部が外方に折れるもので、上田分類のD類の相当するものと思われる。14世紀後半から15世紀前半か。2は国産陶器の口縁部。鉢か。3、4は土師器坏。色調は肌色を呈する。4は体部が円みをもって立上り口縁端部は角張る形状をしている。復元口径12.2cm、器高4.5cm、底径6.6cm。

図146の土坑23、24は西大溝より西側にある土坑である。

土坑23(図146上段) 調査中に土坑壁面が崩れ土坑内に流入してしまったため土坑底面まで掘削していない。現状では北側の平面がやや突き出たようになっているが崩落によるものと思われ、本来は隅円方形に近かったのではないかと思われる。規模は南北1.47m、東西1.27m、深さは75cm以上。土坑底面の標高は3.38m以下になる。土坑ほぼ中央の第2層直上には20~30cm角、厚さ13cmの自然石が置かれていた。また第1層からは羽口片が出土しているほか土師器小破片も出土している。図147の1が小皿、2から5は坏の底部。1は復元底径3.9cm。2から5は復元底径6.0~7.0cm。

土坑24(図146下段) 平面は本来、径84cmの円形であったものと思われるが、南側は浅い皿状の落ち込みにより壊されている。深さは32cmと浅い。土坑底面の標高は3.84m。

土坑23からは土師器の小破片が出土している。1は皿、2から5は坏の底部。1は復元底径3.9cm。2から5は復元底径6.0~7.0cm。

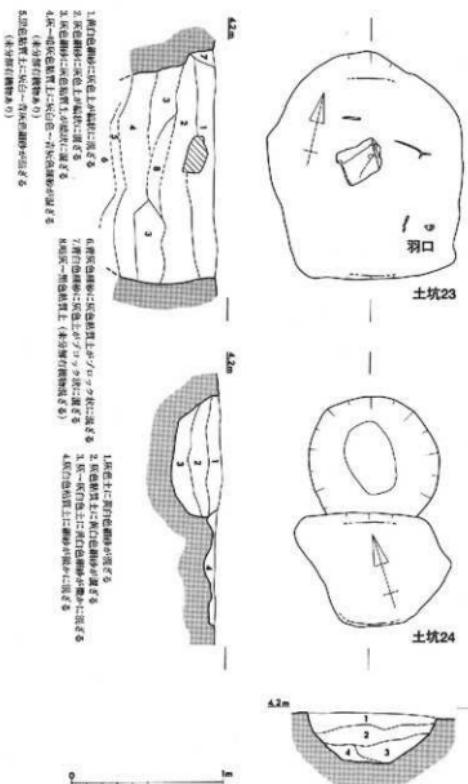


図146 B2区土坑23・24実測図 (S=1/30)

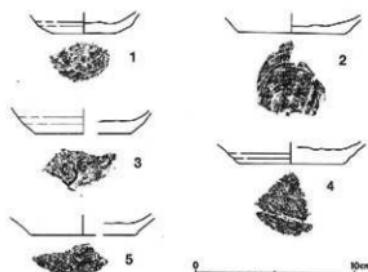


図147 B2区土坑23出土遺物実測図 (S=1/3)

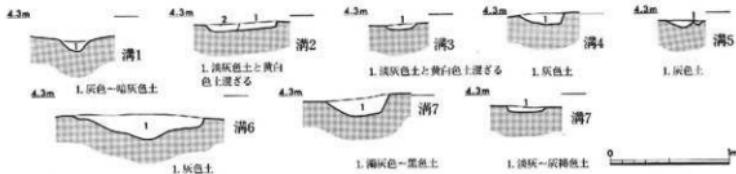


図148 B2区溝跡実測図 (S=1/40)

7. 溝（断面は図148、位置は図99） 挖り方埋土中の遺物や土層観察により中世の遺構と判断したものは10条ある。このうち大溝によって切られている溝は溝8、9、10の三条である。また溝2、3については建物6の雨落ち溝等の可能性も考えられる。

溝1 大溝の西4.0～2.5mの辺りを南北方向に継続して延びた後L字に曲がる。大溝とは平行していない。土坑2と埋土は同質で、埋土中からは土師器が出土している。幅30cm、深さ10cmである。

溝2 トレンチの東に位置してするL字形に曲がった溝である。南側の東西に延びる部分は溝6に切られている。幅59cm、深さ6cm。あるいは建物6に伴うものかもしれない。

溝3 溝2の西側に平行して延びるもので途中二か所で途切れている。溝と溝の間隔は1.5m前後。柱穴で切られていない最も南側の溝で、長さ2.2m、幅25cm、深さ5cm。

溝4 調査区南東隅に位置し東西方向の延びる。東端は近世以降の耕作により壊されている。断面は浅いU字形を呈する。幅37cm、深さ9cm。

溝5 溝4の西延長線上に延びるもので一連の遺構として捉えて良いものと思われる。断面は浅いU字形を呈する。幅30～70cm、深さ6cm。

溝6 調査区中央やや南寄りを東西方向に延びるものである。東端は溝5により切られ、土坑14とも切り合い関係にある。断面は浅いU字から上開きのコ字形を呈する。幅41cm、深さ5～10cm。

溝7 西大溝の西3.0～5.0mの所を大溝と平行に南北方向に延びている。断面は浅いU字形を呈する。幅36cm、深さ10cm。

溝8 溝7の東脇近くから東西方向に延びた後、西大溝によって切られる。断面は浅いU字から上開きのコ字形を呈する。幅32cm、深さ5cm。

溝9 東西方向に延びる溝で西端は西大溝によって切られている。西側が広く幅1.4mで東に向けてすばまっている。断面は浅いU字形を呈する。溝からは羽口の破片が出土している。これについては後述する（図156）。

溝10 溝9の南1mの辺りを東西方向に延びるもので、西端は西大溝によって切られる。幅20cm前後、深さ7cm前後。

8. 墓 墓は全部で5基確認した。内訳は内部施設のあるもの（墓1・2）と、ないもの（墓3～5）に分けられる。立地を見ると墓1・3・4が調査区中央北寄りの土坑6、7の周辺にまとまっている。墓1、3、4は主軸をほぼ揃えていることから考えて同時期か、墓の存在を認識できる程度の時間幅の中で造られたものと考えたい。以下、個別に遺構の概要を見ていく。なお、出土銭貨については永井久美男編『中世の出土銭ー出土銭の調査と分類ー』1994を参考に作成している。

墓1(図149) 南北1.1m、東西0.9mのややいびつな隅円方形の掘り形内に板材と竹を組み合わせた棺を置いている。主軸はN-17.5°-W。棺は底板を持たず、長辺側の板を短辺側の板で挟んでいる。この板が倒れないように、底面には三本の竹を横に並べ、更に四隅を結ぶようにX字状に竹を噛ませている。棺は南北90cm、東西60~62cm、高さは10cm。おそらくこの上に何か有機質のもの敷き詰め遺体を置いたのであろう。副葬品は古銭7枚と土師器壙1点である。土師器壙は棺の南西隅近く正位の向きで押しつぶされた状態で検出した。古銭は棺の中央からやや北側で繪鉄の状態で出土した。出土位置は遺体の胸部の上に当たることから袋状のものに入れられ首からぶら下げていたのではないかと推察される。

土師器壙は底部と体部の境が明瞭なもので、体部は逆ハ字に外方に開く。器壁は厚い。内面は丁寧なナデ調整によつてロクロ成形痕を消しており、滑らかなカーヴを描いて端部に至る。口径13.4cm、器高3.7cm、底径6.5cm。銭貨の内訳は別表の通りである。

墓2(図151) 平面がいびつな隅円方形の掘り形の中央に木棺が置かれている。掘り形は東西77cm、南北65cm、検出面からの深さ18cmである。主軸はE-25°-N。掘り形の底面は西侧に傾斜している。木棺は底板と側板四枚で構成される。組み合せ方は底板の上に長辺側の板を載せ、短辺側の板を嵌め込んでいる。

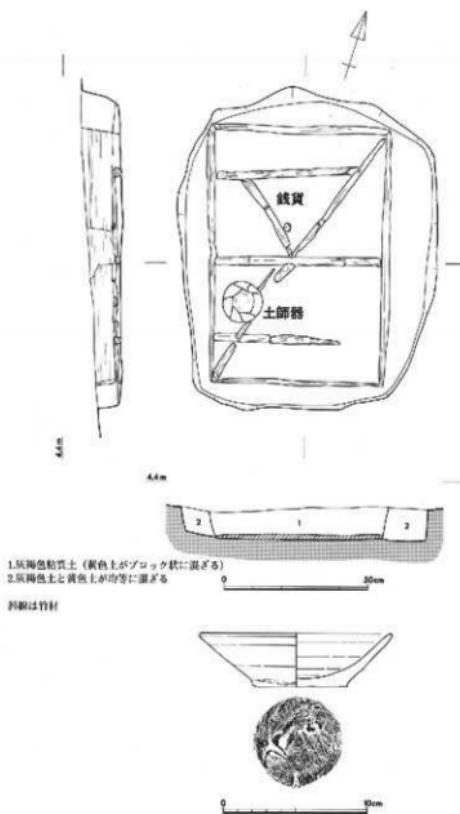


図149 B2区墓1・遺物実測図 (遺構はS=1/15、遺物はS=1/3)

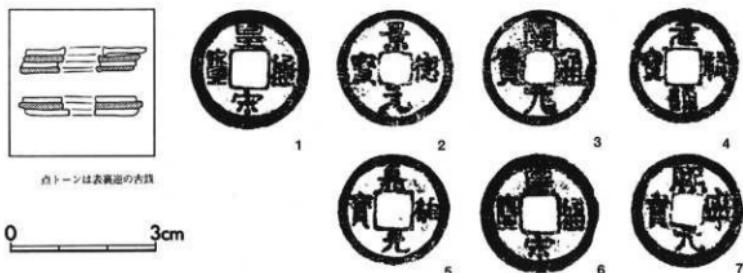


図150 B2区墓1出土錢貨拓影（実大）

B2区墓1出土錢貨観察・計測表

	名 称	初鋤年	銭径(A)/銭径(B)	内径(C)/内径(D)	銭 厚	量 目
1	皇宋通寶	1038	25.08mm / 24.79	20.24mm / 19.55	0.89~1.11mm	3.24 g
2	景德元寶	1004	24.11 / 24.4	20.89 / 20.08	0.79~0.91	2.29
3	開元通寶	621	24.05 / 24.18	19.89 / 20.02	1.00~1.15	3.29
4	元祐通寶	1086	23.70 / 23.45	19.18 / 19.48	0.79~0.86	2.48
5	嘉祐元寶	1056	23.28 / 23.31	19.54 / 18.90	0.85~0.98	2.65
6	皇宋通寶	1038	24.88 / 24.60	19.84 / 20.25	0.79~1.08	3.33
7	熙寧元寶	1068	23.41 / 23.46	19.05 / 19.25	1.19~1.41	3.93

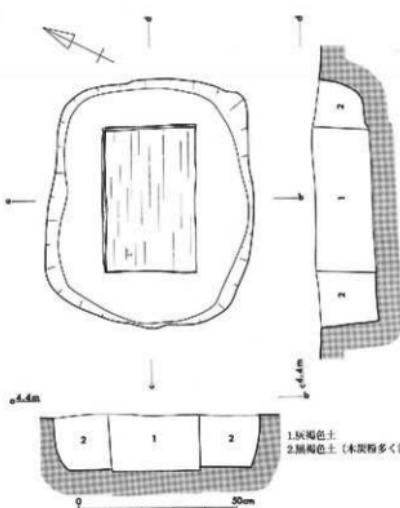


図151 B2区墓2実測図 (S=1/15)

板材は厚さ3mmほどの非常に薄いものである。規模は東西46cm、南北29cm、高さ17~19cmである。副葬品は出土していない。

墓3(図152) 平面は小判形を呈しており、南北1.09m、東西0.76m、検出面からの深さは20cmである。主軸はN-10.5°-W。墓壙の底面は水平である。遺存していた人骨から成人(性別不明)の北頭位で横臥屈葬であったことがわかった。副葬品は土師器壺1点と古銭6枚がある。土師器は墓壙の北西隅から天地正位で東側に傾斜した状態で出土した。これはちょうど遺体の顔の左側あたりとなる。古銭は縁銭の状態で墓壙中央北寄りの地点から出土した。これは遺体の胸元の辺りであり懷に入っていたか、袋状のものに入れて首からぶら下げていたので

はないかと推測される。人骨の直下及び周辺には植物質のものが検出されたことから、葦のようなものを敷いて、その上に遺体を置いたものと考えられる。

土師器壺は非常に丁寧な作りのものである。底部は回転糸切り後に体部との境付近を指でナデて押さえている。このため体部の立ち上がりが円みをもつ仕上がりになっている。色調は明るい肌色を呈する。体部は中ほどで稜線をもつ。口縁端部は薄く引き出されておりシャープな作りである。口径13.8cm、器高3.3cm。底径は5.0cmだが、ナデを施す前は6.4cm前後であったと推定される。錢貨は6枚出土している。鑄びにより判読できないものが半分ある。内訳は別表の通りである。

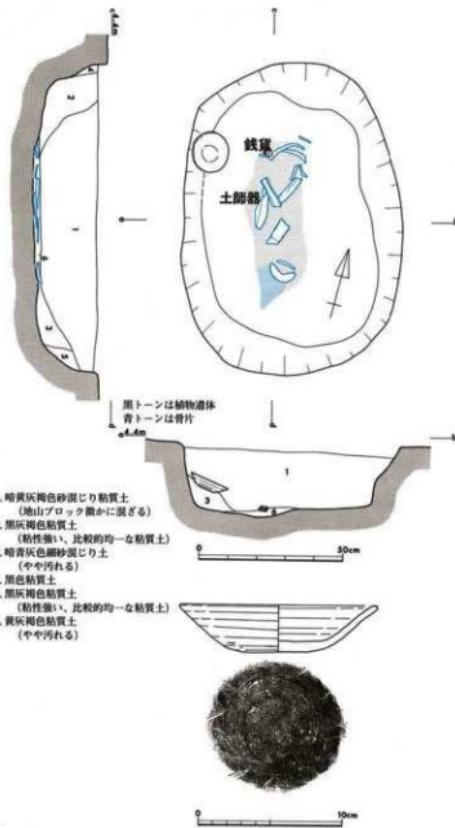


図152 B2区墓3・遺物実測図（遺構はS=1/15、遺物はS=1/3）

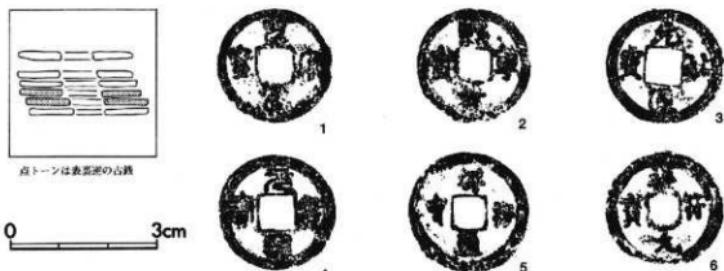


図153 B2区墓3出土錢貨拓影（実大）

B 2 区墓 3 出土錢貨観察及び計測表

	名 称	初 鋸 年	錢径(A)/錢径(B)	内径(C)/内径(D)	錢 厚	量 目
1	□□□寶		24.10mm 23.70	20.33mm 19.82	1.03~1.14mm	3.34 g
2	熙寧元寶	1068	24.20 23.61	20.30 19.71	0.90~1.62	3.29
3	元祐通寶	1086	23.91 24.15	19.40 19.71	0.75~1.10	2.47
4	元□□寶		24.05 24.49	20.69 20.45	1.05~1.19	3.85
5	□□通寶		24.65 24.77	20.50 20.69	1.00~1.18	3.06
6	祥符元寶	1009	23.80 24.09	19.61 19.33	1.15~1.39	3.67

墓4（図154） 土坑7の掘り形を切って掘り込まれている。平面形は小判形を呈し南側の幅が広い。南北87cm、東西54cm、検出面からの深さ12cmである。主軸はN-10°-W。墓壙の底面は水平である。副葬品は土師器壺1点。墓壙南側の中軸線よりやや西側で、天地を逆にした状態で出土した。墓壙底面からは植物遺体の拡がりが確認されており、墓1・3と同様に遺体の下に敷かれていたものと思われる。このほか墓壙中軸線と平行して竹が、土師器の北側で自然石が1点出土している。竹については墓1に見られるような植を構成する材の一部とは考えにくい。

土師器壺は全体に磨滅が著しい。体部中ほどで稜線を持ち外方に折れて口縁端部に至る。口縁端部は肥厚し、外面には面をもつ。口径12.1cm、器高3.4cm、底径5.8cm。

墓5(図155・129) 土坑14の埋土に掘り込まれている。土坑14の検出面から掘り下げる段階で、人骨が検出されたため、掘り形の規模については明確でない。人骨は本遺跡のなかでは比較的残りが良い状態であった。人骨は体の中心線をN-32°-Wに置き、顔は西に向いた横臥屈葬の姿勢であった。

人骨は鑑定の結果、壮年の男性で身長約160cm程度の人物とわかった。

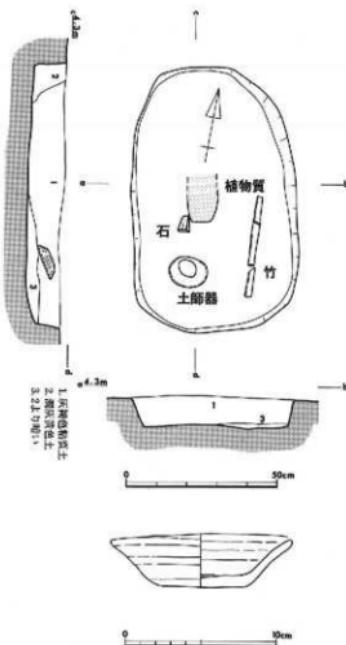


図154 B2区墓4・遺物実測図(遺構はS=1/15、遺物はS=1/3)

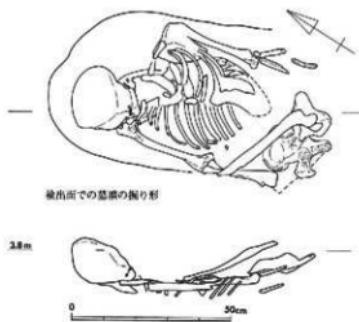


図155 B2区墓5実測図(S=1/15)

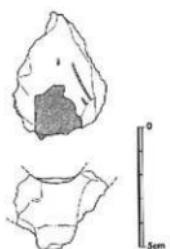


図156 B2区溝9出土遺物実測図 (S=1/3)

9. 製鉄関連の遺構と遺物（図156） 製鉄関連遺構は検出されていないが鐵滓、羽口が出土している。鐵滓は土坑内の埋土中では、土坑7から2点計60.07g、土坑14から1点19.71gが出土している。また西大溝から2点70.57g、ピット71から1点14.39gが出土している。羽口は溝9と土坑23から1点ずつ出土している。

これらは、分析はしていないが総て鍛冶滓と考えられる。羽口が出土していることも合わせると、館内に鍛冶場が存在していたものと推測される。

図156は溝9から出土した羽口の破片である。外径は不明だが孔径は3.2cm程度に復元できる。胎土にはスサが混ざる。外面は滓化し、孔の内面は濃青灰色を呈し融解物が付着している。

第2節 館跡以前の遺構と遺物（弥生・古墳時代の遺構・遺物）（図157・158）

館跡以前の遺構として認識できたのは井戸1基と溝9の1条のみである。前者は出土した土器から古墳時代中期と判断された。後者は遺物は出土していないが、埋土がB1区で検出された弥生時代の遺構のそれと同質であることから当該期の遺構と考えた。

溝11 調査区北東隅を北西から南東方向に延びている。検出した長さは17.5m。溝の幅は63~87cm、深さは13~20cm。断面は上開きのコ字形。土坑8の辺りで幅が狭くなっており、あるいは途切れていたのかもしれない。埋土はグライ化の進行した粘質土である。

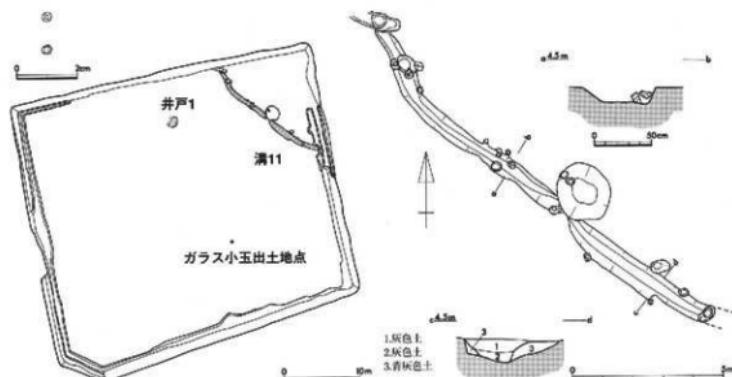


図157 B2区館跡造成以前の遺構配置図
(S=1/600・ガラス小玉はS=2/3)

図158 B2区溝11実測図
(平面はS=1/150・断面はS=1/40)

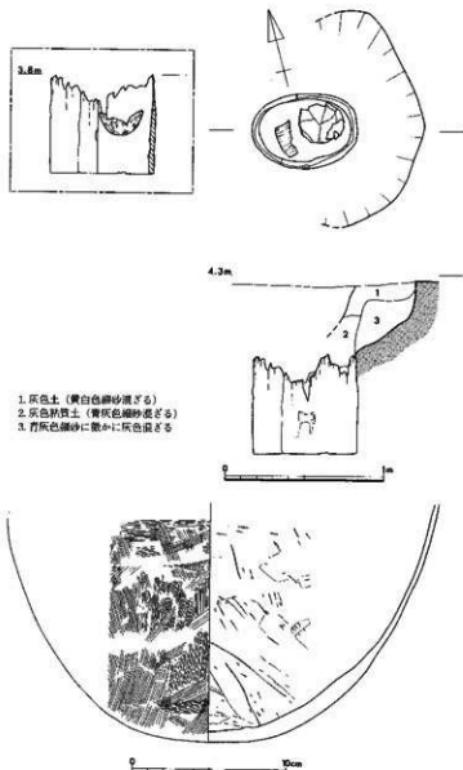


図159 B2区井戸1・遺物実測図（遺構はS=1/30、遺物はS=1/3）

た。井戸側下面から壺の底部までの高さは復元すると24.0cmと思われる。井戸側の中の埋土は壺の底部の高さまでは細砂層、それより上位が粘質土層であった。このことから井戸側の下面から24.0cm上位までが涌水層に据えられていた部分と考えられる。

壺は胴部下半から底部まで残っている。底部は丸底を呈する。外面は粗いハケ調整、内面はヘラヶズリ。古墳時代中期と思われる。

この他、遺構に伴うものではないが西大溝などから弥生土器、須恵器が微量出土している。当該期の遺構が他にも存在したことを示すものといえよう。

特異な遺物としてはガラス小玉がある（図157）。ガラス小玉は浅い柱穴の中から出土した。柱穴からは他に遺物は出土していない。色調は淡いブルー。とぐろ状になっており芯に巻きつけて製作したことが観察できる。径3.1~3.2mm、高さ2.1mm、重量は0.03gである。

井戸1（図159） 中世の土坑6により掘り形の西側1/2以上を失っている。また調査中の掘り形の崩落により井戸側も横倒しにならため埋土等の状況は不明である。掘り形は現状で南北1.36mの長さである。井戸側は丸太を分割してくり抜き組み合わせている。ただし組み合わせるための装置は見られない。井戸側は長径65.0cm、短径47.0cmの梢円形をしている。下面は平坦に仕上げている。下面から上部の最も良く残っている所までの高さは63cmである。下面のところで厚さ3.0cm。内面には下面から高さ12cmのところに段をもつ。また外面上には長方形の抉り孔が見られる（図の正面図の中央あたり）。大きさは幅9.5cm、高さ6.0cm、奥行き2.5cm。機能は不明である。

井戸側の中からは井戸祭祀に伴うものと考えられる土器器壺が出土している。壺は胴部下半から底部までの部分で、正位の状態で井戸側の中に置かれていた。

第3節 小結

ここでは、特に館跡以後の遺構である墓について若干の検討を加えることとしたい。なお、館跡以前の遺構については既にB1区で触れているので繰り返さない。

藏小路西遺跡B2区の墓について

性格 墓は館跡後に造営されたもので、いわゆる集団墓に相当するものとして位置付けられる。
構造・埋葬形態 検出された墓は木棺等の内部施設を有するもの2基、それ以外のもの3基に大別される。墓壙上部の施設はいずれも見られなかった。埋葬形態は掘り方の深さが10cm前後と浅いこと、墓3、5で遣されていた人骨から復元して、横臥ないしは仰臥屈葬であったものと思われる。人骨は遣っていないが最も小形の墓2はその規模から、成人ではなく小児の墓ではないかと推測される。同様の木棺をもつ事例として姫原西遺跡C区2号墓がある。⁽⁷⁾ この墓では10代前半の小児が横位屈葬されているの確認されていることから、小児用の墓に小形の木棺が採用されているのかもしれない。頭位は墓4以外は北頭位のようである。

副葬品 墓1、3、4で副葬品が出土している。墓1、3が土師器壺と錢貨のセット、墓4が土師器のみである。土師器は墓1は底面で出土したことから遺体の傍らに一緒に埋葬したものと思われるが、墓3・4は天地逆で底面より高い位置で出土している。遺体の上に置いたものかもしれない。錢貨は銷着した状態で重なって出土していることから、何らかの方法で束ねて死者に持たせたのであろう。錢貨の構成を見ると判読できるものは總て渡来錢ないし渡來錢の模範錢である。六道錢の枚数は6枚と7枚である。中世墓の六道錢の枚数にはバラつきが見られることが指摘されている。⁽⁸⁾ 本例は、当該期に「六枚」という数が全く意識されていなかったわけではない、ということを示す一例であろう。

時期 まず類似した構造をもつ姫原西遺跡の墓と本遺跡のそれを比較したい。二遺跡で共通しているのは、底板が無く釘を用いないで竹・木により構築した棺と底板に側板、小口板を組み合わせた棺の二種類の墓が存在していることである。相違点は副葬品に顕著に表れる。それは以下の3点である。姫原西遺跡が①土師器を複数点もつ②土師器・錢以外の副葬品がある（櫛、数珠）③錢貨が輪錢である。こうした副葬品の多彩な在り方が同時期のヴァリエーションか時期差なのか問題となる。そこで出土した土師器の所産年代を比較したい。3点ともロクロ成形痕跡をとどめない丁寧な作りである。プロポーションは墓1が逆ハ字、墓3、4は体部中ほどで屈曲して外方へ開く、というように違いがある。しかし法量が口径12.1から13.8cmと大形化している点は一致している。これに対して姫原西遺跡の資料は壺、皿とも底径に対する口径の比率が高くなっている。本資料よりも後出的要素をもつものと考えられる。以上のことから本遺跡の墓が姫原西遺跡よりも古い段階のものとして位置付けられる。

次に年代的位置付けだが、まず上限は館跡の廃絶時期である15世紀後半に置くことができる。これは墓1の資料が松江市下黒田遺跡⁽⁹⁾の資料と似ていることからも、矛盾しない時期といえよう。次に下限は姫原西遺跡よりも相対的に古い時期に設定できる。姫原西遺跡の年代は副葬品である輪錢の年代銀から16世紀後半に置くことができよう。このことから本遺跡の墓は15世紀後半から16世

紀前半頃に造営されたものと考えたい。

今後の課題 本遺跡中の新旧関係は既に記述したように、長期間にわたるものではなく他の墓の所在がわかる程度の時間幅を考えた。とすれば、①木棺墓と土壙墓という二つの埋葬方法の違い②六道鏡・土師器の有無と被葬者の性別、年齢、階層差、といった課題が提起されてくる。また、本遺跡では認められなかつたが上部施設である石塔との関係も検討が必要であろう。前章で触れたようにB1区では館内の根石に五輪塔水輪部が転用されている他、土坑内に投棄された地輪部も出土している。こうした石塔が墓標として建てられていたのか、供養塔であったのか、今後の検討が必要となろう。さらには副葬品の六道鏡の問題も当地域における貨幣流通の在り方とも相俟って興味深いテーマといえる。

島根県内の研究動向としては、南前孝明氏⁽¹⁰⁾や西尾克己氏による集成作業がなされた他、注目すべき調査報告⁽¹¹⁾⁽¹²⁾も相次いでいる。さらに中世土器の研究⁽¹³⁾も近年着実に進められているところである。石塔に関しては下部構造を見据えた論稿は見られないものの、石塔の権年研究は試みられており、幾つかの試案も提示されているところである。⁽¹⁴⁾ 当地域における中、近世墓研究も新たな段階に到達したといえよう。

註

- (1) 間壁忠彦『考古学ライブラリー60 備前焼』ニューサイエンス社 1991
- (2) 森田勉・横田賢次郎「太宰府出土の輸入陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』1978
- (3) 上田秀夫「14~16世紀出土の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』2 1982
- (4) この竹製品については、美濃晋平氏、笠原潔氏に実測図を見て頂いた。美濃氏からは、①古代尺八の可能性②横笛の可能性③その他の可能性について、ご教示頂いている。稿を改めて報告したい。
- (5) 森田勉「14~16世紀の白磁の型式分類と権年」『貿易陶磁研究』2 1982
- (6) 藤澤良祐「瀬戸古窯址群Ⅲ—古瀬戸前期様式の権年—」『財団法人市埋蔵文化財調査センター研究紀要』第3輯 1995
- (7) 島根県教育委員会『姫原西遺跡 一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告1』1999
- (8) 島根県布施鶴指奥墳墓群（15世紀後半~16世紀前半）では六道鏡は6枚を基本としていたことが指摘されている。県内では西尾克己氏の集成等を見る限りでは枚数にはバラつきが見られるようである。
島根県教育委員会「東柱見遺跡・布施鶴指奥墳墓群」1992
- 西尾克己「島根県の中世墓出土鏡貨」「出土鏡貨」第2号 出土鏡貨研究会 1994
- (9) 松江市教育委員会「下黒田遺跡発掘調査報告書」1988
- (10) 南前孝明「山陰の中世墓」「季刊文化財」第84号
- (11) 松江市教育委員会（財）松江市教育文化振興事業団「黒田畠遺跡」1995
16世紀代前後の6基の土壙墓が調査されている。このうちS X - 0 2からは無文鏡90枚以上を含む100枚前後の鏡貨が出土しており注目される。
- (12) 安来市教育委員会「清水大日堂裏古墓発掘調査報告書」1998
県内初の中世~近世の大規模な墳墓群の調査報告である。
- (13) 松江考古学談話会「松江考古」第8号 1992ほか
- (14) 間野大悉「高津川上・中流域の宝鏡印塔」「宍道町歴史叢書」第1号 1996

第4章 C区の調査

第1節 調査前の状況と経過

C区は、中世の館跡が検出されたB区と市道を挟んで東側に隣接する区域で、中世の館跡に関連する付随施設または同時期の水田等の生産址の存在が予想されていた箇所であった。このため試掘調査を実施したところ、黒褐色の包含層状の土層の下から溝状の遺構及び複数の土坑を検出した為、本発掘調査を実施する運びとなった。

C区の調査対象面積は約2,800m²であるが、調査区の南側には県立の公共施設が存在しており、その移転の関係で調査は二カ年にわたって実施し、96年度は北半部（N区）の調査を実施し、97年度には県の公共施設跡の南半部（S区）の調査を行った。また排土処理の問題から一度に調査を行うことは困難であることから、それぞれを東西両地区に分けて、東側をC1区、西側をC2区と命名し、調査を実施した。したがって、C区は96年度に調査を実施したC1区の北側（C1-N区）、C2区の北側（C2-N区）、97年度に調査を実施したC1区の南側（C1-S区）、C2区の南側（C1-S区）の都合4箇所に分けて調査を行ったこととなる。

96年度の調査は9月17日に西側のC2-N区から調査に着手し、12月16日にC-N区全体の調査を全て終了した。97年度の調査は4月から調査に着手し、5月にC-S区の調査を全て終了した。

以下、96年度に調査を実施した、C-N区から順に検出した遺構・遺物について順次報告する。

第2節 C1-N区の調査

調査区の立地

C1-N区はC区で最もB区の中世館跡に隣接する調査区であり、多数の遺構の存在が予測され

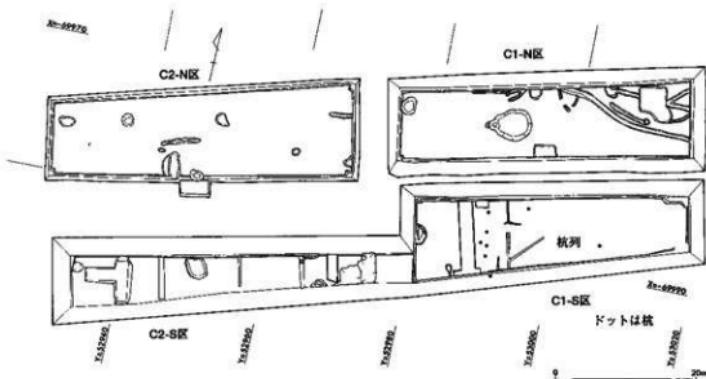


図160 C区全体図 (S=1/600)

た箇所である。調査区の標高は現況の水田面で4.5m前後を測る。

遺構面は包含層である黒褐色粘質土の直下に存在しており、そのレベルは約3.9m～4.15mを測り、北東部から南西部にかけて、ごく緩やかに傾斜している。調査区の北東部には細砂質～シルト質状の地山である微高地がわずかに存在し、それ以外は低湿地状の粘質土（泥層）が遺構面を形成している状況であった。

遺構の配置（図161）

遺構は北西から南東へ延びる数条の溝（SD01～05）が北東部に集中しており、前述した微高地部分と低湿地部分を画している。その他の溝や土坑等の遺構も調査区北端部に集中するような状況で検出された。

調査区の大部分を占める地山が低湿地の部分は遺構は散漫であり、調査区中央に大型の土坑（SK05）が位置し、西端にSK07が存在する他は目立った遺構は検出されていない。

基本層序（図162）

当調査区の基本層序は、表土（現在の水田耕作土）の下に、厚さ約10cm前後の黒褐色粘質土（図162の2層）が堆積していた。この土層は隣接するB区の中世遺構で出土している糸切底の土師質土器片を少量含んでいることから、中世館跡とほぼ同時期に形成された土層と考えられる。

2層は、後章で述べる自然科学的分析の結果や、同層中にその直下層である暗灰褐色シルト質粘土ブロックを部分的に巻き込んでいる状況が観察された点、この層を除去した際の精査面において半月状の鋸先痕を若干検出した点などからみて、中世の水田耕作土と判断される。調査時の際にも、この点を留意し水田畦畔の検出に努めたが、現在の耕作によって既に同層の上半部は削平されており、畦畔を検出するには至っていない。

2層の下には灰褐色～暗オリーブ色の細砂混じり泥層（2～4層等）及び暗灰褐色泥層（3～2層）が堆積しており、遺構面を形成している。3～2層中からは遺構調査後の断ち割り調査時に弥生土器（中期末）、古式土師器、須恵器片が若干出土しているが、層の明確な形成時期は不明である。3～2層下には灰色細砂土の基盤層（4層）が存在している。この土層は北東から南西にむけて傾斜しており、最も標高の高い北東部では前述のとおり遺構面を検出している。この土層も完掘後に断ち割

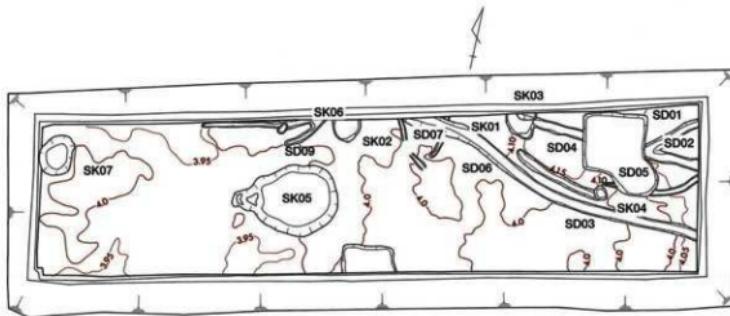


図161 C1-N区調査後測量図 (S=1/300、5cmセンター)

り調査を実施したが、明確な遺構・遺物は検出されなかつた為、全面調査は実施していない。

検出した遺構・遺物

1. 土坑（図163・164）

S K01（図163）

調査区北東部に位置し、北側は調査区周囲に巡らせた排水溝によって失われている。また北側はSK03と切り合い関係にあり、SK03に先行する。また東側はSD02の東端と接しており、SD02→SK01の関係にある。

規模・形態

土坑の形態は約半分しか残存していないため不明確だが、現状では平面形は不整梢円形状を呈し、断面形は浅い皿状を呈する。土坑の規模は現存する部分で、径約2.2m、深さ約10cmを測る。

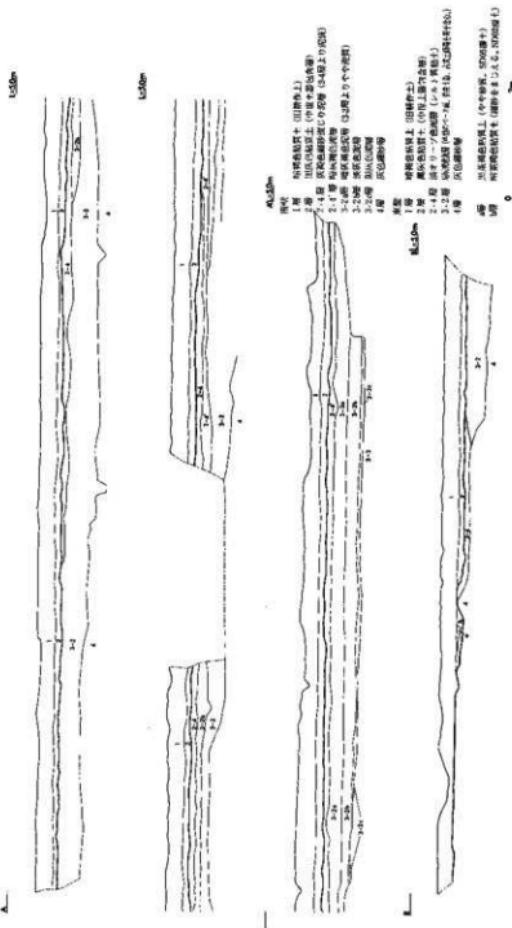


図162 C1-N区調査区南壁・東壁セクション (S=1/80)

覆土 土坑の覆土は黒褐色粘質土の單一層である。

遺物 当土坑からは遺物は一切出土していない。

年代・性格 当土坑からは遺物が一切出土していない為、年代・性格共に不明と言わざるを得ないが、層位的関係から弥生時代後期以降～中世以前の遺構と判断される。また、SD02との位置関係からSD02と有機的関係をもつ性格の遺構であった可能性も考慮される。

S K02（図163）

調査区ほぼ中央の北端に位置する土坑で、前述の基盤層である4層に掘り込まれた土坑であるが、SK01と同様、北半部は調査区外へと延びている。

規模・形態 検出された部分が半分程度な為、全体の形状は不明だが、平面形は不整梢円形状を呈し、断面形は皿状を呈し、SK01に類似する。土坑の規模は残存部で長径1.6m以上、短径1.5m、深さ約15cmを測る。

覆土 土層は3層に分けられ、上層は黒褐色系の粘質土、下層には暗灰褐色系の粘質土が堆積している。

遺物 当土坑からは遺物は出土していない。

年代・性格 出土遺物が無く、年代、性格については不明と言わざるを得ないが、層位的関係から中世以前の遺構と想定される。

SK03 (図163)

前述のとおり、SK01に掘り込まれた土坑である。遺構の北半はSK01と同様、調査区周間に巡

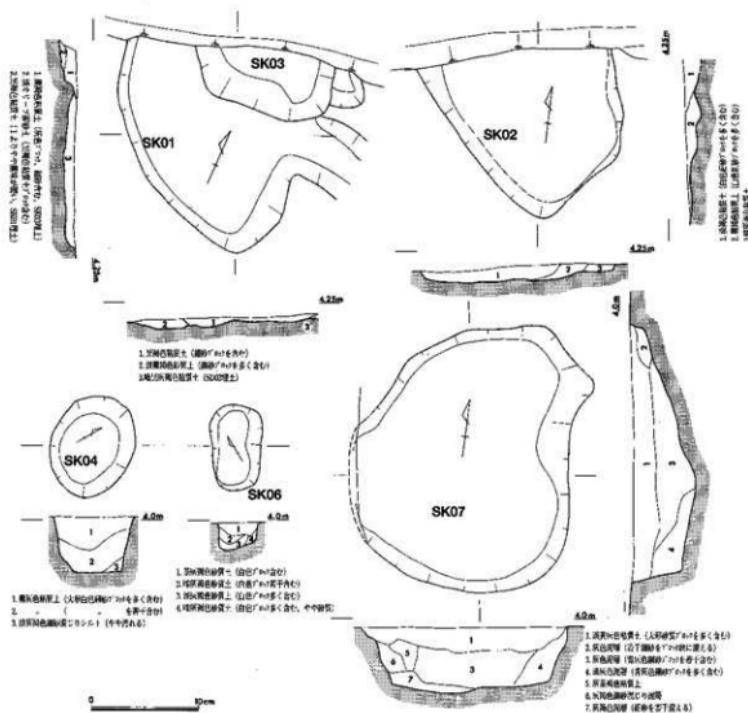


図163 C1-N区SK01~04, 06.07実測図 (S=1/40)

らせた排水溝によって半分以上失われている。

規模・形態 半分以上が失われているため、正確な規模・形態は不明だが、残存する部分で長さ1.3m、深さ15cm前後を測る。

覆土 覆土は2層に分かれており、上層に黒褐色粘質土、下層に淡オリーブ色細砂土が堆積している。

遺物 SK01・02と同様、遺物は出土していない。

年代・性格 遺物が出土していないため年代・性格は不明だが、切り合い関係からSK01に後出する。

SK04（図163）

調査区の東側に位置する小型の土坑で、土坑西側はSD04の東端と接している。

規模・形態 平面形は椭円形状を呈し、長径1.0m、短径0.8mを測る。土坑の壁面はほぼ垂直に掘り込まれており、深さ0.5mを測る。

覆土 土坑内覆土の大半は白色細砂ブロックを多く含む黒褐色粘質土で占められていたが、細砂ブロックの含み具合で上下に分層できる。

遺物 図化していないが棒状の木製品が1点出土している。

年代・性格 遺物が出土していないが、層位的関係から中世以前の遺構と考えられる。またSD04との関係から、遺構の性格としては、SK01と同様、溝と関連した溜糞状的な性格が一案として想定される。

SK05（図164）

調査区のほぼ中央部に位置する大型の土坑である。遺構検出面は暗灰褐色泥層（3-2層）であるが、出土遺物からみて、より上層から掘り込まれた遺構である可能性が高い。

規模・形態 平面形態は長楕円形に突出部が付随する形態を呈する。突出部を除いた規模は長径5.3m、短径4.4mを測る大型の土坑である。突出部は階段状を呈しており、平面形で1.6m×1.6mを測る。断面形はやや深い皿状を呈し、深さ1.05mを測る。

覆土 覆土は大きく黑色腐植土（14層）を境に上下2層に分かれており、上層には主として細砂ブロックを含む暗灰褐色系の粘質土が堆積しており、下層には淡黒褐色粘質土（15層）が堆積している。この点からみて、SK05は一度掘り込まれ放棄された後、14層下まで新たに掘削され使用された可能性が高い。

遺物 図化していないが、上層からは古式土師器細片、下層からは土師質土器が若干出土している。また下層からは曲物の底板と思われる木製品が出土した。なお、土坑底部からは人頭大の河原石が数点出土している。

年代・性格 遺構の年代は出土遺物からみて中世のものと判断されるが細かな年代については特定できない。性格については、階段状の施設が付随している点や土坑の規模・形態からみて、貯水施設的な性格のものである可能性が想定される。

SK06（図163）

調査区中央部の北壁付近で検出した小型の土坑でSD08を切り込んで掘り込まれている。

規模・形態 平面形は長楕円形で、規模・形態ともSK04に類似する。規模は0.8m×0.5mを測る。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、底面はやや傾斜している。検出面から底面までの深さは0.25m

を測る。

遺物 当土坑からは遺物は出土していない。

覆土 土坑内の覆土は白色ブロックを含む暗灰褐色系の砂質土が充填していた。

年代・性格 出土遺物が無く、年代・性格ともに不明である。

S K07 (図163)

調査区北西端で検出した、やや大型の土坑である。西側に隣接する調査区であるC 2 - N区で検

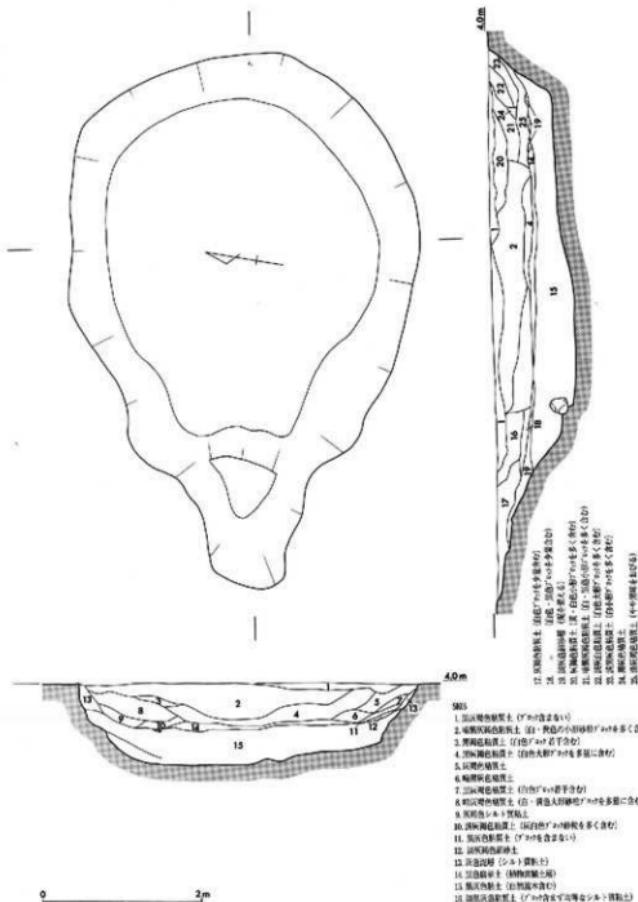


図164 C1-N区SK05実測図 (S=1/60)

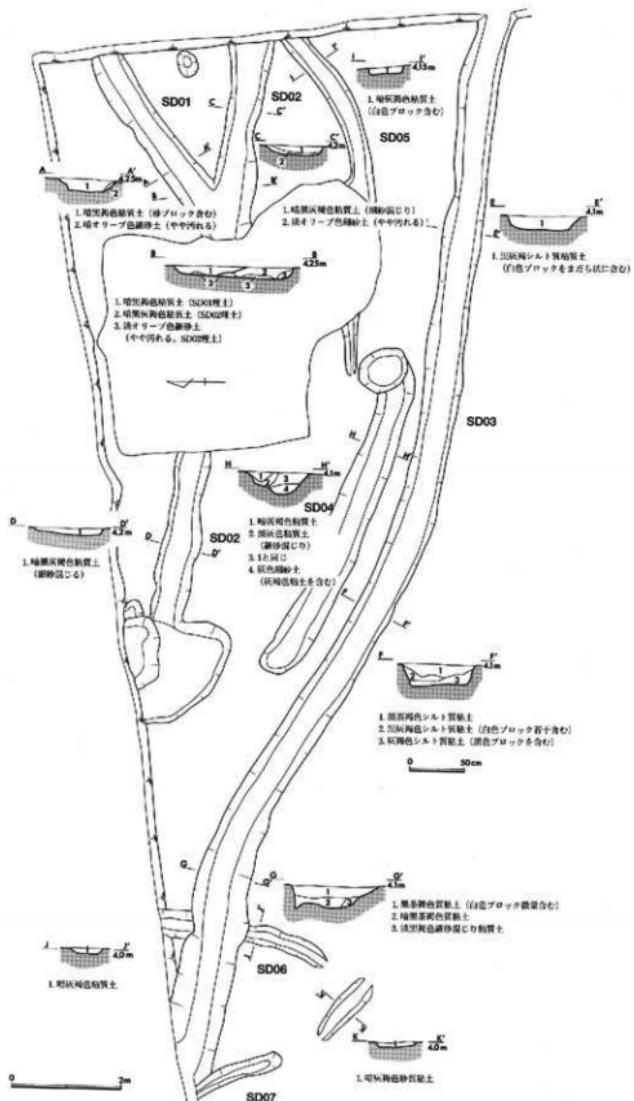


図165 C1-N区SD01~07測図 (平面S=1/80、断面S=1/40)

出した土坑群に類似するものである。

規模・形態 プランは不整円形を呈し、径約2.5mを測る。壁は比較的急角度に掘り込まれており、底面はほぼ水平を呈する。検出面から底面までの深さは0.6mを測る。

覆土 土坑内覆土は大きく2層にわかれ、上層には淡黄灰褐色粘質土、下層には灰褐色系の泥層が堆積していた。

遺物 当土坑からは遺物は出土していない。

年代・性格 出土遺物が無く、不明と言わざるを得ないが、形態や規模からみてC2-N区で検出した土坑群と同様な性格のものと考えられる。

2. 溝（図165・166）

S D01（図165）

調査区北東部で検出した溝で、東側は調査区外へ延び、西側は試掘調査時の擾乱によって失われている。

規模と形態 溝の規模は現存長で長さ4.0m、幅0.6mを測る。断面形は浅い逆台形で深さ10cm前後である。

覆土 溝の覆土は基本的に暗黒褐色粘質土の單一層である。

遺物 古式土師器、土師質土器の細片が若干出土している。

年代・性格 S D01はS D02と切り合っており、S D02に後出する。出土遺物中に土師質土器片が含まれていることや、調査区北東部の他の溝群と方向を違えている点からみて、他の溝とは異なり中世の時期のものである可能性が高い。

S D02（図165）

調査区北東部で検出した溝で、ちょうど細砂質の微高地と低湿地状の泥層との境界を区画するかのように南東から北東の方向へ巡らされた溝である。

規模と形態 溝の東側は調査区外へ延び、西端はSK01によって切られている。現状での長さは10.8m、幅0.3~0.4mを測る。断面形は浅い皿状を呈し、深さ約10cm程度である。

遺物 溝内から弥生終末期~古式土師器細片が若干出土している。

覆土 基本的に暗黒灰褐色粘質土の單一層である。

年代・性格 出土遺物はわずかであるが、遺物を参考とすれば弥生後期末~古墳時代前期前後の遺構である可能性が高い。溝の性格としては、立地状況からみて居住区域である微高地とその外の低地を区画するとともに、排水的役割を担う性格のものであったと想定される。

S D03（図165）

S D02と同様微高地と低地を区画するかのように巡らされた溝で、やや低地側に掘り込まれた溝である。よって西側では細砂層の基盤層に掘り込まれているが、東側では基盤層の上に堆積している泥層（3~2層）に掘り込まれている。

規模と形態 溝の両端とも調査区外へ延びているため全長は不明だが、調査区内で長さ20.4m、幅0.4m~0.5mを測る。溝の断面形は浅い逆台形で12cm~20cmを測る。溝の底面はほぼ平坦で、底面のレベルは北西から南西へむけてゆるやかに傾斜している。

覆土 溝内の覆土は西側では黒茶褐色系の粘質土、東側ではシルト質粘土が堆積していた。

遺物 溝内からは弥生時代終末～古墳時代前期初頭の土器が若干出土しているが、細片のため図化していない。

年代・性格 出土遺物からみて当溝の年代は弥生時代終末～古墳時代前期の可能性が高い。溝の性格についてもSD02とほぼ同様のものであった可能性が高い。

SD04(図165)

SD02とSD03との間で検出した短い溝で、東端はSK04と接している。

規模と形態 現状での長さは約6.3m、幅約60cmを測る。溝の深さは20cm前後である。

覆土 基本的に上層に暗灰褐色系の粘質土、下層に灰色細砂土が堆積していた。

遺物 遺物は出土していない。

年代・性格 出土遺物が無く、年代は不明だが、SD03とほぼ平行している点からみて、ほぼ同時期の遺構と考えられる。性格については、SK04と有機的に関連した性格の溝と想定される。

SD05(図165)

SD02とSD04との間で検出した溝で、試掘トレンチによって一部を失われている。

規模と形態 溝の東側は調査区外へ延びているが、調査区内での規模は、長さ6.2m、幅30cmを測る。

覆土 覆土は基本的に暗灰褐色粘質土の単一層である。

遺物 当溝からは遺物は出土していない。

年代・性格 調査区東壁の土層観察からSD02より後出するのは明らかであるが、出土遺物が無いため細かな年代については不明と言わざるを得ない。位置関係からみてSD02～04とはほぼ同時期に営まれたものと推測される。

SD06(図165)

調査区中央部の北端で検出した南北に走る小規模な溝で、SD03と切り合い関係にある。北側は調査区外へと続いている。

規模と形態 調査区内での規模は、長さ3.2m、幅0.3mを測る。溝の断面形は浅い皿形を呈し、深さは7cm前後と極めて浅いことからみて、本来の掘り込み面はより上位にあったと考えられる。

覆土 溝内の覆土は暗灰褐色粘質土の単一層である。

遺物 当溝からは遺物は出土していない。

年代・性格 出土遺物が無いため細かな年代については不明だが、掘り込み面がより上面に想定されることからみて、SD02～05より後出する遺構と想定される。

SD07(図165)

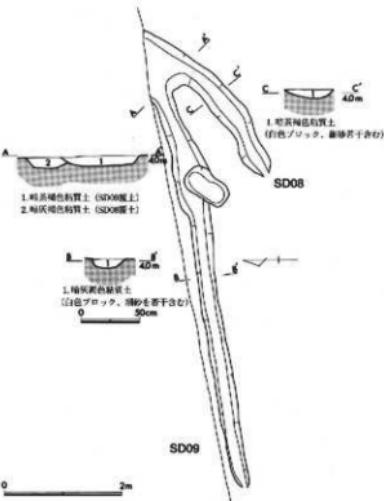


図166 C1-N区SD08・09実測図(平面S=1/80、断面S=1/40)

SD06の西側で検出した南北に走る小規模な溝で、ごく浅いため一部途切れている。北側は調査区外へと続いている。

規模と形態 調査区内での規模は一部途切れているが、長さ3.8m、幅0.4mを測る。溝の深さは5cm前後と極めて浅い。

覆土 溝内の覆土は暗灰褐色粘質土の単一層である。

遺物 当溝からは遺物は出土していない。

年代・性格 出土遺物が無いため細かな年代については不明だが、掘り込み面がより上面に想定されることからみて、SD06と同様SD02～05より後出する遺構と想定される。

SD08(図166)

調査区西側北端で検出した溝で、南西から北東へ延び、北東側は調査区外へと続いている。またSD09と切り合い関係にありSD09に先行する。

規模と形態 調査区内での規模は、長さ3.2m、幅0.4mを測る。溝の断面形は浅い皿形を呈し、溝の深さは10cm前後を測る。

覆土 溝内の覆土は暗茶褐色粘質土の単一層である。

遺物 遺物は土師器細片が若干出土しているのみである。

年代・性格 年代を窺える遺物が無いため、細かな年代・性格ともに不明である。

SD09(図166)

調査区西側北端で検出した溝で、ほぼ東西に延び東端はSD08によって切られている。

規模と形態 現存する規模は、長さ7.0m、幅0.3～0.6m、深さ10cm前後を測る。

覆土 溝内の覆土は暗灰褐色粘質土の単一層である。

遺物 当溝からは遺物は出土していない。

年代・性格 出土遺物が無いため細かな年代については不明であるが、溝の方向がSD03と共に通している点、微高地と低地を画する位置に溝が巡っている点などからみて、SD02～05と同時期である可能性が高い。場合によってはSD03と同一の遺構である可能性もある。

第3節 C2-N区の調査

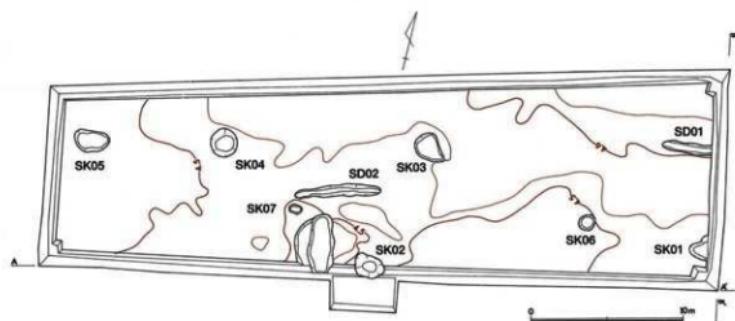


図167 C2-N区調査後測量図 (S=1/300、5cmセンター)

調査区の立地

C 2 - N 区は C 1 - N 区の西側に隣接する調査区である。調査区の現状での標高は 5.0m 前後を測る。造構面は C 1 - N 区と同様、包含層である黒褐色粘質土の直下に存在しており、北東から南西にかけて、ごく緩やかに傾斜している。当調査区は C 1 - N 区と異なり、造構面には細砂質の微高地は存在せず、低湿地状灰褐色シルト層～泥層が造構面を形成している。

造構の配置（図167）

当調査区の造構密度は極めて疎らで、C 1 - N 区西端で検出した S K 07 に類似する土坑が散漫に分布する他は小規模な溝が数条存在するのみである。

基本層序（図168）

当調査区の基本層序は、基本的に C 1 - N 区とはほぼ同じである。近年の造成土・耕作土の直下に厚さ約 10 cm 前後の黒褐色粘質土（図168 の 2 層）が堆積しており、やはり土師質土器片を若干含んでいることから中世の水田耕作土と判断される。

2 層の下には北半部に暗灰褐色細砂土（3 - 1 層）が薄く部分的に堆積し、古

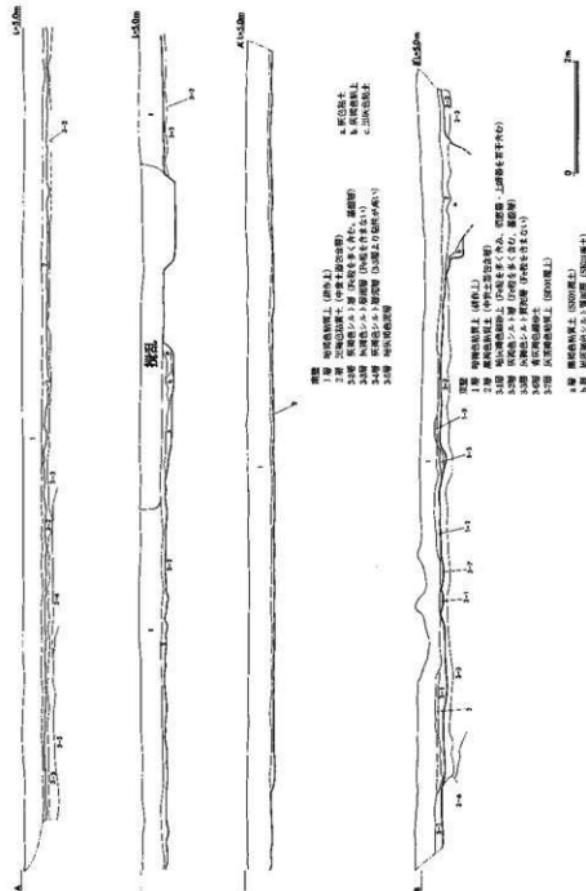


図168 C2-N区調査区南壁・東壁セクション (S=1/80)

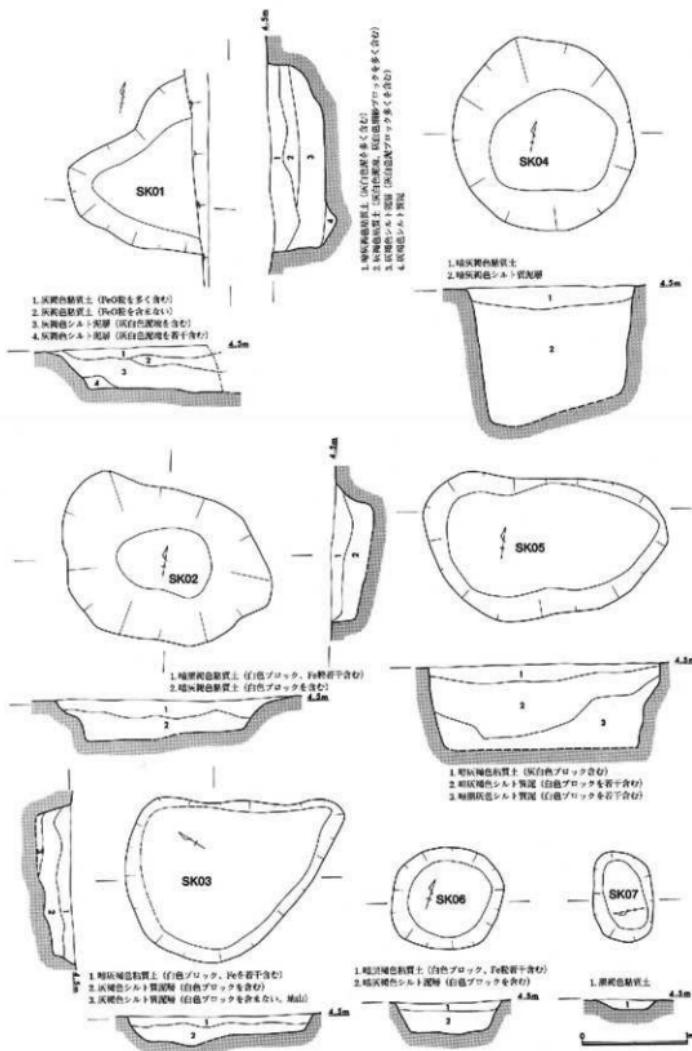


図169 C2-N区SK01~07実測図 (S=1/40)

墳時代後期の須恵器・土師器片をわずかに含んでいる。その直下の灰褐色シルト層（3-2層）上面に遺構が営まれている。この3-2層は厚さ約20cm前後で酸化鉄粒が多く含む。その下層にはC1-N区でみられた灰褐色シルト質泥層（3-3層）が厚く堆積している。当調査区ではC1-N区で検出した細砂質の基盤層は断ち割り調査（深さ約2m）では確認できておらず、より下に埋没しているものと想定される。

検出した遺構・遺物

1. 土坑（図169）

S K01（図169）

調査区東端で検出した中形の土坑で東半分は調査区外へ延びている。

規模・形態 平面形は半分しか検出していないため不明だが不整楕円形状を呈し、長径1.7mを測る。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、底面はやや平坦面を呈する。検出面から底面までの深さは0.5mを測る。

遺物 当土坑からは遺物は出土していない。

覆土 上層に暗灰褐色粘質土、下層にブロック混じりの灰褐色シルト質泥層が堆積していた。

年代・性格 出土遺物が無く、年代・性格ともに不明である。

S K02（図169）

調査区中央部南端で検出した中形の土坑である。

規模・形態 ブランは長楕円形を呈し、規模は2.1m×1.5mを測る。比較的浅い土坑で底面はやや広い平坦面を呈し、深さは0.4mを測る。

遺物 当土坑からは遺物は出土していない。

覆土 上層は暗黒褐色粘質土、下層は暗灰褐色粘質土で、いずれも白色細砂ブロックをまじえている。

年代・性格 出土遺物が無く、年代・性格ともに不明である。

S K03（図169）

調査区中央部で検出した比較的浅い土坑である。

規模・形態 ブランは不整三角形を呈し、規模は2.2m×1.7mを測る。断面形は浅い皿状を呈し、深さ0.3mを測る。

遺物 当土坑からは遺物は出土していない。

覆土 上層は暗黒褐色粘質土、下層は暗灰褐色粘質土で、いずれも白色細砂ブロックをまじえている。

年代・性格 出土遺物が無く、年代・性格ともに不明である。

S K04（図169）

調査区西側で検出した中形の土坑である。

規模・形態 ブランは不整円形を呈し、規模は1.75m×1.85mを測る。壁面はほぼ垂直で深さ約1.3mを測る。

遺物 わずかに古墳時代後期のものと思われる土師器細片が出土している。

覆土 上層は暗黒褐色粘質土、下層は暗灰褐色シルト質泥層が堆積しており、いずれも白色細砂ブ

ロックを含んでいることから基盤層である3-3層と区別が可能であった。

年代・性格 出土遺物から古墳時代後期前後のものである可能性があるが、明言できない。

S K 05 (図169)

調査区西側で検出した中形の土坑である。

規模・形態 プランは長楕円形状を呈し、規模は2.3m×1.4mを測る。壁は比較的急角度に掘り込まれており、深さ0.8mを測る。

遺物 当土坑からは遺物は出土していない。

覆土 S K 04等と同じく、上層は暗黒褐色粘質土、下層は暗灰褐色粘質土で、いずれも白色細砂ブロックを含んでいる。

年代・性格 出土遺物が無く、年代・性格ともに不明である。

S K 06 (図169)

調査区東側で検出した小規模な土坑である。

規模・形態 プランはほぼ円形を呈し、径1.0m~1.1mを測る。断面形は浅い逆台形状を呈し、深さ0.3mを測る。

遺物 当土坑からは遺物は出土していない。

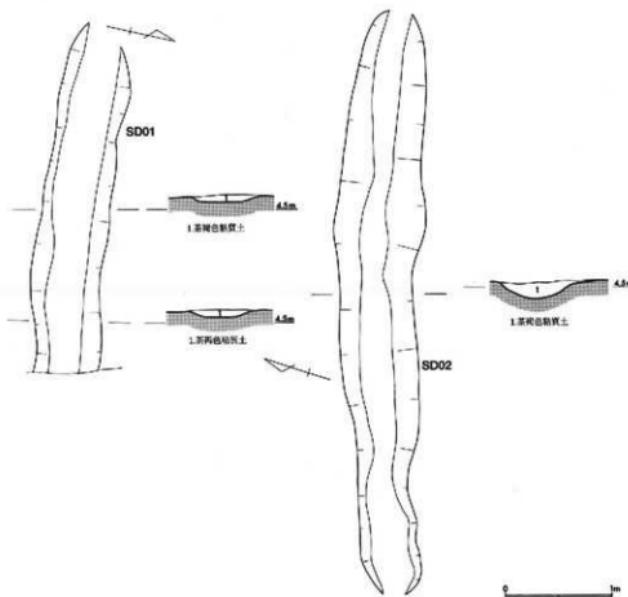


図170 C2-N区 SD01・02実測図 (S=1/40)

覆土 他の土坑と同様、上層に黒褐色系の粘質土、下層に灰褐色系のシルト質泥層である。

年代・性格 出土遺物が無く、年代・性格ともに不明である。

S K07 (図169)

調査区中央部のS D02付近で検出した小規模な土坑である。

規模・形態 ブランは長楕円形を呈し、径0.6m~0.9mを測る。断面形は浅い皿状で深さ10cm前後と極めて浅い。

遺物 当土坑からは遺物は出土していない。

覆土 黒褐色粘質土の單一土層である。

年代・性格 出土遺物が無く、年代・性格ともに不明である。

2. 溝 (図170)

S D01 (図170)

調査区東側で検出した溝で、東側は調査区外へ延びている。

規模と形態 調査区内での溝の規模は現存長で長さ3.4m、幅0.6mを測る。断面形は浅い皿状を呈し、深さ8cm前後とごく浅い。

遺物 遺構内からの出土遺物は無いが、付近から古墳時代後期の須恵器片が出土している。

覆土 溝の覆土は茶褐色粘質土の單一層である。

年代・性格 埋土の状況等からみて、土坑群より新しい時期の遺構と考えられるが、詳細な年代は不明である。

S D02 (図170)

調査区中央部で検出したごく浅い溝である。

規模と形態 調査区内での溝の規模は現存長で長さ5.5m、幅0.5m~0.9mを測る。断面形は浅い皿状を呈し、深さは15cm前後である。

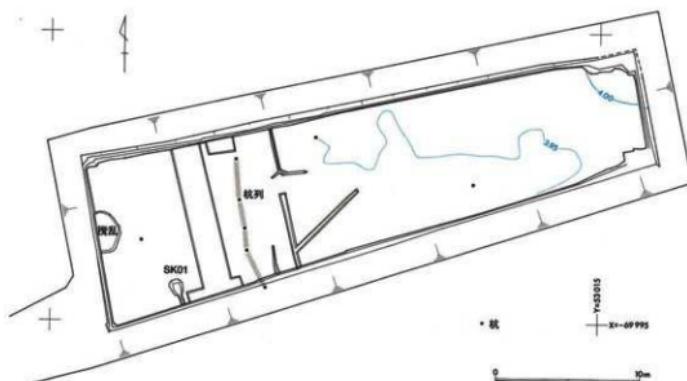


図171 C1-S区 全体図 (S=1/300,5cmコンター)

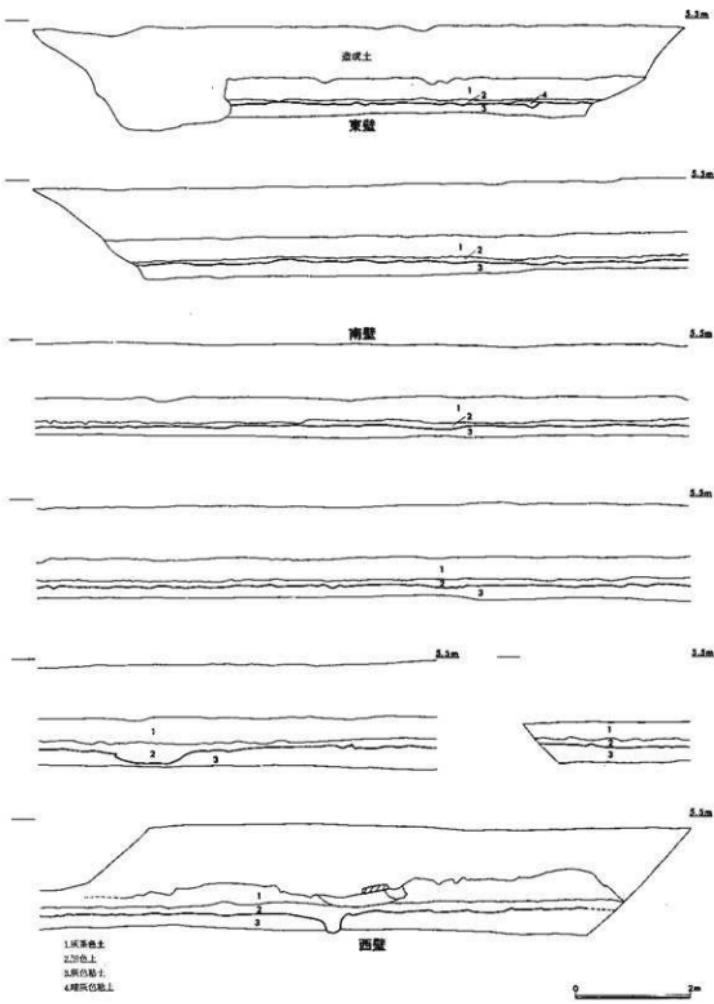


図172 C1-S区 檻査区東壁・南壁・西壁土層堆積図 (S=1/80)

遺物 遺構内からの出土遺物は無い。

覆土 S D01と同様、茶褐色粘質土の單一層である。

年代・性格 埋土の状況等からみて、S D01と同様土坑群より新しい時期の遺構と考えられるが、詳細な年代は不明である。

第4節 C 1-S区の調査

調査区の立地（図160）

C 1-Nの南側に位置する。調査前は県立の公共施設の敷地内であり厚い造成土が堆積していた。この造成はかなり大規模に行われたようであり、遺構面にまでその影響を及ぼしていた。造成土の下層は遺物包含層である黒色粘土層となり調査区一面に拡がっていた。この直下が遺構面であり、灰色粘土層をベースとしている。遺構面は標高4.0 図173 C 1-S区 SK01実測図 ($S=1/40$) ~3.9m前後で、調査区内ではわずかに北東から南西に向けて傾斜している。この灰色粘土層は調査用排水溝の掘削時にも遺物が出土しなかったため、C 1-S区と同様に本調査は行っていない。

遺構の配置（図171）

遺構として明確に検出できたのは土坑SK01と杭列のみである。

基本層序（図172）

基本的に北側に位置するC 1-N区と変わらない。厚い造成土の下に厚さ10cm前後の黒色粘質土（2層）が堆積し、基盤層である灰色粘土層（3層）に至る。黒色粘質土からは少量だが中世土器が出土しており、C 1-N区の調査成果からも中世の水田耕作土と考えられる。

検出した遺構

1. 土坑

SK01（図173）

規模・形態 長楕円形の土坑に溝が連結している。土坑部は長径1.15m、短径0.85m、深さ22cm。溝部は調査区外にも延びているため全容は不明だが、検出長は0.75m、幅0.38m、深さは9cmである。土坑の壁は緩やかなカーブを描いて底面に至る。溝部も同様で断面U字形をなしている。

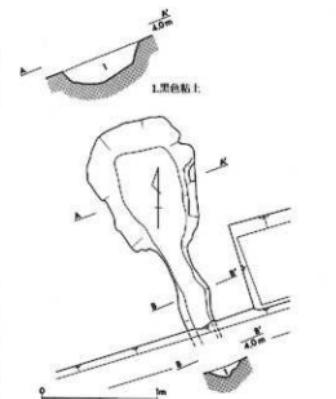
覆土 土坑、溝とも覆土は黒色粘土の單一層である。

遺物 小片だが中世土器が2点出土している。

年代・性格 中世と考えられる。性格は不明であるが、溝と土坑が連結したことから、あるいは、水溜めのような機能かもしれない。

2. 杭列（図174）

調査区のやや西側を南北方向に横断するように並んでいる。杭は全部で7本あり、いずれも丸杭である。杭の太さは直径5cm前後。杭の打ち込まれた時期は不明であるが、杭の先端の標高を較べると、三つのグループに分かれる。一つは、杭の先端が標高3.9mで、かろうじて基盤層に達し



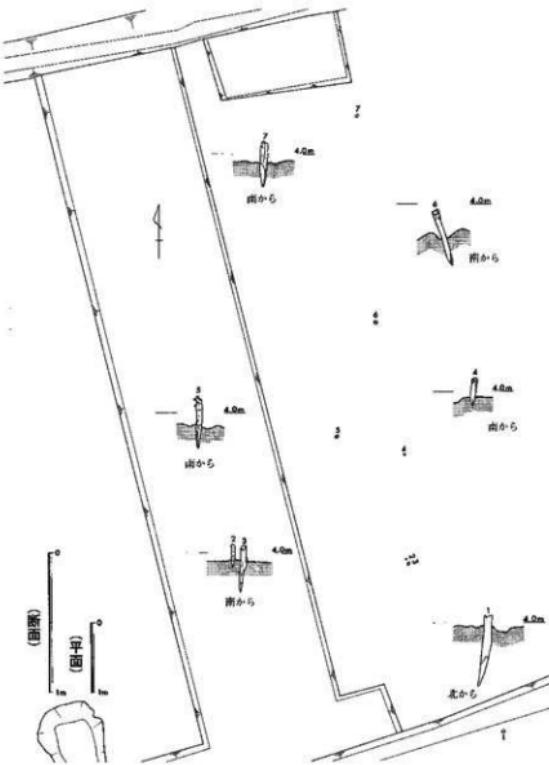


図174 C1-S区 杭列実測図 (平面S=1/60、断面S=1/30)

ているもので、杭2、杭4が該当する。第2のグループは杭の先端が標高3.75mに達するもので、杭7、杭5、杭3が該当する。最後は最も深い標高3.05mにまで達するもので、杭6と杭1が該当する。こうした杭の先端の標高差は、打ち込まれた時期の違いを反映するのではないかと考えられる。この他にも杭を三本検出している。杭の樹種については鑑定していない。

第5節 C2-S区の調査

調査区の立地（図160）

C区のなかでは最も西側になり、B2区の館跡・西大溝からは約80m離れている。

遺構の配置（図175）

遺構は疎らであり土坑3基を確認したのみである。

基本層序（図176・177）

基本的に他の三つの調査区と変わらない。厚さ1.2mにも及ぶ造成土の下に、耕作土が堆積し、中世の水田耕作土と考えられる黒色粘土層が厚さ10cm程度見られる。その下層が遺構面である灰色粘土層になり、標高は3.9m前後ではほぼ平坦である。この層はその形成時期は不明であるが、SK01の断ち割り調査において縄文晩期の土器が僅かに出土している。同層からはC1-N区でも弥生土器（中期末）、古式土師器、須恵器片が出土している。

検出した遺構（図178）

土坑3基を検出している。いずれも調査区外に遺構が抜がっており、全面調査できたものは無い。

S K01（図178）

規模・形態 調査区内で最も大形の土坑である。平面は梢円形を呈し、長径3.0m、短径2.6m、深さ0.9mを測る。壁面はほぼ垂直に掘り込まれ、底面は皿状を呈する。

覆土 黒色から灰色を呈する粘性の強い砂質土が堆積している。

遺物 覆土中の上位から中世土師器が出土しているほか、6~10cm角大の自然石が出土している。

また未分解の植物遺体も混ざっていたが木製品は出土していない。

年代・性格 中世ではないかと思われる。

S K02（図178）

規模・形態 大半が調査区外であり調査し得たのはごく僅かにすぎない。形態は不明だが、調査区内での規模は最大幅が2.7m、深さ0.66mである。壁面は、東側では掘り込み面から深さ50cmのところでステップを持つが、西側では緩やかなカーブを描いて底面に至る。

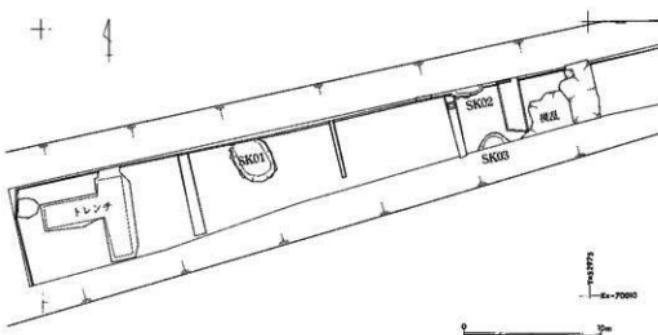


図175 C2-S区全体図 (S=1/300)

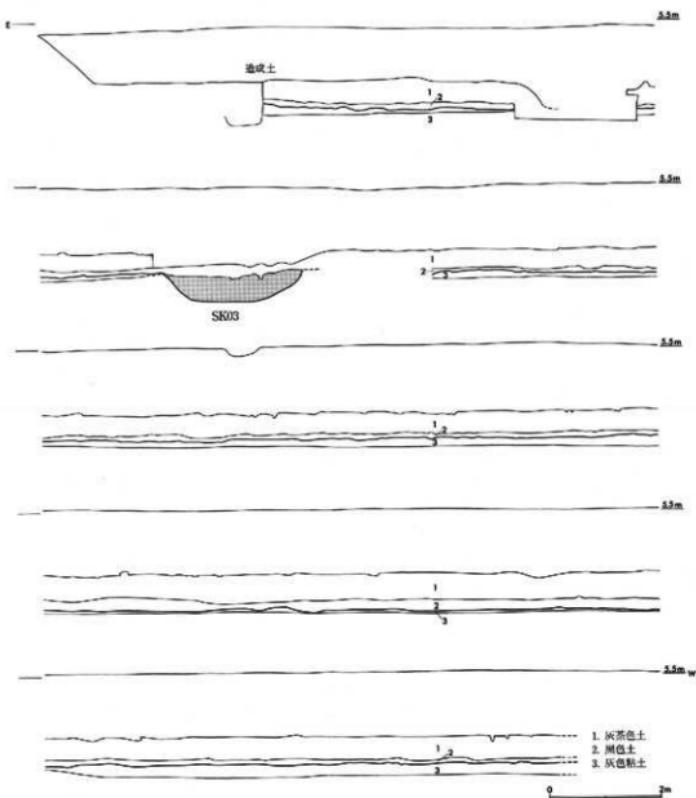


図176 C2-S区土層堆積図(1)～調査区南壁～(S=1/80)

覆土 SK01と同様に黒色～灰色を呈する粘性の強い砂質土が堆積している。

遺物 調査区内では1点も出土していない。

年代・性格 出土遺物が無く年代、性格とも不明である。

S K03(図178)

規模・形態 遺構の大半は調査区外に拡がっている。調査区内での最大幅は2.1m、深さは0.6mである。壁面は緩やかなカーブを描き底面に至る。底面はほぼ平坦である。

覆土 SK01、SK03と同様に黒色～灰色を呈する粘性の強い砂質土が堆積している。

遺物 調査区内では1点も出土していない。

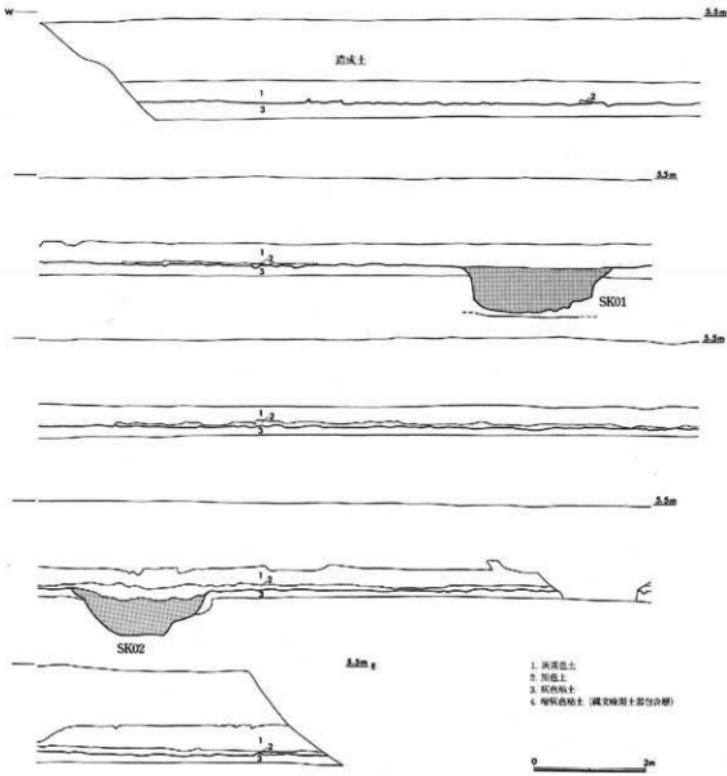


図177 C2-S区土層堆積図(2)～調査区北壁～(S=1/80)

年代・性格 出土遺物が無く年代、性格とも不明である。

このほか、SK01の直下の暗灰色粘土層（第5層）から縄文晩期末（弥生早期）の突帯文土器が出土している（図179）。色調は黒褐色を呈し、粗い砂粒が混ざる。突帯は口縁端部から下がった位置に貼り付け、刻目を付けている。内外面とも貝殻条痕後ナデで仕上げている。

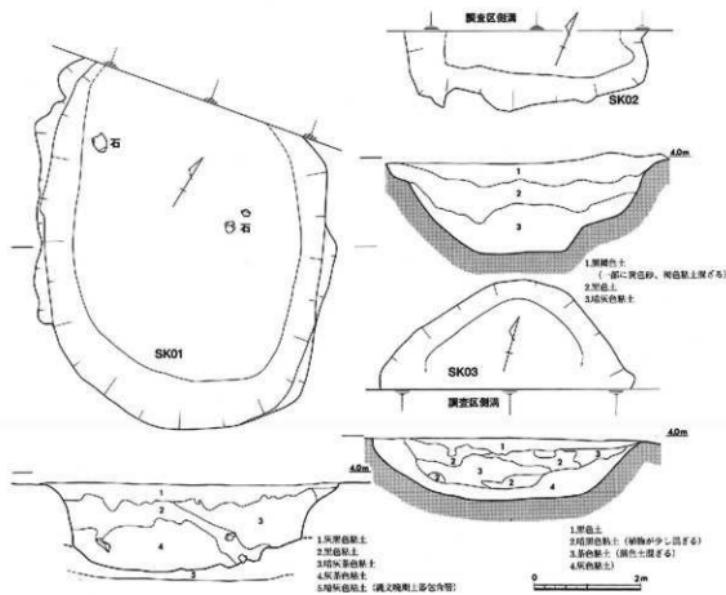


図178 C2-S区SK01~03実測図 (S=1/40)



図179 C2-S区出土遺物実測図 (S=1/3)

第6節 小結

当調査区は中世の館跡を検出したB2区の西側に隣接する調査区であり、それに関連する遺構の存在が予測されたが、既に述べてきたように、中世の明確な遺構はC1-N区のSK05以外には確認することはできなかった。

C区においては、現在の耕作土直下の2層（黒褐色粘質土）が全面的に広がっているのが確認された。この土層は既に述べてきたように、土層観察の結果や花粉分析により水田耕作土と判断される。この層からは少量ではあるがB区で出土していると同様な土師質土器片が含まれていることから同時期のものと考えて問題ない。従ってB区の館の西側には水田耕作を中心とした生産域が広がっていたものと推測される。

この点については調査当初から予想されていたことであり、調査時点においても水田に関わる施設の検出に努めたが、後世の削平により畦畔及び地割りに関する情報を得ることはできなかった。今後、こうしたケースにおいても、疑似畦畔の検出や耕作土直下の鋤痕の分布状況による推定等によって畦畔及び地割り等の情報を得ていく努力を行う必要性を痛感する。

C区で検出した主な遺構はC1-N区北東部の溝群と、C1-N区西側及びC2区を中心として検出したやや大型の土坑群である。前者については本文中にも述べたとおり、生活区域である微高地と低地を区画する性格の溝であったと想定され、年代についても出土遺物は僅少ではあるが弥生時代終末期～古墳時代初頭と考えられる。この時期は他の調査区の状況からみて当地区の開発が本格的に開始された時期であり、これらの溝もそれに関わるものであったと判断される。

後者の大型土坑群については、ほぼ同じ規模で覆土の状況も白色ブロックを含む等類似していることから、比較的近接した時期の物と想定される。わずかにC1-N区のSK05から曲物の底板や土師質土器が出土していることから中世の遺構であることが窺えるが、他の土坑も同様かどうかは判断できない。その性格についても、現状では不明と言わざるを得ず、今後の調査事例の増加を待つて改めて検討してみたい。

出雲平野の中央部における大規模な調査例はまだ少なく、いずれにせよ今回の調査において当地域の土地利用開発史を窺い知る上での幾つかの手がかりと多くの問題点を提供したといえる。

第5章 D区の調査

第1節 調査の前の状況と経過

D区はC2区から約60m西に位置し、西側には県道渡橋平野線を挟んでE区が位置している。出雲バイパス建設工事に伴う試掘調査により、当調査区からは木製品を多数含む旧河道が検出されたため、96年度に本発掘調査を実施する運びとなった。D区の調査対象面積は約1,080m²である。

D区の調査は重機で表土を除去後の7月12日より調査を開始した。調査期間が夏季であったため、遺構面・壁面の乾燥が著しく、遺構面や壁面の精査は困難を極めた。また旧河道であるSR01の調査では湧水が著しく、調査は難渋した。こうした悪条件下ではあったが、9月11日に全ての調査を終了した。

第2節 調査の結果

調査区の立地

D区の現況は水田であり、現状での標高は4.3m～4.4m前後を測る。遺構面は3.5m～3.7m前後であり、C区と同様に北東から南西へ緩やかに傾斜している。調査は無遺物層上面までの掘り下げ

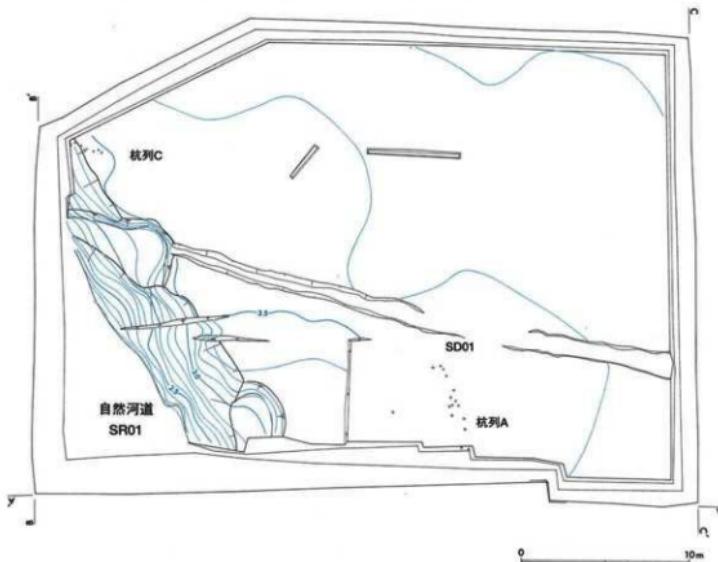


図180 D区調査後地形測量図 (S=1/300、10cmセンター)

を原則とし、河道部分では基盤層である淡灰褐色細砂層（5-1層）まで、その他の平坦部分は淡灰褐色シルト層（5-2層）までの掘り下げを行った。しかし旧河道部分は湧水のため底面までの掘り下げは断念した。

遺構の配置（図180）

当調査区の遺構の配置状況は、まず調査区西側に旧河道である S R01が位置している。この S R01は北西から南東へむけて調査区を縦断しており、河道の左岸は当調査区内では確認できていないが、西隣のE区に左岸を検出している。

この またこの旧河道（S R01）が完全に埋没した後、調査区を東西に横切るように S D01が營まれている。この S D01は近世の水田耕作土と推定される2-1層から掘り込まれているもので、かなり新しい段階の遺構と考えられる。その他、調査区南部に杭列A、S D01に沿うように杭列B、調査区北西隣に杭列Cが營まれている。このうち、杭列A・CはS R01の低湿地部分を意識して營まれた遺構である可能性が高い。

基本層序（図181）

当調査区の基本層序は、旧河道部分（S R01）を除く平坦部については、比較的C区の堆積状況と類似している。東壁（図181C-’C）で説明すると、耕作土（2-1層）の下に暗茶褐色砂質粘土（2-2層）、灰茶褐色シルト層（2-4層）を挟んで黒褐色粘質土（3-1層）が厚さ約10cm前後堆積している。この土層はC区の2層（中世水田耕作土）に土質が類似するものであるが、土師質土器は出土しておらず古墳時代後期の須恵器が若干出土しているため、同一のものとは断言できない。花粉分析の結果でも3-1層はイネ科よりカヤツリグサ科の花粉が多く、水田耕作に関して否定的なデータが示されている。この3-1層の直下には淡灰褐色シルト層（5-2層・無遺物層）が堆積している。

検出した遺構・遺物

1. 自然河道

S R01（図181）

規模・形態 前述のとおり、調査区の西側で河道の東岸部分を南東から北西にかけて検出している。調査区内で検出した東岸部分の長さは約22mを測る。この河道西岸はE区において検出しており、これから推定される川幅は約24.5m前後と推測される。

川岸は比較的急傾斜を呈している。湧水が著しいために川底まで確認できていないが、検出面（3-2層上面）から掘り下げ面までの深さは1.2mを測る。河道の中心部ではおそらく1.5m以上の深さはあったものと推測される。川底のレベルが確認できなかつたため断言できないが、周辺の地形環境や当時西側に位置していたと思われる神門入海の存在からみて、この河道は南東から北西へむけて緩やかに流れていたものと推測される。

層序 S R01の層序は上から順に説明すると、先述した3-1層の下に黒茶褐色腐植土層（3-2層）が約15cm前後堆積している。この土層は未分解の植物質を多量に含む土層で、沼澤地がやや乾燥した段階に形成された層と考えられる。⁽¹⁾ なお後述するようにこの層からは草田編年6期⁽²⁾の甕（図183の3）が出土しており、弥生時代後期終末期にはこの河道の埋没はほぼ終了したものと考えられる。

この3-2層の下には灰茶褐色シルト質粘土～腐植土層が1m以上厚く堆積している（4-1層、4-2層）。この腐植土層はラミナの発達度により大きく上下2層に細分される。上層の4-1層は非常に

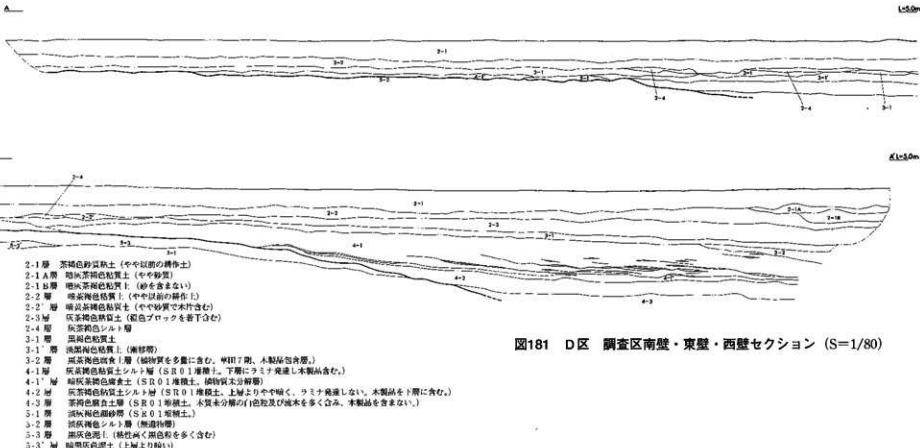


図181 D区 調査区南壁・東壁・西壁セクション (S=1/80)

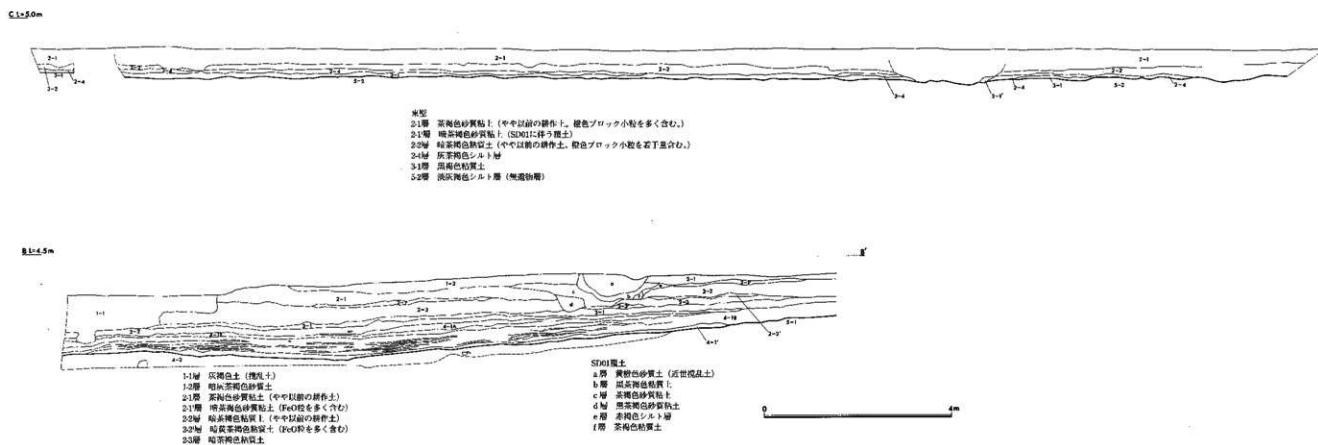


図181 D区調査区南壁・東壁・西壁セクション (S=1/80)

ラミナが発達しているが、植物質未分解層である暗灰茶褐色腐植土（4-1' 層）をはさんで下に位置する4-2層は、土質は4-1層とはほぼ同じであるがラミナの発達がほとんど認められない。この4-1、4-2層からは多数の木製品が出土している。

4-2層の下には茶褐色腐植土層（4-3層）が堆積している。この層には未分解の白色粒及び流木が多量に含まれている。そして、川底では確認できていないが、この下に基盤層である淡灰褐色細砂層（5-1層）が存在している。なお、SR01の川岸部分でこの基盤層の直上より弥生後期初頭の甕（図183の1・2）が出土している。



図182 D区自然河道遺物出土状況実測図 (S=1/80)

以上の堆積状況を勘案すると、SR01は弥生後期初頭には形成され、当初は大型の流木等の存在などからみてかなりの流れがあったものの、4-2層段階にはほぼ沼沢化し、4-1層段階にはラミナの発達の度合いからみて、わずかに流れがある程度に低湿地化が進行し、弥生時代終末期にはほぼ埋没し河道としての機能を終えたものと想定される。

遺物の出土状況（図182） SR01中からは前述のとおり4-1層、4-2層中より木製品が多数出土しているが、これらの大半は建築部材関係の板材や杭材等である。遺物の平面分布には特に目立った特徴は無いが、川岸付近に比較的集中しており、これらは河道方向の軸と平行して分布するものが多い。層位的にはラミナの発達した上層の4-1層からの出土がやや多い。

土器類はSR01中からはわずかに2個体分出土したのみであり、既に述べたとおり基盤層直上から弥生後期初頭の甕が、河道の埋没がほぼ終了した3-2層中より弥生終末の甕が出土している。

なお、河道北東部付近で小規模な、しがらみ状遺構の痕跡を検出した。（図182トーン部分）河道と平行して比較的細い杭材を打ち込み、それに板材を渡す構造のものである。大半は既に流出しているために全体の構造は不明だが、もとは護岸状の施設であったと考えられる。同様な施設は規模の差はあるが、同じ出雲バイパス関連調査の藏小路西遺跡A区や姫原西遺跡B区で多数検出されており、いずれも弥生時代後期段階のものである。

S R01出土遺物（図183・184）

A. 弥生土器（図183）

図183の1、2は河道基盤層のほぼ同一地点から出土した甕で、同一個体と考えられるものである。口径は推定15.3cmを測り、口縁部は内傾しつつ上下に若干拡張し、断面三角形状を呈する。拡張部の外面には2~3条の凹線文を施している。肩部にはクシ状工具によるものと思われる「ノ」字状連續刺突文を2段にわたって密に施している。内面は上方向のヘラ削りが頸部屈曲部まで及んでいる。器壁はやや厚く色調は淡黄褐色を呈する。以上の特徴からみて弥生後期でも古い段階、門生編年I期⁽³⁾に属するものと思われる。

3は既に述べたとおり河道埋没時に投機された甕の上半部で、口径14.9cmを測る。口縁部は複合口縁状を呈し、口縁部端部は水平方向にやや比較的シャープに突出する。口縁部はやや厚手でやや外方へ直線的に立ち上がり、口縁部端部は外方向へやや突出する。肩部は比較的丸味を帯びる。調整は外面がタテハケのち、肩部にヨコハケを巡らせている。内面は右方向のヘラケズリを施している。以上の特徴から、草田編年6期、塩津山編年6期⁽⁴⁾に属するものと考えて大過無い。

B. 木製品（図183・184）

図183の4はいわゆるナスピ形着柄鉤で、4-2層中から出土した。上原真人分類の曲柄又鉤Dに分類されているものであり⁽⁵⁾、刃部の大半を欠損している。軸部は傘形を呈し基部の長さは18.5cm、最大幅12.3cmを測る。厚さは軸部先端部付近で1.1cm、最大幅付近で1.5cmを測る。加工痕、着装痕は現状では確認できないが、平面図で示している面の裏面が平滑であることから柄が添えられるのはこの面と想定される。樹種は鑑定していないため不明だが、肉眼観察ではカシ類と思われる。

図183の5は削物の槽で、4-1層から出土したものである。平面形は方形を呈し、長さ40.7cm、幅15.8cm、最大高8.2cmを測る。底部は比較的厚く2.6cmあり、槽内部の深さは6.5cmを測る。加工はやや粗く、外面には比較的明瞭に加工痕が観察できる。樹種は鑑定を行っていないが、スギ材の極目材を使用したものと思われる。

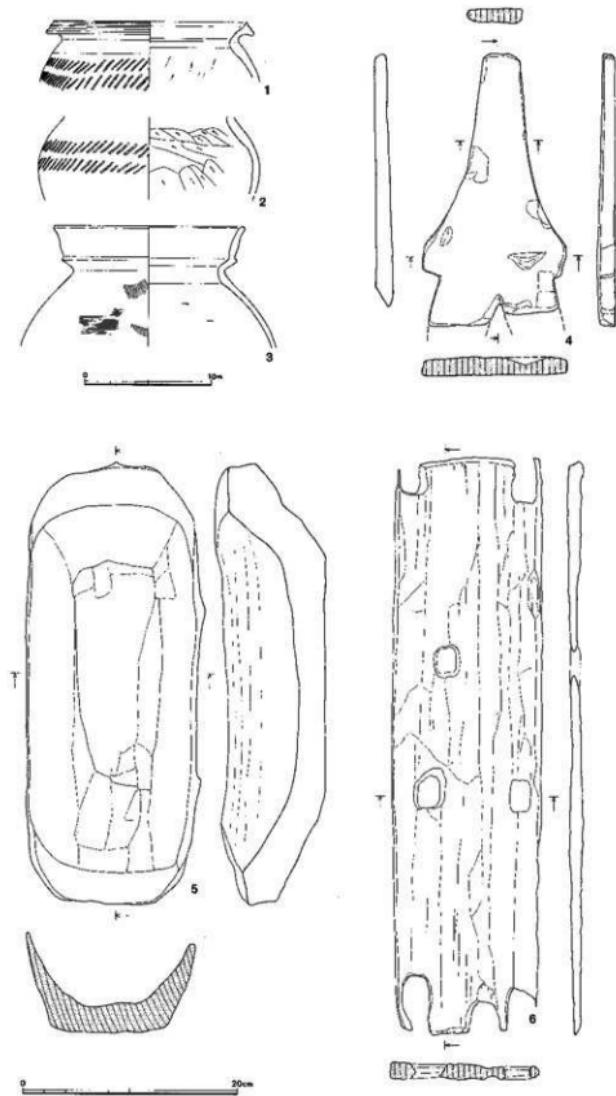


図183 D区出土遺物実測図 (1) (1~3はS=1/3・4~6はS=1/4)

図183の6は田下駄または大足状の木製品である。長さ53.1cm、幅13.9cmの板材のほぼ中央部に 2×3 cmの方形の孔を3ヶ所穿っている。図上上端には両端に、下端には両端と中央の3ヶ所に方形の刺り込みが認められる。厚さは1.5cm前後を測る。加工痕は風化が著しい為不明。

図184の1は用途不明の板材であるが、何らかの未成品と考えられるもので、長さ30cm、最大幅15.5cm、厚さ1.8cmを測る。下半部の一部を欠損しているが、長方形の板材の長辺側にV字状の刺り込みを入れている。板材の上下端にはより長い板材から截ち切り折り取った痕跡が認められる。表面には加工痕が顕著に認められる。

図184の2、3は部材である。2は4-1層中より出土した板材で、長さ51.3cm、最大幅10cm、厚さ1.8cmを測り、下半部を欠損している。板材小口部の片側にL字状の刺り込みが認められる。

3は用途不明の

部材片の柾目状の

板材で、長さ46.5

cm、最大幅11.7

cm、厚さ2.3cm

を測る。板材上端

には 7×4 cmの

L字状の刺込みが

認められ、また長

片片側にも幅2.5

cmの方形刺込み

がある。板材の表

面には両面に焦げ

跡が顕著に認めら

れる。

4は逆三角形状

の木製品で、長さ

38.1cm、幅20.7

cmを測り現状で

2つに分割されて

いる。厚さは1

cm前後と比較的

薄い。上端右側に

8mm四方の方形

の貫通孔が穿たれ

されている。左側は

欠損しているため

不明だが、本来は

存在していた可能

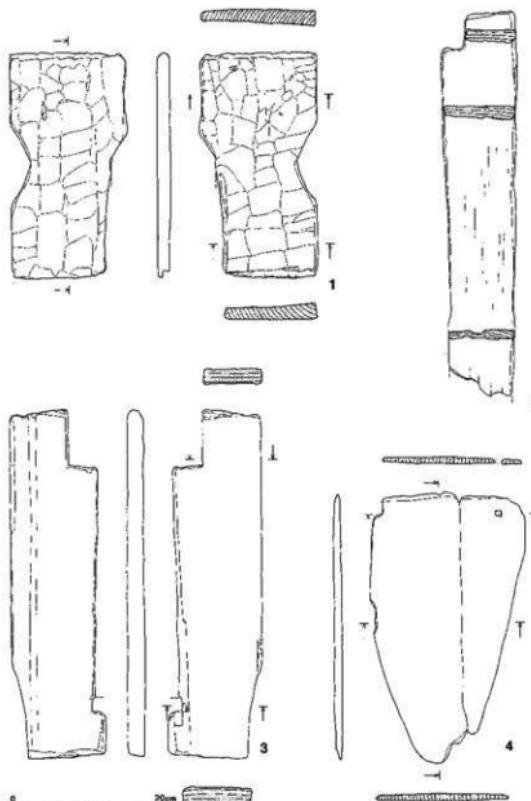
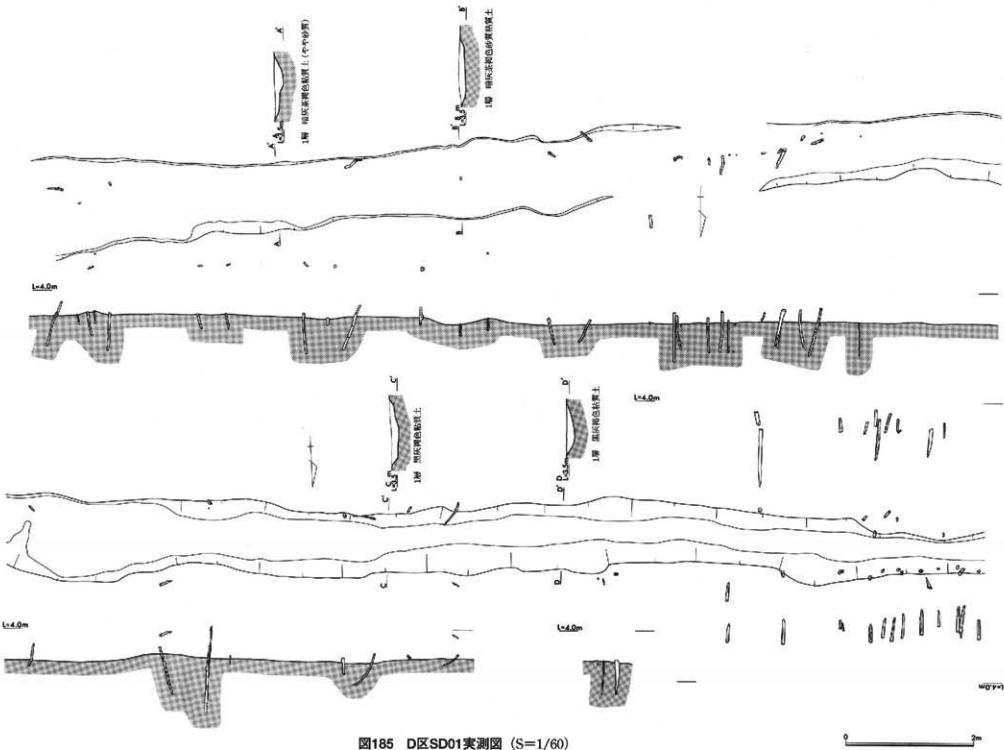


図184 D区出土遺物実測図 (2) (S=1/6)



性が高い。何らかの製品と考えられるが用途は不明である。

2. 溝

S D01 (図185)

規模と形態 D区を東西に横断する溝で、調査区のほぼ中央部に位置しており、後述する杭列Bとほぼ重複している。調査区内での規模は、長さ31m前後、幅0.6~1.4m、深さ0.1~0.15mを測る。

出土遺物 溝の覆土中からは、図化していないが近世~近大の陶磁器が若干出土している。

覆土 溝の覆土は砂混じりの暗灰褐色~黒灰褐色の粘質土が堆積していた。後述するようにこの溝が埋没した後にほぼ重複するように杭列Bが營まれていることから、この砂混じりの覆土は意図的に埋められた可能性も考えられる。

年代と性格 このS D01はS R01が堆積した西壁セクションで観察すると(図181B-B')、やや以前の水田耕作土と想定される2-1層上面から掘り込まれており、かなり新しい段階の遺構であると考えられ、出土遺物もこの所見と矛盾しない。性格は不明と言わざるを得ないが、この段階で付近に水田が広がっていたことが理化学的分析から想定されることから、水田耕作と何らかの関連のある施設であったか、もしくは区画としての意味を持つものであった可能性が想定される。

3. 杭列

杭列A (図186)

規模と構造 調査区中央部南側に位置する杭列であり、5-2層まで掘り下げた時点で検出したものである。南東から北西にかけて延びており、長さ5.3mに及んでいる。

杭列は整然と並ぶような状況ではなく、幅70cm前後で不規則に打ち込まれている。杭間の距離は、0.2~1.1mと不規則な感覚で配置している。

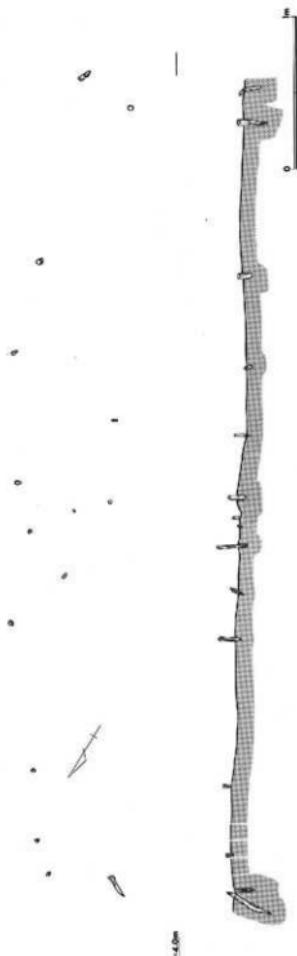


図186 D区杭列A実測図 (S=1/30)

使用されている杭材は径10cm弱の比較的細い丸太材を使用しておりしっかりした構造のものではない。杭の打ち込まれたレベルも浅いものから比較的深く打ち込まれたものもあり、一定していない。年代と性格 杭の打ち込まれている面が不明なため、築造された年代については不明といわざるを得ない。遺構の性格としては、杭列の方向がSR01の方向に一致して

いる点から、護岸状の施設、または低地と微高地を区画する性格のものであった可能性がある。

杭列B(図185)

規模と構造 SD01とはほぼ重複して営まれた杭列である。約1mの幅にほぼ2列にわたって打ち込まれているが、整然としたものではない。杭列も比較的密な部分と粗な部分がある。杭の深さは浅いものもあるが50cm以上の深さに打ち込まれているものも多い。杭材は竹材が多く使用されている。

年代と性格 SD01の埋没後に営まれたことは明らかため、SD01に後出する遺構であることは疑いない。SD01と同じ位置に配置していることから、SD01廃絶後にその役割を代替する区画としての役割をはたしていた可能性が想定される。

杭列C(図187)

規模と構造 調査区の北西隅で検出した杭列であり、杭列Aと同様3-1層を除去し5-2層上面で検出した杭列である。杭列の長さは残存する部分で長さ2.0mを測る。杭は20~40cm間隔で打ち込まれているが整然としたものではない。使用された杭材は杭列Aと同様なもので、比較的細い丸太材を使用している。打ち込まれた深さ数cmの浅いものから40cm以上に及ぶものまでばらつきがあるが、比較的深く打ち込まれているものが多い。

年代と性格 杭が打ち込まれた面が不明なため、遺構の年代については不明といわざるをえない。ただ位置関係からみて、SR01の川岸部分に打ち込まれていることから、SR01がまだその機能を終焉するまでの段階に営まれていた可能性が高い。性格についても杭列Aと同様、護岸的性格または低湿地と微高地を区画する性格のものであった可能性が考えられる。

第3節 小結

D区では検出した遺構は、自然河道1、杭列3、溝1のみであり、少なくとも中心的な居住域からはやや離れた地域であったといえる。また、当調査区においてもC区で認められた中世の水田耕作土とみられる土層(3-1層)が認められたが、理化学的分析の結果では水稻耕作に否定的なデータが得られている。少なくとも当調査区付近は中世段階では居住域・生産域としては有効に利用されていなかったことがうかがえる。

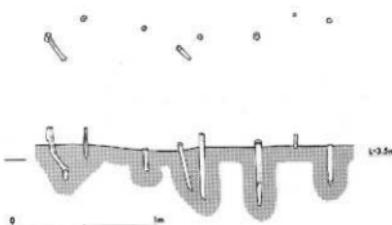


図187 D区杭列C実測図 (S=1/30)

当調査区で注目されるのは自然河道 S R01の存在である。本文中でも述べてきたように、この河道は弥生後期初頭までには形成され、まもなく沼沢化し、弥生後期終末には完全に埋没している。よって、この河道中の出土遺物は弥生後期のものと考えられ、それぞれの木製品の特徴もこの時期のものとして矛盾無いものである。

出雲平野における弥生時代の木製品は、出雲市教育委員会の調査した天神遺跡⁽¹⁾の資料のほかには目立ったものはこれまでにはなく、今回の出雲バイパス関連の調査で姫原西遺跡出土資料を中心に、非常に豊富な資料を得ることができた。当調査区出土の槽等も今まで当地域では類例の乏しいものであり、注目される遺物である。

D区で検出したものと同様な自然河道は、当出雲バイパスの調査では、姫原西遺跡B区、蔵小路西遺跡A区、E区、F区で検出している。これらの自然河道は、いずれも弥生後期初頭段階までには形成され、弥生後期終末にはほぼ同時に埋没している点で共通しており、極めて興味深い。当地区を中心とする出雲平野中央部のアルタ地域の本格的開発が弥生後期に始まり、弥生時代終末から古墳時代初頭にかけて旧河道が埋没した時点で一気に活発化していったことを断片的に示すものであろう。弥生時代終末～古墳時代初頭の遺構は蔵小路西遺跡では中世遺構に削平されあまり残っていないものの、B区やC区で断片的に検出されており、この段階にこの区域の微高地が生活域として利用され始めたことが窺える。当調査区の北に位置する小山遺跡第1地点の表採遺物⁽²⁾も、後期終末～古墳時代初頭の遺物が大半を占めていることから、同様な傾向が窺える。D区のS R01の出土遺物もそう遠くから流れてきたものとは考え難く、付近に同時期の居住域が存在するものと想定され、今後この付近の同時期の居住域・生産域の存在に注意していく必要があるだろう。

いずれにせよ、当調査区におけるS R01の検出は、これまで殆どデータの無かった出雲平野中央部における、その地形発達史及び土地利用開発の様相を検討していく上で重要な知見を得ることができたとともに、新たな幾つかの問題点を提供したと言える。

註

- (1) (株)パリノサーヴェイ 辻本裕也氏のご教示による。
- (2) 赤澤秀則編 『南講武草田遺跡』鹿島町教育委員会 1992年
- (3) 丹羽野 裕・池淵俊一編 『門生黒谷I遺跡・門生黒谷II遺跡・門生黒谷III遺跡』島根県教育委員会 1998年
- (4) 丹羽野 裕編 『塙津丘陵遺跡群』島根県教育委員会 1998年
- (5) 上原真人編 『木器集成図録 近畿原始篇』奈良国立文化財研究所 1993年
- (6) 岸 道三他編 『天神遺跡第7次発掘調査報告書』出雲市教育委員会 1997年
- (7) 出雲考古学研究会 『出雲平野の集落遺跡II－矢野遺跡とその周辺－』古代出雲を考える5
1986年

第6章 E区の調査

第1節 E 1区

概要 D区の西、市道渡橋平野線の西にあたる。調査前は水田が埋め立てられ駐車場として整地されていた。調査の結果、D区の続きにあたる自然河道の西岸を検出した。また河道理済後の遺構、遺物もわずかに検出している。

1. 自然河道（図190・図191）

E 1区ではD区から続く自然河道（以下、河道）の一方の岸を検出した。検出長は24m。河岸は調査区内で最も高いところで標高約3.7mを測り、ほぼ平坦に拡がる。河岸の肩部は標高約3.4mであり、なだらかに河道内に傾斜している。河道は灰色系の細砂層を基盤層としている。河道内の堆積土は基本的に泥層からなり、泥層中には腐食した植物が多量に混ざっている。このことから流れの無いよどんだ状態で凹地化し、序々に埋没していったものと考えられる。河道の底面は検出していないが、標高1.8mまで泥層が堆積しているのを確認した。河道底面は更に深くなることが考えられる。河道の流向については土層堆積状況や木製品、流木の伸長方向をもとに検討したが本調査区の知見だけでは判断出来なかった。

2. 自然河道にともなう遺構（図189）

河道内の堆積土中に打ち込まれた杭を6本検出している。河岸から離れた位置にあり、それぞれの杭に規則的な並びは見受けられない。この杭群もある時期の河道内の流れに対応しているものと考えられる。河道内からは他にも杭が出土しているが、もともと打ち込まれていたものが流出したのかは不明である。

3. 自然河道出土遺物（図188）

河道内からは弥生土器約20点と木製品（杭）が出土している。弥生土器はいずれも小片であり、



E 1区 調査風景

図化できたのは図188の1～3のみである。いずれも甕で松本編年のI-2～I-3様式に相当するものと思われる。色調はいずれも濃茶色で4mm以下の石英等の砂粒が混ざっている。1は内外面ともハケ調整で頸部には指頭圧痕。2は内外面ともハケ後ナデ。2と3には外面にヘラ描直線文を施している。なお図化していない弥生土器のなかには後期に含まれるものも見られる。

4. 河道埋没後の遺構・遺物（図190・図191東壁）

調査区東端で河道と河岸を覆う砂層に打ち込まれている杭群を検出している。杭は先端を一方向あるいは二方向から加工しただけの簡単なものである。杭は総て近年の擾乱によって頭部が失われているため、どの段階で杭が打ち込まれたのかは不明である。しかし、杭の先端が総て同じ深さに打ち込まれていること、三点が近接していることから、同時期に打たれたものと考える。打ち込まれた時期だが図191の東壁土層図で見ると第53層（灰白色細砂）に打ち込まれているのがわかる。この層からは図190の4の中世土師器の壺が出土している。このことから中世以降に打ち込まれたものと思われる。

河道が削り込んでいる基盤層上面からは遺構は検出していない。遺物は中世土師器の小片のほか調査区西端で基盤層直上から漆器碗が1点出土している（図188の4）。現存する高さ1.9cm、底径8.6cm。横木取り。全体に磨滅が著しいが内面に黒色漆が残る。

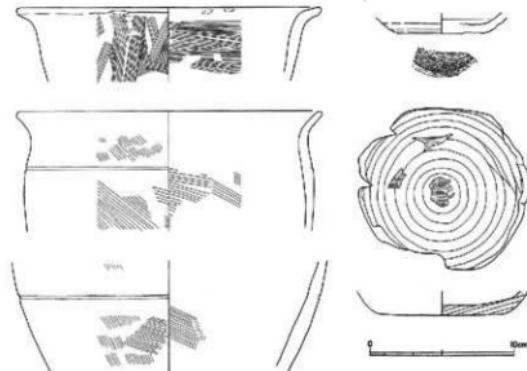


図188 E1区出土遺物実測図 (S=1/3)

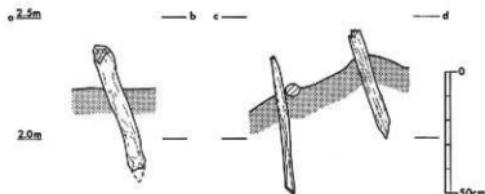


図189 E1区杭列実測図 (S=1/20)

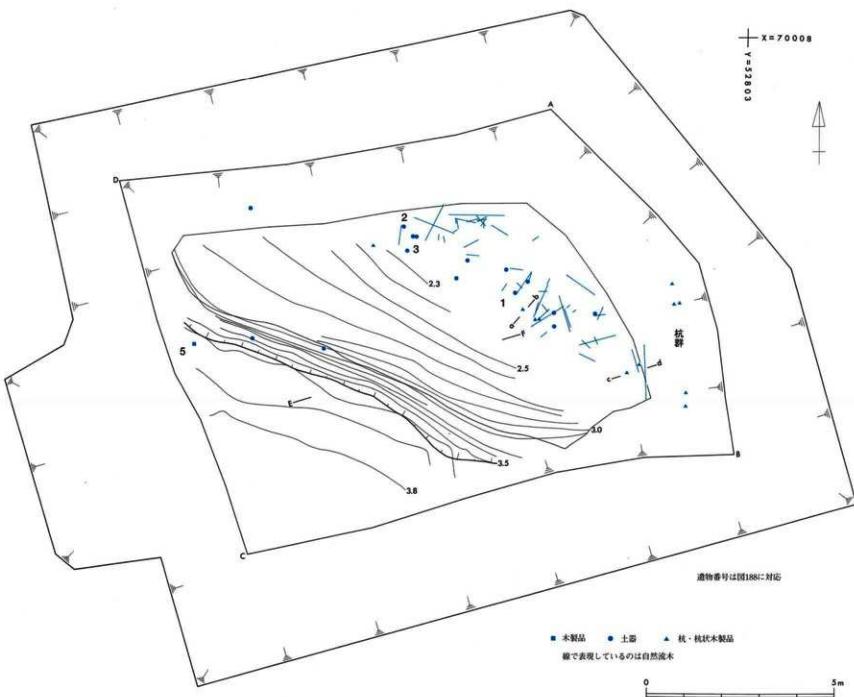


図190 E1区自然河道 実測図 (S=1/100, 10cmコンター)

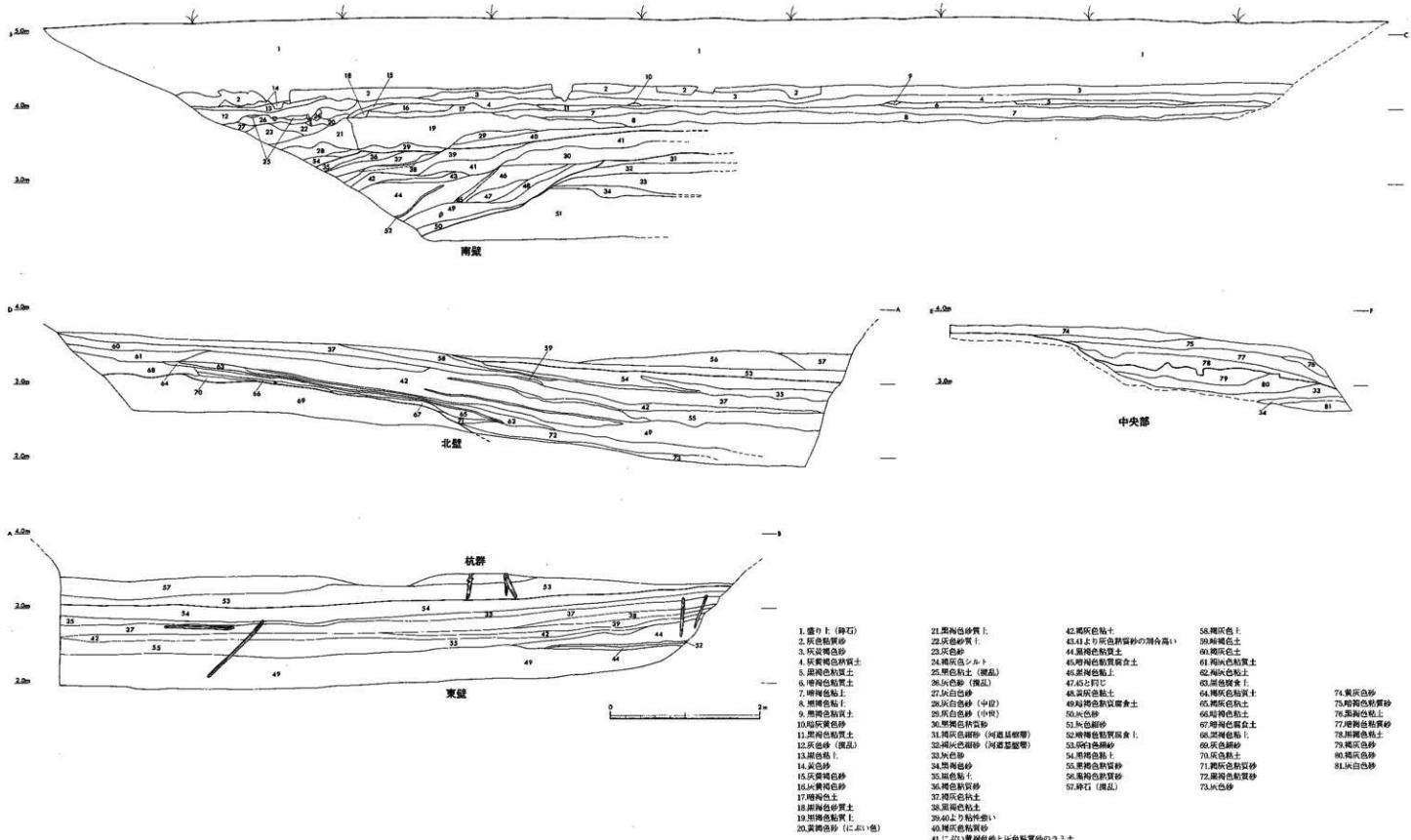


図191 E1区土層堆積図 (S=1/40)

第2節 E 2区

概要 調査区は調査前には水田が営まれており標高は4.5mであった。トレーニング調査の結果や調査の先行していたF 1区の状況から、遺構密度は薄く、中世以降には水田耕作が営まれていた、いわゆる「クラC」の調査区であろうと予想していた。しかし、調査の結果、C区の中世耕作土（黒褐色粘質土）に対応するものは認められなかった。D区の調査成果も勘案すると、D・E 1区の自然河道埋没後もこの一帯が水田耕作に適さない環境であったものと考えられる。

1. 基本層序 耕作土直下が遺物包含層である暗灰色粘土層である。この層からは遺物は総量でコンテナ2箱出土した。内訳はそのほとんどが中世～近・現代以降の陶磁器であり、若干弥生後期の土器や須恵器が認められた。いずれも細片のため詳細な時期は不明である。その直下が基盤層であるが、基盤層は調査区西側ではF 1区でも確認された細砂層であるが、東にいくにつれて湿地状のシルト層へ漸移している。この基盤層についても調査区を南北に縦断するトレーニングを設定して掘り下げたが、遺物は出土しなかった。

2. 遺構・遺物 遺構面は標高3.95mで、ほぼ平坦だが、わずかに北東に傾斜する。C区と同様に中世水田の痕跡の検出につとめたが確認できなかった。遺構として確認されたのは溝跡一条のみである。溝跡は調査区の西端を北北西から南南西に縦断するように検出した。幅2.5m～4.0m、深さ25～35cm。断面は皿状を呈する。溝跡の堆積土は上層の暗灰色根粘質土層と下層の灰白色砂層に分けられる。上層には中世土師器の小片が多く含まれている。底面のレヴェルから北から南に流れている可能性が強い。遺構の時期は不明である。

この他、調査区の南東隅では液状化現象の痕跡が確認できた。これは後述するF 1区でも確認されており縄文晩期末（弥生早期）以降の時代の地震にともなうものである。

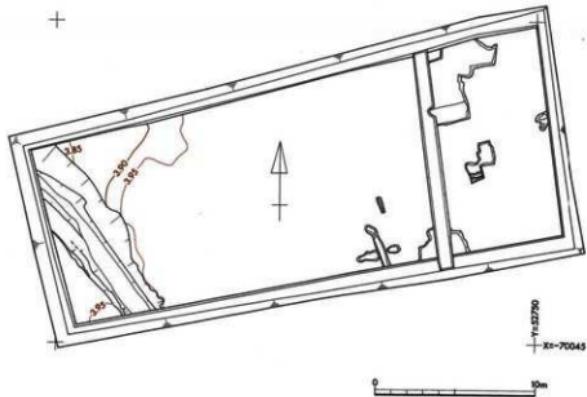


図192 E2区全体図 (S=1/300, 5cmコンター)

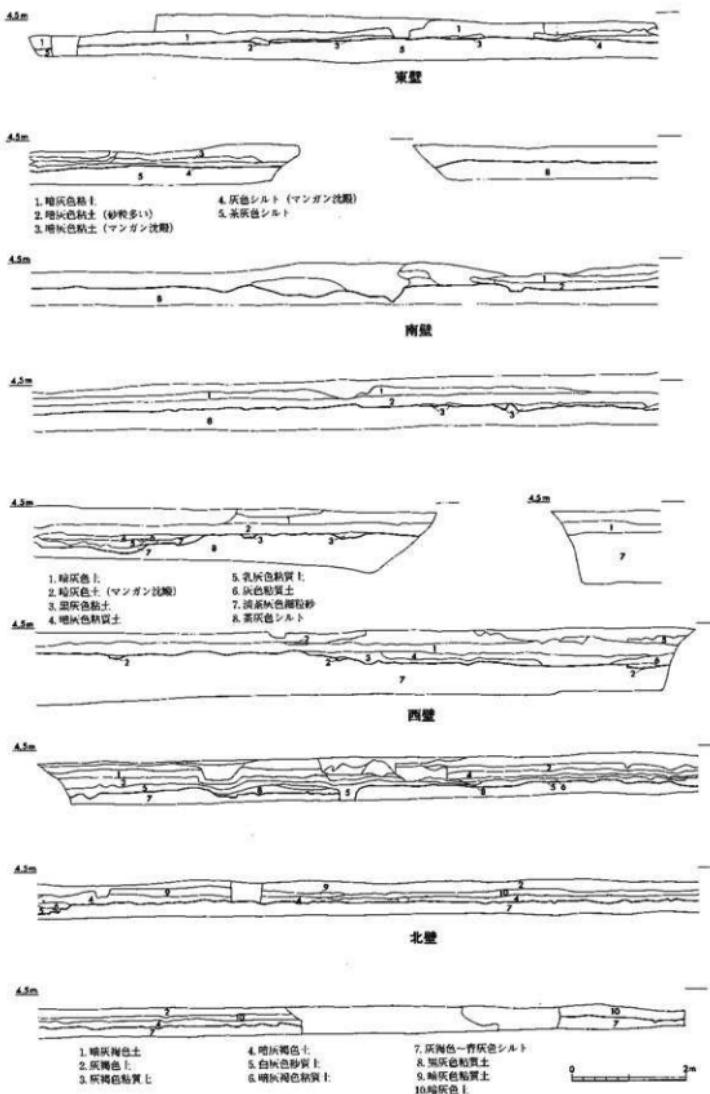


図193 E2区土層堆積図 (S=1/80)

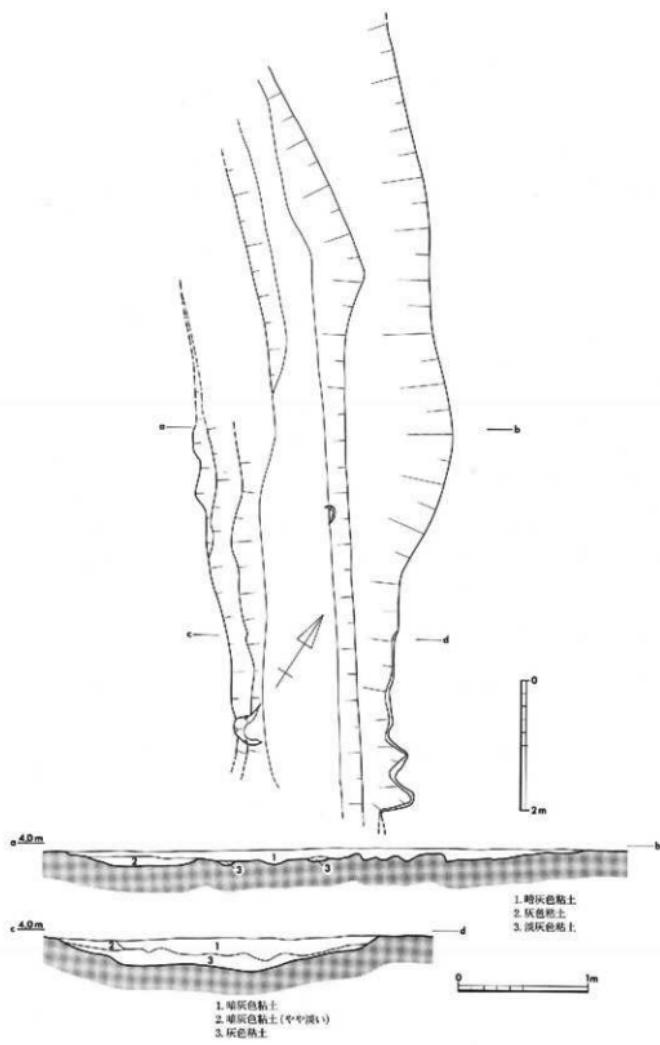


図194 E2区溝跡実測図 (平面はS=1/80、断面はS=1/40)

第3節 小結

自然河道について（E 1区）

本調査区の自然河道は東側のD区で検出された自然河道と位置関係、標高からみて同一の河道と考えられる。以下、D区の調査成果（P198～199）とあわせて読んで頂きたい。

1. 河道の規模

ひとことで言えば小規模な河道である。最終的に削り込んだ東西の肩口の幅は24m。深さは底面まで調査していないが、D区で1.2m、E 1区で1.8m。少なくとも中心部では1.8m以上の深さと推測される。

2. 河道の流向

土層観察や出土した自然流木の伸長方向から検討したが明確には判断できなかった。しかし、現在の地形や当時西側に存在したであろう神門水海の存在を考慮すれば南東から北西への流れの向きが想定できる。

3. 河道の時期

D区の調査成果から弥生時代後期初頭に形成され弥生時代末から古墳時代初頭に埋没したものと考えられる。この時期に姫原西遺跡、藏小路西遺跡A、F 2区の河道とも埋没しているようである。

4. 河道周辺の環境

河道内からは弥生時代中期初頭から弥生時代末の土器や弥生後期の木製品が出土している。泥層から出土していることや、遺物の遺存状況も合わせて考えると、こうした遺物はそう遠くないところから流れ込んだものと思われる。このことは、ごく近いところに居住域、生産域が存在することを示すといえ、その有力候補地の一つに四絡遺跡群の小山遺跡第1地点⁽¹⁾（図224）が挙げられる。

自然河道のその後

調査区内の自然河道は次第に干上がり凹地化していったようであるが、河道自体は流路をかえたのであろう。その後の変遷を考える上で看過できないのが昭和30年代の土地改良によって現在調査区北側に付替られている古井手川の存在である。後述するF 1区でも土地改良前の古井手川が中世の河道にまで遡ることがわかっている。本調査区内にも洪水により運ばれたと思われる中世土師器の混ざった粗砂層が認められることからも、河道はごく近いところにその流れを変え、川幅を固定、管理されていったのではないかと推測される。

では河道埋没後の本調査区の状況であるが、D区、E 2区のところでも述べたように居住域、生産域としては適さなかつたようである。E 2区でも中世耕作土に相当する土層を確認できていない。しかし、E 1区の基盤層上面からは漆器皿も出土していることや、中世土師器の混ざった洪水砂が調査区を覆っていることから見て、中世の居住域、生産域もごく近いところに存在しているようである。

註（1）出雲考古学研究会「出雲平野の集落II」「古代の出雲を考える」5 1986

田中義昭「出雲市小山遺跡第1地点の調査」「古代金属生産の地域的特性に関する研究－山陰地方の銅・鉄を中心にして－」1992

第7章 F区の調査

第1節 F1区

概要 調査区の東2/3が淡灰褐色細砂をベースとした微高地であり、疎らではあるが遺構を検出している。西1/3は中世から昭和30年代まで続く自然河道である。この河道は現在調査区の北側に付替られている旧の古井手川である。以下の文章中では埋立て直前の河道を旧古井手川という名称で切り取って表記する。自然河道の粗砂～レキを主体とした河川堆積層からは、木製品、土器が出土している。河道にともなう遺構は大溝、杭列が見られる。このほか微高地の基盤層からは縄文晩期（弥生早期）の遺構と遺物を検出した。

1. 旧古井手川（図199） 聞き取りによれば昭和30年代まで機能しており、土地改良事業によって浜砂で埋め立てられたようである。川幅は1.5m前後。北東から南西に向けて流れているようである。川の中からはガラス瓶、瓦から卒塔婆までありとあらゆる生活ごみが出土した。川にともなう遺構としては東岸の3か所で杭列を検出した。いずれも打ち込んだ杭に横倒しにした板を組み合わせたもので、護岸を目的としたものと考えられる。川が流れていた頃、東岸は水田が営まれていたようであり、調査区にも水田の区画に伴う加工段が見られた。

2. 自然河道（図195～198）

自然河道が削り込んだ東岸から西岸までの幅は9～14m。河道は最終的に川幅が固定されるまで何度もその流路を変えていったものと思われる。河道の変遷を平面的に追いかけることはできな

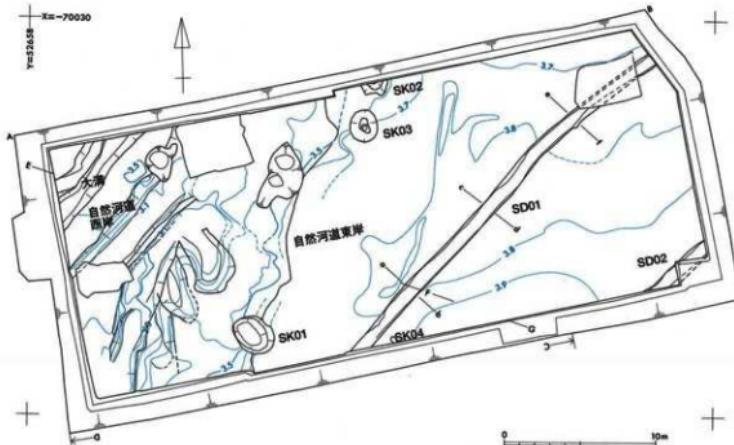


図195 F1区全体図 (S=1/300、10cmセンター)

かった。このため堆積層を掘り上げた後、土層断面 C D・E F ラインを軸に検討し、河道底面の削り込みの切り合い関係を加味して次のように変遷を考えた。河道は図195の自然河道東岸としているラインから序々に西側にシフトしていった。その最も古い河道は河道Aである。この河道Aは東南方向にも延びる三つの削り込みを切って北東から南西方向に流れている。その後、河道は河道B、河道Cへと流路を変えていく。そして最終的には河道Dの段階で川幅が固定されたものと思われる。河道の堆積層を見てみると、自然河道東岸から河道Aの削り込み面までは砂混じりの粘質土層が主体であるのに対し、その他は粗砂～レキ層を主体としている。

3. 自然河道に伴う造構（図200・201）

大溝、杭列は河道Dに平行になるように造られている。こうした位置関係を積極的に評価すれば、大溝の掘削は河道の固定という土木工事の一環として行われたものともいえよう。以下、造構ごとに見ていいく。

大溝 調査区内での検出長は8.5m。E F ラインのところで幅は上面で1.97m、底面で40cm、深さ45cm。溝の肩は西岸が検出面から深さ15cmのところで幅50cm前後の段を造り底面に至る。埋土は粗砂～細砂混じりの粘質土を主体とする。

杭列造構 河道に伴う杭を平面的に列をなすもののみ抽出し杭列AからDとした。ただし同じ列の杭でも杭の先端の標高にバラつきがあることから、總てが同時期に機能したものかどうかは不明である。杭はいずれも丸杭で先端を切り落としただけのものである。杭列Aは大溝の底面に東肩と平行になるように打ち込まれている。他の列の杭と較べて細長いものが多く見られる。杭の先端の標高は、最も深いもので2.0mにまで到達していた。杭列Bは大溝東肩から少し離れた、大溝と河道の間の高まり上に打ち込まれており、大溝とほぼ平行になる。杭列Cは河道の西肩口に平行に打ち込まれている。杭列Dは河道の東肩口に打ち込まれている。



F 1区 調査風景

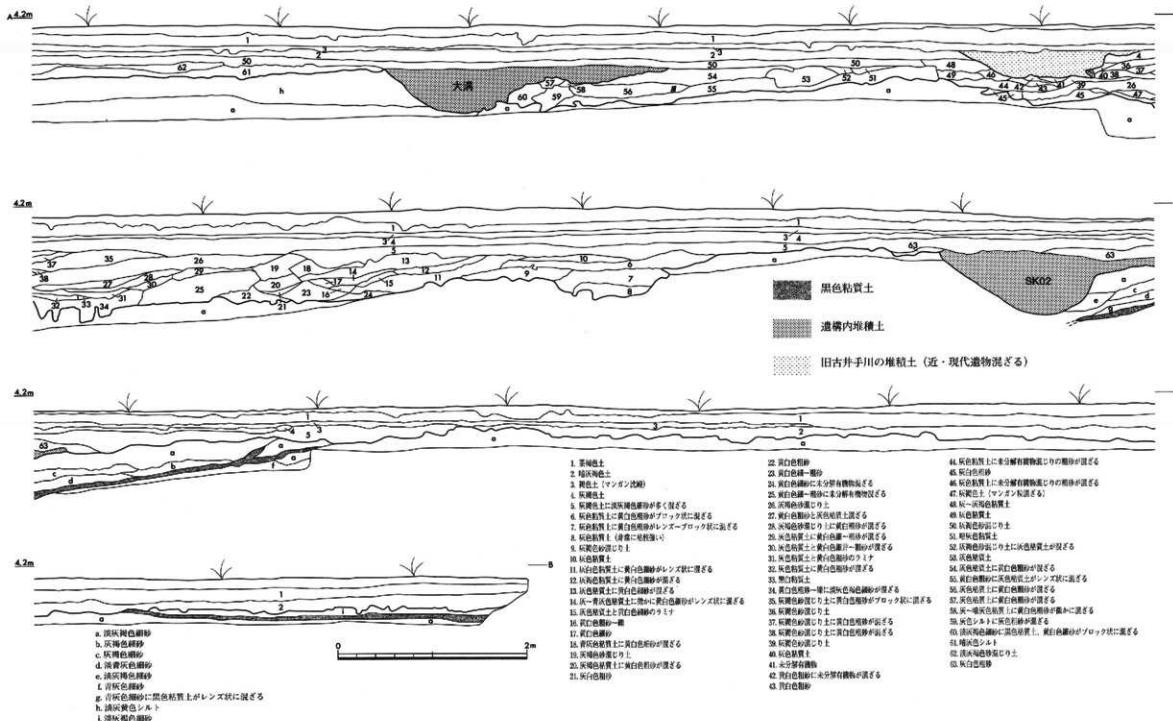
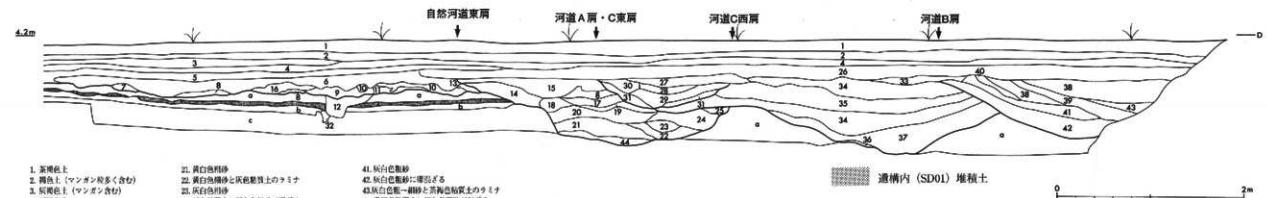
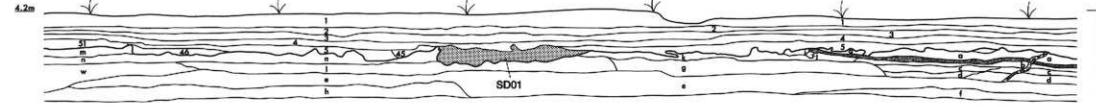
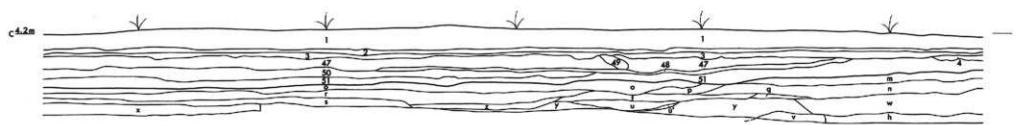
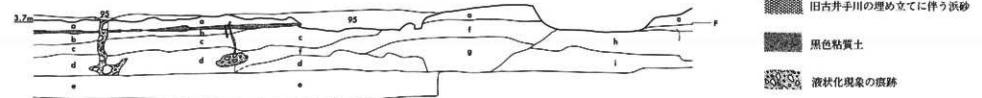
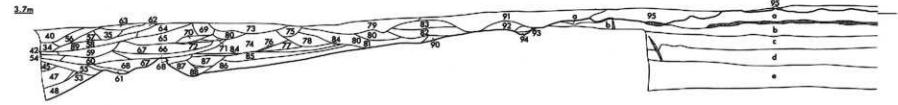
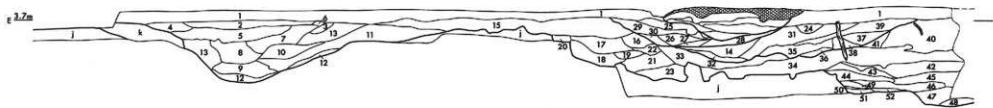


図196 F1区土層堆積図(1)～調査区北壁ABライン～(S=1/40)



- | | | | |
|-----------------------|---------------------------|-----------------------|-----------------------|
| 1. 黄褐色土 | 22. 黄白色砂質土 | 41. 黄白色砂質土 | a. 淤泥測量標 |
| 2. 黑色土（マングン粘多含む） | 23. 黄白色砂質土・灰黑色粘質土のミナ | 42. 灰白色砂質土・漂浮ざら | b. m. 黒色粘質土がラミナ状に複数ある |
| 3. 黑褐色土（マングン粘多） | 24. 黄白色砂質土上に白色砂質土の漂浮 | 43. 黄白色砂質土と漂浮黄色粘質土のミナ | c. 淤泥測量標 |
| 4. 灰褐色土 | 25. 黄白色砂質土 | 44. 黄褐色粘質土に白色砂質土が混ざる | d. 淤泥測量標 |
| 5. 灰白色砂質土 | 26. 黄白色砂質土 | 45. 黄褐色粘質土 | e. 淤泥測量標 |
| 6. 灰白色粘土 | 27. 黄褐色土上に白色砂質土が混ざる | 46. 黄褐色土上に粘土ブロックが混ざる | f. 淤泥測量標 |
| 7. 伝伝灰白色砂質土 | 28. 黄白色砂質土 | 47. 灰褐色土 | g. 黑色粘質土 |
| 8. 灰白色砂質 | 29. 黄白色砂質土上に白色砂質土ブロック状に漂浮 | 48. 黄褐色土・灰褐色土 | h. 黑色粘質土 |
| 9. 灰白色砂質土 | 30. 黄白色砂質土上に白色砂質土 | 49. 黄褐色土上に白色砂質土 | i. 黑色粘質土 |
| 10. 黄褐色砂質土・灰白色粘質土が混ざる | 31. 黄褐色砂質土 | 50. 黄褐色土・漂浮白色砂質土 | j. 黑色粘質土 |
| 11. 黄褐色砂質土・灰白色粘質土が混ざる | 32. 黄褐色砂質土 | 51. 黄褐色土・漂浮白色砂質土 | k. 黑色粘質土 |
| 12. 黄褐色砂質土・灰白色粘質土が混ざる | 33. 黄褐色砂質土上に白色砂質土 | 52. 黄褐色砂質土 | l. 黄褐色砂質土 |
| 13. 黄褐色土上に白色砂質土が混ざる | 34. 黄褐色砂質土上に白色砂質土 | 53. 黄褐色砂質土 | m. 黄褐色砂質土 |
| 14. 黄褐色砂質土・灰白色粘質土が混ざる | 35. 黄褐色砂質土・粘土ブロック状に漂浮 | 54. 黄褐色砂質土 | n. m. 黃褐色 |
| 15. 灰白色砂質土 | 36. 黄褐色砂質土 | 55. 黄褐色砂質土 | o. 淤泥測量標 |
| 16. 淡灰褐色砂質土 | 37. 黄褐色砂質土上に白色砂質土 | 56. 黄褐色土・漂浮白色砂質土 | p. 淤泥測量標 |
| 17. 黄褐色砂質土・灰黑色粘質土のミナ | 38. 黄褐色砂質土 | 57. 黄褐色砂質土 | q. 淤泥測量標 |
| 18. 黄褐色砂質土・灰白色粘質土が混ざる | 39. 黄褐色砂質土・漂浮白色粘質土のミナ | 58. 黄褐色砂質土 | r. 淤泥測量標 |
| 19. 黄褐色土 | 40. 青灰褐色砂質 | 59. 黄褐色砂質土 | s. 淤泥測量標 |
| 20. 黄褐色砂質土・灰白色粘質土のミナ | | 60. 黄褐色砂質土 | t. 淤泥測量標 |

図197 F1区土層堆積図(2) ~調査区南壁CDライン~ (S=1/40)



1. 黄褐色土
2. 黄白色細砂
3. 黄褐色粘土
4. 黄褐色土中に黄白色細砂が混ざる
5. 黄褐色土中に黄白色粘土が混ざる
6. 黄褐色土中に灰白色粘土が混ざる
7. 黄褐色土中に黑色粘土が混ざる
8. 黄褐色土
9. 黄褐色粘土
10. 黄褐色粘土上に黄白色細砂が混ざる
11. 黄褐色粘土上に白色粘土のうミナ
12. 黄褐色粘土上に黑色粘土が混ざる
13. 黄褐色土に黑色粘土が混ざる
14. 黄褐色土に白色粘土が混ざる
15. 黄褐色土に黄白色粘土が混ざる
16. 黄褐色土に白色粘土が混ざる
17. 黄褐色土に黑色粘土が混ざる
18. 黄褐色土に白色粘土が混ざる
19. 黄褐色土に白色粘土が混ざる
20. 黄褐色土
21. 黄褐色土に白色粘土が混ざる
22. 黄色粘土上
23. 黄褐色土中に黄白色粘土のうミナ
24. 黄褐色土
25. 黄褐色土
26. 黄褐色土
27. 黄褐色土
28. 黄褐色土
29. 黄褐色土
30. 黄褐色土
31. 黄褐色土
32. 黄褐色土
33. 黄褐色土
34. 黄褐色土
35. 黄褐色土
36. 黄褐色土
37. 黄褐色土
38. 黄褐色土
39. 黄褐色土
40. 黄褐色土
41. 黄褐色土
42. 黄褐色土
43. 黄褐色土
44. 黄褐色土
45. 黄褐色土
46. 黄褐色土
47. 黄褐色土
48. 黄褐色土
49. 黄褐色土
50. 黄褐色土
51. 黄褐色土
52. 黄褐色土
53. 黄褐色土
54. 黄褐色土
55. 黄褐色土
56. 黄褐色土
57. 黄褐色土
58. 黄褐色土
59. 黄褐色土
60. 黄褐色土
61. 黄褐色土
62. 黄褐色土
63. 黄褐色土
64. 黄褐色土
65. 黄褐色土
66. 黄褐色土
67. 黄褐色土
68. 黄褐色土
69. 黄褐色土
70. 黄褐色土
71. 黄褐色土
72. 黄褐色土
73. 黄褐色土
74. 黄褐色土
75. 黄褐色土
76. 黄褐色土
77. 黄褐色土
78. 黄褐色土
79. 黄褐色土
80. 黄褐色土
81. 黄褐色土
82. 黄褐色土
83. 黄褐色土
84. 黄褐色土
85. 黄褐色土
86. 黄褐色土
87. 黄褐色土
88. 黄褐色土
89. 黄褐色土
90. 黄褐色土
91. 黄褐色土
92. 黄褐色土
93. 黄褐色土
94. 黄褐色土
95. 黄褐色土

0 2m

図198 F1区土層堆積図(3) ~河道横断EFライン~ (S=1/40)

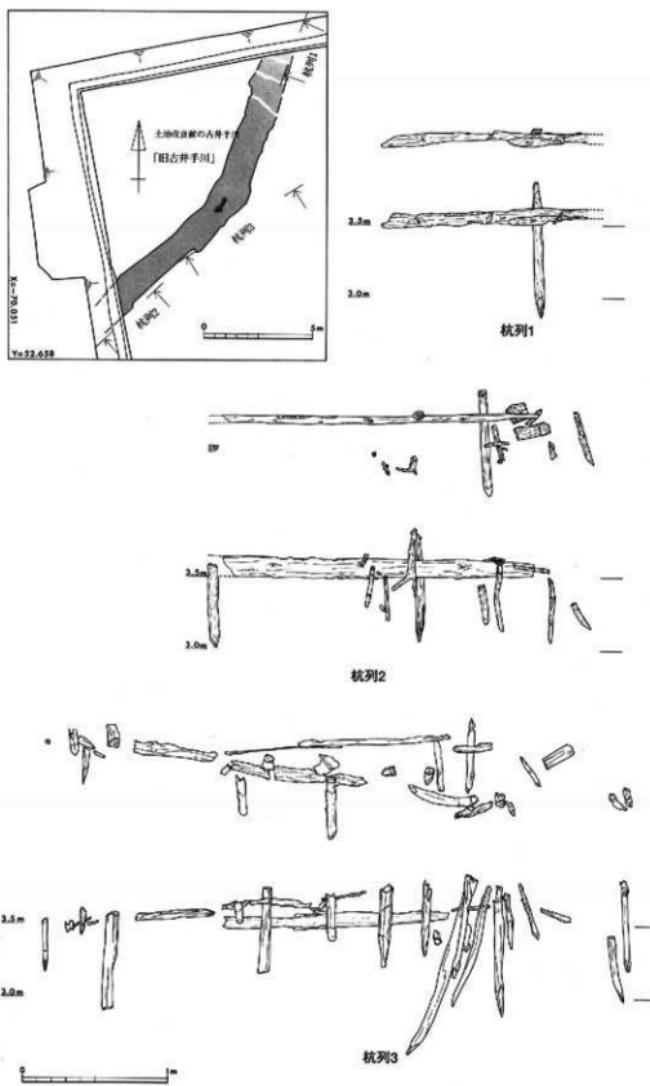


図199 F1区 旧古井手川に伴う杭列実測図 (川跡はS=1/200、杭はS=1/30)

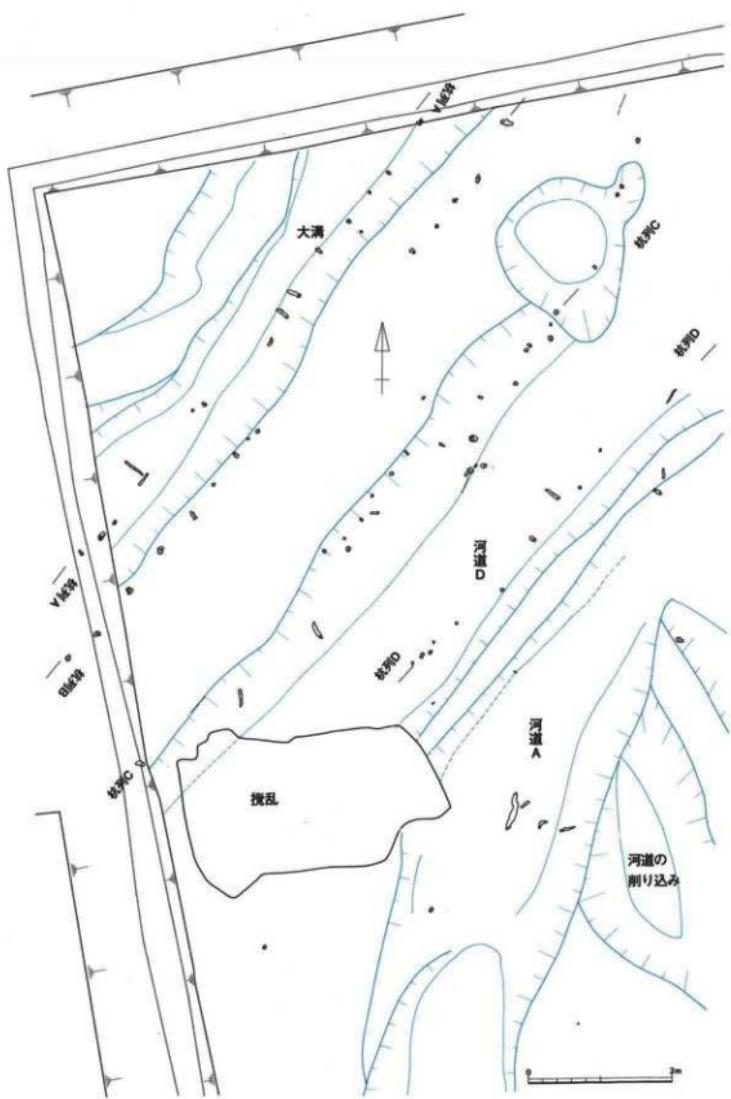


図200 F1区自然河道・大溝に伴う杭列平面図 (S=1/60)

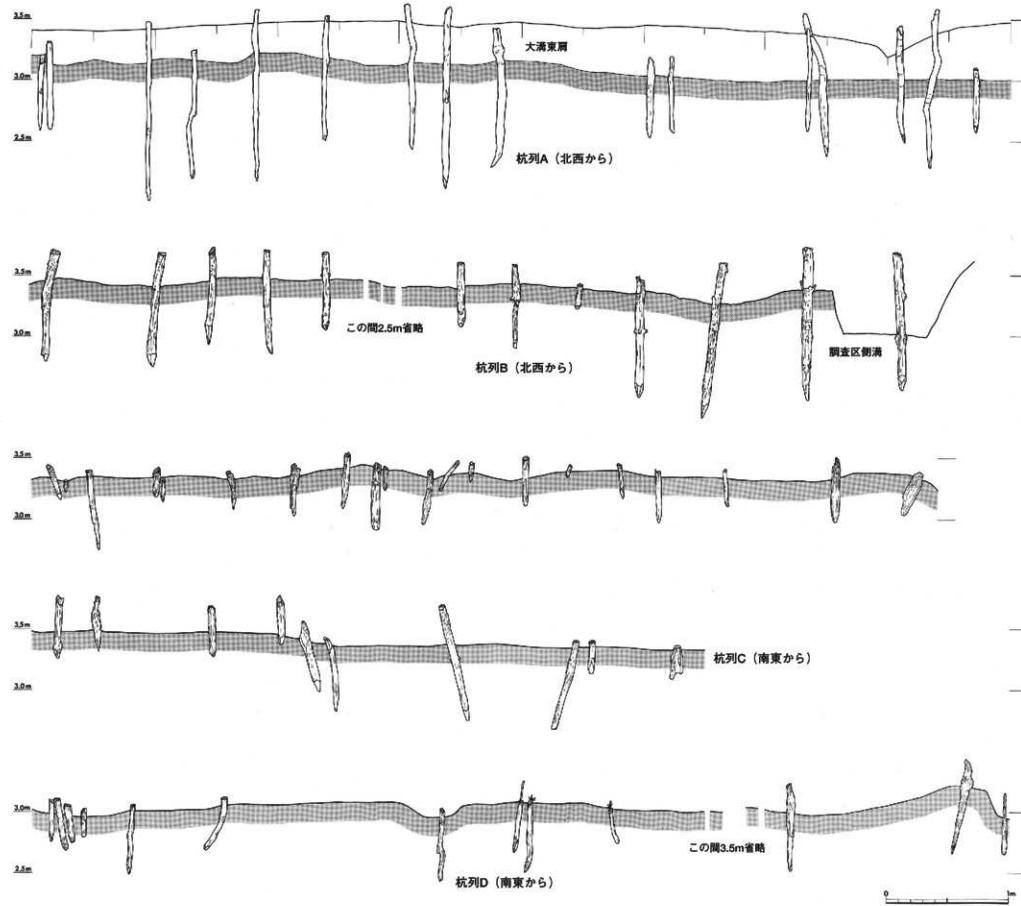


図201 F1区自然河道・大溝に伴う立面図 (S=1/30)

4. 自然河道出土遺物（図202・203）

図202の土器はいずれも河道内の粗砂へ疊層から出土しており、小片でかなり磨滅しているものも見られる。1～9は弥生土器。1と2は前期の壺。1は復元口径23.8cmで外面にはヘラ描直線文を施す。2は口径は不明。外面に6条のヘラ描直線文を施す。3は前期の無頸壺の小形品。口縁部を欠いており口径は不明。頸部に5条、やや下がった辺りに4条のヘラ描直線文を施している。松本I-4様式か。4は中期の壺。頸部に9条のヘラ描き直線文を施す。5は中期の壺。口縁部が短く外反する。6は中期の壺。口唇部に斜格子文施す。7は複合口縁の壺。口縁端部を欠く。8、9は底部。いずれも厚手の平底である。10～12は須恵器。10は高台を有する壺の底部。高台は外方に踏んばる形態である。11、12は壺の胴部。外面に平行叩き、内面は同心円當て具痕。13から20は中世土師器。16、17はやや厚手で坏の可能性もあるが、その他は皿と考えられる。13は復元口径7.4cm、器高1.4cm。14は復元口径8.0cm、器高1.5cm。18は最も残りが良い。体部は逆ハ字に開き、

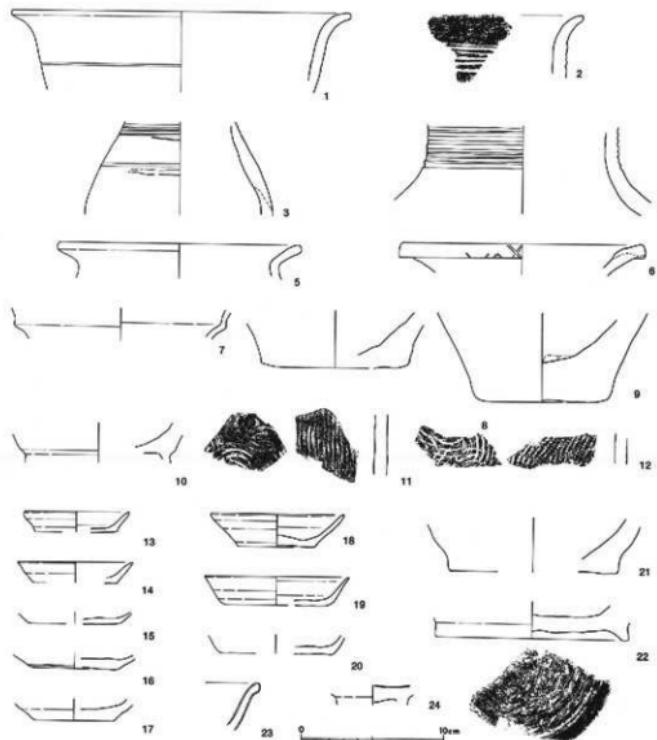


図202 F1区自然河道出土遺物実測図 (S=1/3)

底部の見込みはやや上げ底である。口径9.3cm、器高2.3cm、底径5.5cm。12世紀頃か。21、22は国産陶器。21が赤茶色、22が灰黒色を呈する。二点ともこね鉢と思われる。22は外方に少し踏ん張る高台を有する。高台径13.5cm。底部外面は回転糸切りの後指ナデを施している。23、24は青磁。23は外反する口縁部をもつもので上田D類。14世紀後半から15世紀前後。24は無文の椀。

図203の1から6は漆塗り椀。いずれも外面に黒色漆、内面に赤色漆が塗布しており、1と4以外は外面に赤色漆で絵が描かれている。出土した層位は河道内の粘質土層からであり、付近から投棄されたことが考えられる。1から3は口縁から体部にかけての破片で全形は窺えない。4から6は高台を有する椀。高台の断面はいずれも逆ハ字を呈するが、6のみ裏面のくりこみは浅い。6は漆膜の剥落によりロクロ成形の痕跡が観察できる。7、8は用途不明の木製品。7は板目取りの板材の側縁を加工したもの。現存する長さは22.5cm、厚さ7.5cm前後。8は工具などの柄かと思われるもの。基部から両側縁は木理と平行に丁寧な削りが見られる。上面は径3~4mmの小さな孔がある。

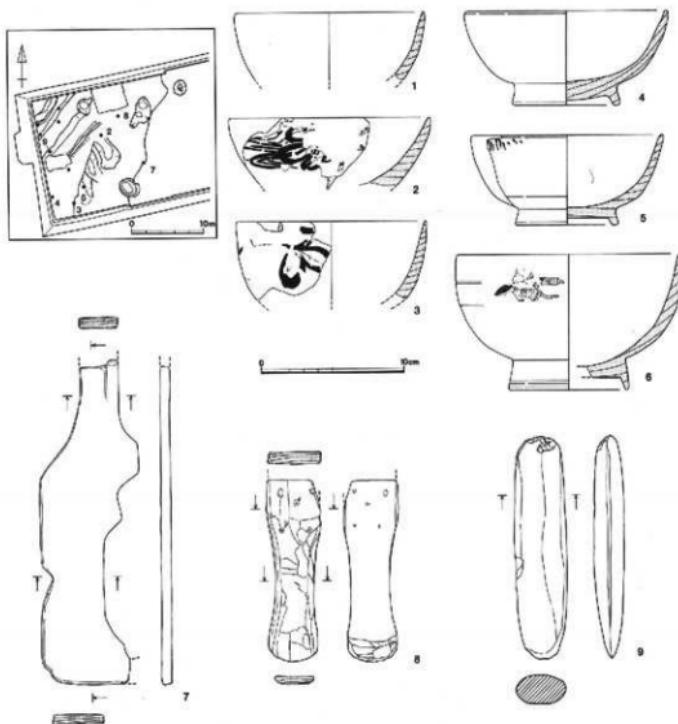


図203 F1区自然河道出土遺物実測図(2) (S=1/600、遺物はS=1/3)

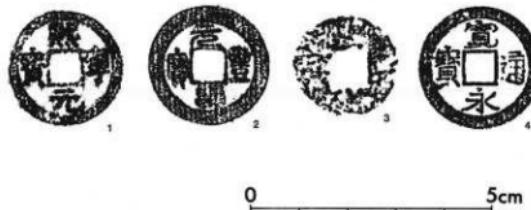


図204 F1区 出土銭貨拓影（実大）

5個空けられている。9は緑泥片岩製の小形の磨製石斧。長さ15.3cm、重量は200.88g。

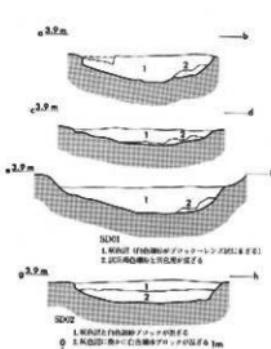
表 F1区出土銭貨観察・計測表

名 称	初鋳年	銭径(A)／銭径(B)	内径(C)／内径(D)	銭 厚	量 目
1 照寧元寶	1068	23.72mm 23.80mm	20.50mm 20.50mm	1.00~1.62mm	(7.4 g)
2 元豊通寶	1078	24.95 25.20	18.25 19.28	0.60~0.70	2.76
3 無文銭		20.58 21.42		0.60~1.21	1.44
4 寛永通寶	1636	25.43 25.35	20.76 20.31	0.70~0.92	2.85

銭貨（図204） 5枚出土している。このうち1の照寧元寶にはもう1枚別の銭貨が接着している。1、2は中国銭。1は照寧元寶で真書体、2は元豊通寶で篆書体である。3、4は本邦銭である。3は無文銭、4は古寛永。

参考文献 永井久美男編「中世の出土銭—出土銭の調査と分類—」兵庫埋蔵銭調査会1994
表は同書の「8. 古銭の計測」(9~10ページ)をもとに作成している。

このほか図化していないが煙管の雁首が一点出土している。



5. 河道東、微高地上の遺構（図205）

河道東側の微高地上からは溝2条と大型土坑3基を検出した（図195）。

溝跡（図205） 溝跡はいずれも河道と平行するように北東から南西に延びている。溝跡の底面の標高は均一である。埋土は二つの溝跡とも同じで、地山の淡灰褐色細砂をブロック状に含んだ粘性の非常に強い泥層である。SD01は断面U字形を呈するもので幅は0.87~1.17m、深さは11.0~23.0cm。検出長は38.7m。底面の標高は一定であり流向は不明である。SD02は調査区南西隅で一部を確認したもので、検出長はわずか4.8mである。幅0.98~1.25m、深さは15.0cm。二つの溝跡とも遺物は出

図205 F1区 SD01・02土層堆積図 (S=1/30) 土していなため時期は明確でない。埋土の状況と、河